



加國 リギヨール口述
日本 前田長太筆記

事蹟以前以後之歷史
全

東京 文海堂發兌

75-325



佛國
リギヨール口述
日本
前田長太筆記

事蹟以前以後之歷史
全

東京
文海堂發兌



自序

世に論者あり、往々奇怪の言を傳へて曰く、基督教に就ては、須らく先づ歴史的事實あらんとを要す、而して此事實同教に之ありとするも、吾人は上下數千年を距て、山河懸絶の地に在りて、今日之を確知するに由なきを奈何せん云々、嗚呼是れ果して何の言ぞ、我基督公教は歴史的事實の上に基かず、空中に架せる樓閣の如きものとなすか、知らずや同教創立以來、幾んど二千年の今日に至るまで、世界到る處に公明正大なる歴史的事實を示し來れるとを、同教の弘布は歴史的事實、同教の成立も又是れ歴史的事實、

而して其歴史的事實の較明顯著なるは、人得て疑ふ能はざる所、東洋の絶島に於て疑はんことするも得ず、蓋し其事實は皆信據するに足るべき史家によりて傳へられたるものなればなり、請ふ東西の歴史を繙き古今の傳記を閲せよ、我基督公教の基く所の歴史的事實の如く詳論明記せられて、千遍萬回の反覆を重ねられたる者果して何くにあるや、視よ、争ふ可からざる事實は吾人の眼前に歴々たり、何ぞや、坤圓球上に於て億兆の民の同教を信奉遵守したる事是なり、而して其之を信奉遵守したるは、同教の眞理美觀の爲なりと誤認する勿れ、勿論同教は眞理の教なり、善盡

し美盡せる教なり、然れども其眞理の教、善美の教なる丈けそれ丈け、擾々たる人間の私慾と氷炭相容れざるを忘るべからず、嗚呼それ何れの代の人間か私慾なからん、而して一たび私慾其心を攪亂するときは、眞理に對して如何なる口實を設け、如何なる反抗を試みざらんや、然らば則ち宇内の有衆が、心中の百情萬欲を制壓して、眞善美を以て世に立つ我基督公教を信奉遵守したるもの、他に原因なくんばあらず、然らば其原因何れに歸すべき、歴史は明に答て曰く、同教に就て目撃耳聞する所、餘りに歴然たる事實にして、之を拒否埋没するを許さざればなりと、唯々然り、

此拒否埋没す可からざる歴然たる事實は、坤輿球上の人民を驅つて、南北東西より同教に歸信せしめたるなり、是を以て同教創立の當時より、其教は議論の道を以て傳へられたるにあらず、事實の眞を示すを以てなり、故に曰く「人々目撃したり、故に信奉したり」と、古往今來、同教の眞理を攻撃する論者は極めて鮮少なりとす、今日に於ても少しく知慮ある人士に至りては、同教の始祖耶蘇基督を以て、當代の一大人傑と見做さざる者はなし、唯だ反對論者の疑はしと唱道する所は、同基督の歴史なる福音書に在るなり、然れども記せよ、此歴史は一千八百有餘年來、各種の道を以

て研究せられ、論難せられ、攻撃せられて、一字一句の末こそ雖、周到緻密なる評論に上らざるなきを、而して其論評の結果如何と云へば、始終一轍に歸せり、曰く、同歴史中精確ならざるもの一畫もなしと、果して然らば、歴史的事實は基督公教に闕如すと云はんよりは、同教の屹立する所の基礎、同教の立脚する所の地磐は、全く歴史的事實に在りこそ謂はざるべからず、然り、同教は實に教理と云はんより、寧ろ事實と云つて可なるが如し、又實際に於ても、教理たりしより先きに、既に事實にてありたり、而かも其事實は如何なる方面より觀察するも、歴史あつてより以來、最も不

可思議にして、又最も較彰正確なるを見るなり。
曩者某記者吾人に教へて曰く、一宗の始祖に就きて、其人
物徳性を論ぜんご欲せば、須らく二個の異なる着眼點より
せざるべからず、一は歴史上の事實的批評なり、一は理想
上の評論なり云々ご、余不敏ご雖、聊か吾教の開祖耶蘇基
督の性格徳行を畫かんが爲め、試に前者の方道を探りた
り、天若し我に假すに年を以てせば、又々後者の方道を探
りて充分論評する所あらんごす、但だ今回は着筆倉卒に
出で、行文頗る難澁、覽者文を以て其意を捨つるなくんば、
幸甚々々。

明治二十九年七月初七リギヨル師父の意を承けて

前田長太 識

事蹟以前以後之歴史大綱

緒論

眞誠なる宗教を尋究する二個の方道

哲學的觀察
歴史的觀察

本論

預言

定義

先言果して事蹟に先だつ事

要件

事蹟果して先言の如く成就する事

事蹟の性質たる人知を以て到底預観する能はざる事

典據

福音

完具

眞實

外容の證

内容の證

結論

福音書の眞實に反對する二個の難問

機密
奇蹟

二

事蹟以前以後之歴史小目

緒論

哲學的觀察

歴史的觀察

宗教を排斥する理由

基督公教は他の宗教と同一視すべきものにあらざ

公教要理は人生主要の大眞理を含蓄す

公教要理は人間萬事の大問題を解釋す

歴史の定義

歴史の確實

歴史の基督公教に就て教ゆる所

預言

定義

要件

一

九 七 七 六 五 三 一

頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁

本論

典據

福音完具

外容の證
眞實
内容の證

預言の定義

眞誠なる預言に所要の條件

預言の第一の要件

基督公教の存在は預言の報道したる昔時の事蹟を今日に

繼續する所以

猶太人民の存在は昔時の預言を今日に公示する所以

預言書の後人の作ならざる證論

猶太人の預言を抹却せざる理由

猶太人民の不可思議なる運命

猶太人民に對する上天の攝理

十三頁
十三頁
十四頁
十七頁
十九頁
二十二頁
二十三頁
二十四頁
二十五頁

預言の第二の要件
預言の第三の要件

預言の報道したる事蹟

基督の性行

猶太國の滅亡

公教の成立

第一の預言

同預言の應驗

第二の預言

同預言の應驗

第三の預言

同預言の應驗

第四の預言

二十七頁
三十頁
二十九頁
三十頁
三十一頁
三十二頁
三十九頁
四十頁
四十一頁
四十二頁
四十三頁
四十三頁
四十五頁

同預言の應驗	四十五頁
第五の預言	四十六頁
同預言の解説	四十七頁
同預言の應驗	四十八頁
第六の預言	四十九頁
同預言の應驗	五十頁
第八の預言	五十三頁
同預言の應驗	五十四頁
第九の預言	五十五頁
同預言の應驗	五十七頁
第十の預言	五十九頁
同預言の最も注目すべき所	六十四頁
預言と應驗	六十六頁

預言と應驗	六十七頁
同預言の最も注目すべき所	六十九頁
第十一の預言	七十頁
同預言の解説	七十二頁
同預言の應驗は反對論者の否定する能はざる所	七十六頁
第十二の預言	七十九頁
同預言の應驗	七十九頁
第十三の預言	八十頁
同預言の應驗	八十頁
未だ應驗なき預言	八十二頁
同預言の必ず應驗あるべき理論	八十二頁
福音を讀む者は第一公教會	八十六頁
.....第二異端者	八十七頁

.....第三猶太人

八十七頁

.....第四無神論者

八十八頁

福音を記したる者は第一不信者、猶太人にあらず

九十頁

.....第二異端者にあらず

九十一頁

.....第三公教會にもあらず

九十二頁

福音の典據に對する第四世紀の證

九十三頁

.....第三世紀の證

九十四頁

オリゼーヌ
タルトリアン

.....第二世紀の證

九十五頁

イレ子
ジュステン

.....第一世紀の證

九十七頁

イグナシオ、ポリカルホ
バルナバ、ルカ
クレメンヌ

福音の典據に對する教外者、異教者の證

百 一 頁

ワレンチノ、ホルヒール
クノスチツク、ジュリアノ
セルヌ

福音の典據に反對する詰問(偽福音の事)

百 五 頁

福音の完具(古來増減變更なき事)

百 六 頁

福音書の寫本にも誤謬なかりし證論

百 九 頁

福音は基督及其教の正史

百 十 五 頁

福音の眞實に對する三個の證論

百 十 七 頁

第一使徒の欺かれざりし事

百 十 七 頁

第二使徒の欺くを欲せざりし事

百 十 九 頁

第三使徒の欺くと能はざりし事

百 二 十 三 頁

當初基督公教に歸依したる者は往々皆一代の人傑

百 三 十 五 頁

福音の眞實に對する外容の證

百 三 十 八 頁

.....内容の證

福音は耶蘇基督の寫眞鏡 百四十八頁

人物を描寫する理法 百四十九頁

福音者の描寫したる基督は自國に類例なし 百五十頁

.....海外にも類例なし 百五十一頁

..... 百五十四頁

耶蘇基督は天下百世の標本 百五十六頁

福音者の描寫したる基督は外教者の見て以て感驚に堪へずとする所 百六十頁

基督の才學の感驚すべき所 百六十頁

基督の徳行の感驚すべき所 百六十二頁

福音者の提出したる基督は猶太人民の希望思想に全く反對せり 百七十頁

福音者の提出したる基督は當時の外教國民の状態にも撞突せり 百七十六頁

福音者の描寫したる基督には權謀詐誑の名を附する能はざる證論 二百五頁

福音者の描寫したる基督には狂愚偽善の名を附する能はざる證論 二百九頁

福音者の描寫したる基督に神の無限顯はるゝ證論

結論 機密 奇蹟

機密の解説 二百二十八頁

機密の定義 二百二十九頁

人間の機密 二百三十頁

動植物の機密 二百三十一頁

鑛物の機密 二百三十二頁

機密の區別 二百三十五頁

第一種の機密 二百三十六頁

一粒の米一顆の椎子にも機密宿る 二百三十八頁

吾人の言語も亦是れ機密に屬す 二百四十頁

第二種の機密

日蝕月蝕の原因

二百四十頁

第三種の機密

二百四十五頁

同機密の信認し得べき證論

二百四十五頁

三位一體の機密

二百五十頁

聖子降生の機密

二百五十頁

三位一體の機密の類例

二百五十二頁

聖子降生の機密の類例

二百五十三頁

歴史の性質

二百六十三頁

奇跡は歴史的事實に異なる所なし

二百六十三頁

奇跡に二事あり

二百六十五頁

其事跡を否定する者は一人もなし

二百六十五頁

其原因に就きて初めて一は一非の議論起る

二百六十六頁

其原因豈認め難からんや

二百六十七頁

奇跡の有り得べき證論

二百七十一頁

世界の存在は一大奇跡

二百七十二頁

奇跡を否定する者の心事

二百七十五頁

絶體的に奇跡を否定する論者の説は古今東西の輿論に反す

二百七十六頁

字内の法則を城壁とする學者の名説を駁論す

二百七十九頁

造物主と被造物との區別を混同する學者の名案を破却す

二百八十五頁

奇跡は基督の神なるを證明するに必要

二百九十頁

基督の奇跡の公明正大なるは反對者の拒否する能はざりし所

二百九十二頁

反對者は愛國の美名を假りて基督の奇跡を打消さんと務めり

二百九十六頁

基督の奇跡と欺騙漢の奇跡の區別

二百九十九頁

基督の卑怯なる死は却て是れ一大奇跡

三百五頁

基督公教の成立は凡ての奇跡中最も公明正大にして又最も確乎不拔の者

三百九頁

今日奇跡の数の減少したる所以

本篇の結論

十二

三百三十六頁

三百四十九頁

事蹟以前以後之歴史

佛國 リギヨール 口述
日本 前田長太 筆記

緒論

世の學者が、宗教上の問題とならば、是非の論なく之を排斥する理由は、蓋し一にし
て足らざるなり、今其最も著明なるもの一二を擧げんに。

宗教を研究して真理に遭遇するを畏るゝ事是れ其一なり、真理に遭遇するを畏るの語
誠に奇なり、然れども實際なり、何となれば彼等は真理に由りて、従來の暗所欠點を照
されて、今後の言動を規定せらるゝを忌憚すればなり、古經に曰く「善を爲さざらん
が爲に、故さら知るを欲せず」と、此語今より三千年以前の古書に記載せられたるを
見ば、斯る事柄の決して耳新しき事ならざるを知るに足る、然れども今茲に之を詳論



するは、全く無用の勞なりとす、蓋し世人は疾くより之を知悉すればなり、果して然りとせば、故さら目を閉ぢて真理の光を嫌ふ者あるは、決して怪むに足らざるなり。第二の理由は、一種特別なり、蓋し多少學問的臭味を帯ぶるに由る、何ぞや、東西各種の宗教を講究するに、或る點に於ては全く同一、或る點に至りては全く逕延して、到底學問上の道を以て之を律すべからざる事是なり、其由つて來れる起源を尋究すれば、正確なる歴史は一もなく、創始往々曠荒の世に漠たり、其傳記の如きも半ば明かに、半ば暗ふして、多くは接續連結の鎖なきを以て、之に就て其眞なるものと其偽なるものとを判別するは、極めて難し、さりとて現在の宗教其物を捉へて、其教ゆる所の教義倫理等を道理の裁判に懸け、論理の規則によりて之を講究すれば、猶更學理に適合せざる點多きを認めらる、即ち前後衝突、本末貫連せざる所極めて明瞭なるを以て、始あり終あり序あり順ある學問は、之を採用するに堪へず、故に宗教の學問に於けるは、宛も殘材の一大築造物に於けるが如き觀あらしむ、斯る殘材壞木は到底真理の一大殿堂を組成する能はず、道理の力も又之を奈何ともする能はず、世の學問も

是に至ては空しく手を拱して傍觀するのみ、嗚呼是れ東西各種の宗教の、人生二個の光なる歴史と哲學とに於ける觀なりとす、世の學者の宗教を擯斥する所以正しく此に在るなり、故に古より學者往々好奇の心に驅られて之を學びたるは聞く、身を修め行を正ふするが爲に之を學びたるは未だし、蓋し彼等は毎教必ず一國一民の特色あるを見て、之が講究面白しと思惟するなれど、之が信奉に至りては、學識ある者の爲すべき所にあらずと見做したればなり、偶々之を信奉する者あるときは、見て以て迷信家となす、己れ之を信奉すと云はるゝときは、時俗止を得ず信奉をまねすと答ふ、是れ實に古今學者の宗教に對する心なり。然りと雖我基督公教は決して斯の如く見做さるべきものにあらず。彼れは哲學に訴へらるゝも、歴史に徴せらるゝも、牢乎として抜く可からざる基礎を有す、故に人若し我公教を他の宗教と同一視して、彼此の間に毫も區別なきが如く見做す者あるときは、己れの愚暗と惡意とを天下に發表するに過ぎざるなり、識者の眼より見るときは、彼等の心事は明かに看破せらる、即ち彼等が宗教を千篇一律視して、我公教をも其中に

混同埋没せんとするは、全く他の宗教に對する冷々淡々の口實を、我公教に對しても利用せんとするに外ならざるなり、其言に曰く、薄弱淺露の宗教、固より齒牙に懸るに足らず、之を信奉するが如きは、迷信家のみと、乃ち知る、我公教をも迷信家の信奉する教と見做し、此に對して務めて冷熱を感せざらんとを裝ふに過ぎざるを。

然れども我基督公教は決して斯の如く薄弱淺露の教にあらず、其明證は他の宗教の如く學理的の研究を畏れざるに在り、彼れは寧ろ自ら先んじて學理的の研究を呼び起すものなり、哲學に訴へんと欲せば、哲學を持ち來れ、歴史に徵せんと欲せば、歴史を引き來れ、余は好んで我公教を二者の裁判に懸けんと欲す、然れども今之を哲學上より觀察して論ずるは、一朝夕の業にあらず、仔細に之を論せんと欲せば、恐くは汗牛充棟の卷冊を出さん、故に茲には單に歴史の一方より考察を下して立言せんと欲す、然りと雖哲學上の觀察も全く放棄するに忍びざるを以て、聊か先づ左に其一端を論せんとす。

我基督公教に「公教要理」と題せる一小冊あり、是れ信者の子弟若くは志願の諸氏の手

に授くるもの、固より教の詳細を盡したりと云ふ書にはあらず、然れども事は凡て麤より細に入り小より大に入るを要す、請ふ試に此小冊子を採りて仔細に考へられよ、二事の最も注目すべき點あるを見出さん。

其一は前後矛盾、本未貫通せざる點の秋毫も之なき事はなり、是れ此冊子小と雖も萬を含む、而して其凡ては、接續連合して、完全なる宗教學を組成す、即ち先づ第一に人生終焉の目的たる一大問題を明かに解釋してより、人の此世に於て信すべき事、行ふべき事、又其終焉の目的に達せんがために採るべき方法手段等、凡て明瞭に、單純に記載して、三尺の童子にも了解し易からしむ、是故に或る半熟學者の如きは、此單純なる事を見て、是れ兒童の讀むべきもの、識者の取るに足らざる者なりとまで輕蔑したる事あり、然れども記せよ、眞理は凡ての人々に知らるべきもの、老幼婦女子にも能く接近せらるべきものたらざるべからず、是を以て眞誠なる學者は、此單純を見て却て驚歎するに至るなり。

其二は此單純なる一小冊子にして、能く人間萬事の大問題に一大満足の答辨をなし得

公教要理
は人生主
要の大眞
理を含む
す

公教要理
は人間萬

る事是なり、此一事は毎度之を讀む哲學者の腦を打つ所、誠に感すべきの至りなり、若し常識ある人にして自家心中の情欲と先入とを制する力ある者ならば、個人、家族、國家に要する圓滿幸福を求むるの道は、此單純なる一小冊子に載する所の教理を守り守らしむるに在ること、一目して了解するを得ん、何となれば我基督公教者にあらざる人民に於ても、個人、家族、國家に取りて不幸と兇惡とは、全く此小冊子に載する所の教理に背反するより來るを認めればなり。

嗚呼是れ此二事は哲學上より觀察して然るもの、讀者は此道を以て自ら我公教の如何を裁判するを得べし、且眞理の精神に於けるは、猶ほ日光の眼に於けると一般、自ら明に知り得らるゝものなるが故に、少しく注目して裁判したらんには、必ずや我公教の眞理なるを認めざるを得ざるに至るべし、若し猶ほ然らずんば、是れ其罪讀者の裁斷の正ならざると其本心の直ならざるとに在るなり。

若夫れ哲學の考察にして、猶ほ我公教を信奉せしむるに足らずとせば、請ふ眼を轉じて歴史上より觀察を下し、須らく此教の何れより來れるや(本源)、又如何なる勢力に

基いて(基礎)、人をして遲疑なく、躊躇なく之を確信せしめ、忠義に、誠實に、身骨心命を擲つまでに之を固守せしむるや否やとを講究せよ、蓋し是等の答は備さば載せて歴史に在り、我基督公教の眞理特色、吾人公教者信仰の基本主因も亦皆茲に存す、而して此歴史的證據は、苟も誠心一片の人ならんには、如何なる愚者にも了解せらるゝの便あり、古來學者の信仰に導かれたる例は、亦往々此歴史的證據に基きたるものなり、蓋し斯く照され斯く強らるゝときは、如何なる人知、如何なる學問も、到底之には抵抗するを得ず、勢ひ干戈を捐て、信服せざるを得ずと思考するに至るなり。

抑も歴史とは何ぞや、自ら目撃し、自ら經驗するを得ざる事跡を吾人に知らしむるの道是なり、詳言せば、吾人現存の時代と土地との外に行はれたるものにて、之を聞見したる人の記傳に據らずんば、到底知るを得ざる出來事を知らしむるもの即是なり、人生僅か五十年、而して天地の剖判、人類の初生以來の事跡を坐なから知悉するを得るは、全く是れ歴史の賜なり。

歴史に據りて知悉する事柄は、吾人自ら眼前に於て目撃するもの、如く正確なり、吾

人は常に此二者の間に區別を置かず、試に想へ、明治の今日に棲息する吾人にして、豊太閤、歴山王、若くは塞撤を見たる者、誰かある、然れども此三傑の存在に就ては、己れ自ら目撃したる如く確信せざる者は、恐くは一人も之のあらざるべし、蓋し此三傑に就て語れる歴史の多々なる、到底之を疑問に附すべからざればなり。

勿論歴史の傳ふる所にして、審査なく信じて得可からざる事あるは、言を待たず、故に若し吾人にして確信疑なからんを欲すれば、須らく先づ其事跡の性質と其之を傳ふる史家の員數、性行とを考察せざるべからず、若し事跡にして有名顯著、其性數國數世の民に知れ渡り、又之を傳ふる史家にして方端正直、其數極めて多く、而かも其人にして其語る所を明かに知り(一)、語つて人を欺くも己れに毫も益なく(二)、欺かんと欲するも當時を目撃せる多數者の反叫、到底其意を果す能はざらしむる地位に立ちながら(三)、其傳ふる事實にして彼是全く符節を合するが如くならば、吾人は身、當國當代に在りて之を目撃せるが如く確信するを得るものなり、是故に一國一民の歴史を編成する較明顯著なる事跡に至りては、之を拒否せんとするの念何人の心頭にも起り

歴史の公
に就て
教ゆる所

來らず、若し日本國に於て徳川の歴史、若くは足利の歴史を拒否せんと欲する者あらば、必ずや大方の笑を招かん。

然らば歴史は基督公教に就て吾人に何を教ゆるや、吾人は歴史に據りて同教の開祖の存在と性行、及同教の創立せられたる方道と同教の爾來奏し來れる功果等を知るとを得。

基督公教の創立は較明顯著なる事跡なれど、此事を知らんと欲せば、須らく余の「古事新論」に論述したる事を想起せざるべからず、同書に論述したる事は何ぞ、他なし、凡そ知あり識ある人ならば、必ず已に反省して人生運命の一大問題に瞑目沈思すと云ふ事、又之が考究に當りて東西の人民、孰れも其神を神として尊拜し、就中贖罪贖過等の儀祭を多々にして、務めて神の怒を慰解せんことを試みたりと云ふ事はなり、語を換へて之を言へば、東西の人民は、有らゆる誓願、有らゆる祭典を盡して、一切人間の罪過を贖ふ救主を翹望祈求せりと云ふ事即是なり、是に於てか吾人の問題を解く極めて易々たり、今夫れ救主にして果して此世に降來したりと假定せんか、其出現は古今未

曾有の一大出來事たるべきや明なり、何となれば此出現は正しく世界万民の希望要求に一大満足を與ふる事なればなり、又隨て其出現以還は、救主の名聲功業は轟然として四海六合に響き渡るべき事必然たり、何となれば人生の未來命運に對せる疑問は此に依りて解かれ、人心の是迄懐ける不安は此に依りて慰せらるゝを得ればなり。

若果して救主の降來、隨て其教の創立にして此の如く世界萬民の幸福を來す一大事實ならんには、其事實は歴史ありて以來、最も較明、最も顯著なるべきや必定なり、然る時は又救主降來の事實に對しては、尋常一様の知認、例へば古昔救主と稱せられたる人ありたりと云ふ位にては、決して満足する事能はざるなり、今夫れ古今の英雄、例せば希臘の歴山王、佛國のナポレオン帝の如き事跡は、之を識認すると否らざることは、吾人の言動に左したる影響を及すべきものにあらざるが故に、之を承認せしむるの證多々なるを要せず、昔時希臘に豪傑あり、歴山王と云ふ、近くは佛國に英傑あり、ナポレオンと稱すと云ふ位にて、吾人は容易に之を信するを得、唯だ夫れ救主に至りては然らず、其一舉一動、一語一默は、吾人の言動に大なる關係あるものなるを以て、其性

行は明かに歴史に記載せられて、讀者は其存在を拒む能はず、信者は之に依頼して未來永劫まで其心休すと云はるゝ程ならざるべからず、故に尋常の歴史的人物に就て、一の證據足らば、救主の事跡に就ては、千万の證據なくんば足らざるべし、是れ余が救主降來の事實は、振古以來最も較明、最も顯著ならざるべからずと云ふ所以なり。天地剖判以來斯の如き救主として知らるべきもの、他に一人も之なかりしが故に、其歴史の如きも他の歴史とは全く相異なりて、一種特殊の性質を有す、斯の如き救主にして他に其人なくんば、其歴史に於ても他に其類例を見ざるは、蓋し當然の事なるべし、余は今其歴史の他の歴史に異なる諸點を殘らず茲に擧ぐるの邊なきを以て、其最も特殊の性質を帶ぶる一點のみを記せんとす。

抑々一人物の歴史なるものは、其人死し、其事成就したる後に至りて、一回のみ記さるゝを以て常とす、然るに救主及其爲したる事跡の歴史は、救主の死生以前と、其事跡の成就せる前後との二回に編成せらる、即ち一は其降生以前、之を翹望せる人々の爲めに編成せられ、一は降生以後、將來の人々の爲に記載せらる、而して前者と後者

とは全く相冥投暗合して、宛も符節を合せたるが如きは、實に以て奇と謂はざるべからず、試に前後二個の歴史を開きて見よ、前者が救主の降來、性行等凡て其一身に屬する事項に就て正確緻密に記載したる所は、救主の人と爲りと又其行ひたる事業等を記録したる後書出で、悉く之を證明したるに過ぎざるが如し、何となれば前者は後者に記せる事跡の預言書、後者は前者に載せたる預言應驗書とも謂ふべくして、前後二個の歴史は全く相關連して、恰も鳥の兩翼に於けるが如く、車の兩輪に於けるが如き觀あればなり、救主の人と爲りを證明するには、此の前後二個の歴史は實に其兩面として見らるゝなり、而して他の一方より觀察するときは、其記載する所は皆基督公教の眞理を發揮する證據、基督教的信仰、希望の眞誠なる基礎たらざるはなし、余は今此證據、基礎を陳述せんことを欲するが故に、以下此二個の歴史即ち吾人の常稱する預言と福音に就て明記詳論する所あらんとす。

事跡以前之歴史

預言

預言の定義

預言とは何ぞ、事の未だ成就せざる以前に當りて、豫め之を先言前報する事是なり、猶ほ之を簡略に云へば、直に是れ事の成就せざる以前の先言前報とも謂ふべし。

斯く云ふも、凡ての先言皆預言なりとは謂ふ可からず、吾人は未だ來らざる事に就て屢々先言す、而して其事吾人の先言に違はず出來するも、敢て不可思議とせず、蓋し是れ原因を覓て結果を先言する事誠に易々たればなり、故に此の如き先言は固より眞誠の預言とは謂ふべからず。

眞誠なる預言に所
要の條件

然らば則ち、眞誠の預言とは如何なるものぞ、曰く少くとも左の三事を含むものなり、
(第一)先言果して事跡に先だつ事、(第二)事跡果して先言の通りに成就すべき事、(第三)事跡の性質たる人知を以て到底預窺する能はざる事、又其先言との吻合決して偶然の結果に歸するを得ざる事即是なり、故に其記載する事跡の未だ成らざる以前に、

早や既に歴史と云ふ名稱を附せらるべきものは、取りも直さず是れ眞誠の預言なり、而して救主及其教の創立に關する預言の如きは、實に事跡以前の歴史と云ふべきなり、何となれば。

(其一)其預言は果して事跡に先だてばなり、此點に就ては寸毫も疑を容るゝ能はず、抑々基督公教に關する書に二種の區別あるは、人の皆知悉する所、一は舊約書、救主降生以前に記載せられたるもの、一は新約書、降生以後に編成せられたるもの、而して吾人の今言ふ預言は、載せて前者の舊約書に在り、是は注意まで一言す。

抑々此預言を載する舊約書は、何れの年代に記されたるや、全部固より同時代に記されたるものにあらず、然れども今其舊約全書と稱せらるゝ一事に就て考ふるに、一の明確なる事之あり、何ぞや、舊約書の全部は元とヘブレイ語に記録せられ、救主降生前二百八十五年、埃及王ブトレメオ第二世の時に當り、悉く希臘語にて翻譯せられたりと云ふ事はなり、是に由りて之を推測するときは、舊約書に載する預言は、少くも救主降生前三百年間にありたる事を知る、隨て其報する所事跡に先づ事少くとも三百年

前なりと謂はざるべからず、又一の確乎たる事之あり、他なし、舊約書の目錄に編入せられたる最終の預言書は、マラキヤの書なりと云ふ、而して此書の作者マラキヤは、救主降生前四百十二年より四百零五年の間に預言せり、然らば是に由りて斷ずるときは、最終の預言と雖、其報する事跡に先たつ事四百年餘なりと謂はざるを得ず、今又他の一方より觀察して論せんに、預言中の最も舊きものは、每瑟の書に載するもの是なり、蓋し每瑟の書は舊約の開基、他の書は皆其棟壁となり、家蓋となりて其上に附隨す、而して彼の每瑟なる者は、救主降生前一千六百年代の人なると明けし、何となれば最も信據せらるゝ年代記に據るときは、每瑟の死去は、救主降生前一千五百八十三年に當れりと云ふ、然らば此事實に基いて斷定を下すも、舊約書に載する預言は、上一千六百年代に生息せる每瑟より、下四百零五年に預言せるマラキヤに至る迄の間に記載せられたりと謂はざるべからず、乃ち知る、救主及其教に關する歴史の事跡を先づと極めて悠遠なるを。

然りと雖、是等の預言の記されたるは、今を距る實に三千有餘年前、而かも山河懸絶

する異邦に於てせられたりとするときは、今日の吾人々民に取りては空吹く風と一般、何の感動をも與ふるなし、去れば幾回之を讀むと雖、毫も冷熱を感ずるなし、却つてルーソーの之に就て吐露したる意見は、自然吾人の念頭にも浮び出づるなり、其言に曰く

「預言を信せんと思ふには、我耳其先言を聞き、我目其報ずる事跡を見ん事を欲す云々」云々。

然れども、今日吾人自己の目を以て二千年以前に成就せられたる事跡を見、自己の耳を以て三千年以前に報道せられたる預言を聞くは、言ふ可くして行はれざる事なり、而るに如何なる幸運にや、此不能の一事、天主の攝理の格別なる道によりて、今日之を能するを得るは、誠に奇と謂ふべし。

先づ其事跡に就て云はんに、吾人は教主と上下二千年の時代を距るを以て、今日教主其人を吾人の目をもて直接に見る能はざるは、言を待たず、然れども直接に其人を見る能はざるも、豈間接に之を見るの方なからんや、上下幾百千年を経ると雖、其言を

基督の存在は
預言の報は
道したる報
昔時の事
跡を今日
に續す
る所以

讀んで、其人を仰望し、其事跡を見て、其人の風貌を想起することは、必ずしも難からず、況んや教主の如き尋常歴史的人物と大に異なるあるに於てをや、彼れの人間として世に降れるや、幽霊の如くに朦然たるにあらず、彼れの天下人民の間に歩めるや、尋常一凡人の如く名もなく跡もなき比類にはあらず、勿論其人は既に世に現存せず、二千年以前天に昇りぬ、然れども其事業は今仍は現存す、而も赫然として、炳然として世界到る處に現存す、即ち彼れの創始せる基督公教なるものは、二千年以前の古より今日に到る迄、連綿繼續し來りて、普天の下率土の濱弘布せられざる處なし、人文日進の開明國は云ふも更なり、如何なる野蠻未開の國に至りても、此教必ず存す、都城市街は申すも恐か、如何なる寒村僻地に至りても、此教必ず存す、凡そ人類の息する所、舟車の通ずる所、未だ曾て此教の弘布あらざるはなし、而して此教や屹然として泰山の安に居り、牢乎として盤石の堅さに坐するを以て、哲學者に打たるも、政治家に打たるも、異端者に撃たるも、離教者に撃たるも、毫も動搖を來すなく、毫も震撼を告ぐるなし、畢竟如何なる人が、如何なる時に、如何なる道を以て、之に攻

撃の鋭鋒鐵槌を投ずるも、彼れに取りては、螻蛄の斧のみ、亦何をか爲さん、因て余は是に於て立論せんと欲す、今夫れ茲に一帶の川ありと假定せん、其川如何に長流廣波と雖、一の源ありて流れ來れるとは疑なし、而して人も亦此長河一帶の流を見て、心忽ち其由て來れる水源を追想するものなり、今や基督公教の川は、長く逝き廣く流れ、湯々として天下到らざる所なし、誠には是れ長江一帶の廣流なり、然らば則ち、近く其川に接して、遠く其源に遡り、目に其流るゝ狀を見て、心に其由て來れる本源を想ふは、必ずしも難事にはあらざるなり、結果を見て、原因を知る、原因の如何は亦結果の如何によりて見はる、豈に基督公教の如何を見て、基督の性行、事業の如何を知るに難からんや、而して基督の性行事業は、即ち是れ預言によりて報道せられたる事跡なるを知らば、吾人は身二千年以後の今日にありながら、曾て預言の報道したる事跡を眼前に目撃し居るなり、譬を除去して實を採り、直言を以て之を切論せば、基督公教は取りも直さず是れ基督の性行事業、基督の性行事業は取りも直さず是れ預言の報道したる事跡なり、去らばルーソーの我目之を見んと欲すと云ふ事跡は、基督公教と

猶太人民
 の存在は
 昔の預言
 を今日に
 公示する
 所以

云ふ一大長江となりて、今現に吾人の眼前に流れつゝあるを以て、吾人は目を掩ふて見ざらんと欲するも得べからざるなり、此長江は天下到る處に教主の降來、性行を福音して、己れも亦教主の事業の一大部分なるを公示して止まざるなり、然らば事跡云々の事は吾人今の時を出でず、今の處に坐して、現に之を見つゝあると謂はざるべからず。事跡云々の事は既に説を聞く、預言其物に至りては如何、我耳宛も事跡成就せざる以前に在りて之を聞くが如きを得るや否や、然り之を得、其道左の如し、抑々預言なるものは、無名無聞の書冊に記録せられて、尋常一凡人の書齋の一隅に投棄せられ居るものとは、大に其類を異にす、彼れは猶太の民と云ふ一國の民族に與へられ、傳へられ、弘布せられたるものなり、此民族は由來惡逆頑愚の民、而して其舉動最も奇怪に出づ、彼等は凡ての預言者を窘逐して殺戮したる者、然れども其預言と其書冊とに至りては、世界無二の寶として之を珍重したりき、蓋し教主に關する預言は、此民の一大慰安、一大誇示、一大希望の集中するものなりしが爲なり、彼等は毎度之を天下に示して教主我等の中より生ると自負しつゝ、其一日も早く降來して自國を隆盛光榮の

絶頂に揚げん事を翹望したり、是を以て彼等は始終預言の書冊を手にしつゝ、其預言の指示する者を自國の一大教主、慶福無限の創造者として、大早の雲霓を望むがごとくに待ち焦れたり、然るに茲に吾人の最も奇怪千万なりとすべき事あり、彼等は教主を待ち望むと此の如くなるにも係らず、又教主に關する預言の如きも遂一之を知悉して、其出生如何、其生涯如何、其死去如何、又其事業如何に至るまで、詳かに之を記憶したるにも拘らず、一たび其教主の世に出現するに當りては、之を教主として認むる能はざりし事即是なり、然れども是正しく天の攝理の在る所なるべし、彼等は斯くの如く教主を教主と認めざるを以て、明かに預言の應驗ありたるを證表する機關とはなりたり、何となれば教主の世に出でたるや、彼等は確かに其不思議なる奇蹟を目撃したり、何人よりも先きに其優渥なる聖恩に預りたり、而るに彼等は此全能なる教主、此全善なる教主を排斥して、遂に之を十字架に釘して屠戮し、其弟子をも飽くまで屠逐し、己等の一舉一動をして、悉く預言に符合せしめたるを以て、知らず識らず彼等は預言の遂行成就せられたるを證據したるなり、苟も普通の常識ある者にして、教主の言動が預

言の一字一畫をも遺漏なく遂行したるを見れば、故さら誤らんと欲するだも能はばるゝなるに、彼等に限りてのみ、頑然之を承認せずして、其の己等の頑冥固陋までが教主に關する預言と共に先言せられざるを想起せざりき、教主降生後二千年の今日に至るも、彼等の迷夢は未だ醒めずして、依然教主を嫌惡し、依然其弟子に種々の災害を加へつゝあり、而して預言の書冊に至りては、相變らず無二の珍寶として之を保存して、今仍は教主の降生を待望しつゝあるとは、誠に不思議の沙汰と謂はざるべからず、吾人に取りては預言の事跡は業に已に成就せられてより二千年の星霜を経過したるも、頑陋なる彼等に取りては未だ成就せらるゝ端緒にも及ばず、何となれば彼等は今尙は其事の成就せられんと待ちつゝあればなり、一言以て之を云へば、吾人は彼等の後に在りて、而かも彼等の先きに在りと云ふも不可なし、其故は今日吾人が、教主降生前五百年乃至一千年に在りたる彼等祖先の教主に就て知悉したる所、信仰したる所、希望したる所を知らんと欲するときは、直に彼等に就て問ふを得可ければなり、語を替て云へば、吾人は身教主降生二千年後の今日に在りながら、預言其物を教主降生五百

年乃至一千年以前に報導せられたる儘に聞き、又當時の彼等に了解せられたる儘に知らんと欲するも、誠に易々たり、即ち今日の彼等に就て問ふに在り、今日の彼等は昔日の彼等と毫も異なる所なし、彼等の信仰と希望は、古も今も變りなし、乃ち彼等を直に三千年以前の祖先の生存繼續し居る者と見て可なり、然らば則ち、吾人は預言せられたる事跡を今日自己の眼を以て面前に目撃するを得るが如く、豫言其物をも自己の耳を以て身三千年以前に生存せるが如くに聞くを得るなり、隨て其預言は今日の吾人に取りても決して預言たるの勢力なきものとは謂ふべからず、蓋し吾人は之を昔時の預言者の口より聞くを得るが如くなると同時に、歴史を以て、經驗を以て、其預言の果して又如何なる點まで應驗ありたるや否やを知るとを得ればなり。

然れども人或は云はん、預言は基督公教の證據となり得るやう後人に編成せられたるものなり、左なくば後日に至りて變更せられたるものならん云々と、斯の如き假定説は、餘りに馬鹿らしくして、辨駁するの必要もなし、何となれば先づ第一余が前段に記したるが如く、預言は基督教の未だ生れざる以前、少くも四百年以前に於て一般に

預言書の
後人の作
ならざる
證論

猶太人民の手中に在りたる事は、歴史上掩ふ可からざる事實、次に基督の時代より今日に至る迄、猶太人は一日も基督及其教徒を攻撃せざるはなし、今尙は之を嫌ひ之を惡みて、基督公教に取りては實に舊怨宿敵の地に立つ者なり、而して此事世界に隠れなき事實なりとせば、曷んど後等が基督公教に符合するやう其預言を編成したりと云ふが如き假定説を唱道するを得んや、彼等が基督公教の大敵たることは、世界の耳目皆之を見聞し居るとせば、基督公教而かも其攻撃する基督公教の爲に盡瘁したると云ふが如き事は、夢にだも想起せられざるべし、若又彼等にあらすして、基督教徒が、後日自教の爲に之を變更したりとせんか、現在世界の南北東西に散亂せる彼等は、忽ち反叫の聲を揚げて、基督教徒の詐を訴へん、然り、頑然舊格を墨守せる彼等は、必ずや其實藏せる預言の一字一畫をも變更するを許るざらざるべし。

但だ茲に吾人の最も怪訝に堪へざる事は、彼等猶太人が其預言の我基督教に大なる證據を供するを記憶しつつも、惡む基督教の爲めに預言を悉く抹却せんとするの觀想を起さざりしと是なり、基督公教を惡むや、必ず斯の如き企圖に出づるは、蓋し自然の勢

猶太人の
預言書の
抹却せざ
る理由

なるべし、然るに彼等の此舉に出でざるは、事全く不能の一事に屬することを知るに由れるならん、何となれば彼の預言書なるものは、今日天下の凡ての人々の手に在るを以て、到底之が抹却事業を冥々人知れざる裡に企圖するを得ざればなり、是れ實に吾人の爲には天幸と謂はざるべからず、他に又彼等が預言を埋没するを欲せざる理由あり、他なし、余の前記したるが如く、預言は彼等民族の一大慰安、一大希望、一大慶福を載する事是なり、彼等が我基督教を視る蛇蝎も管ならざるにも係らず、尙ほ其預言を尊重して、世界無二の珍寶となし居る所以、全く茲に在るなり、されば彼等猶太人民は、畢生の力を盡して我基督教を攻撃しつゝも、一意以て同教の一大證據となる預言を寶藏せんとするもの、如し、彼等が我基督教に取りて不俱戴天の仇敵なる所以は、即ち是れ同教に取りて確乎不拔の一大證據たる所以なり、彼等の嫌惡其事までも、吾人基督教徒の爲めには彼等の證據の誠實なる標示となる、嗚呼天の攝理も茲に至りてや妙なりと謂ふ可し。

猶太人民
の不可思議
の運命

猶太民族の運命は誠に奇妙不思議と謂ふの外なし、往昔同民族と時を同ふし、堺を一

にせる國民は、何れも皆同民族よりも富強隆盛なりしを以て、(時に或は之を保護したる事なきにしもあられども)、往々之を征伐し、之を窘逐し、之を蹂躪して、一時は奴隸の境界にまで之を壓屈したるものなりしが、今となりては是等富強隆盛の國民は、早く既に世界の舞臺を辭し去りて、徒らに紙上の空名と、當時有名なりし首府の殘業とを遺すのみ、之に反して最も微弱にして又最も輕侮せられたる猶太民族のみは、今尙は依然として遺存し、其自ら知らずして證明し行く所の眞理と共に永久不滅なるは、實に洵に奇と謂はざるべからず、彼等は今後世界の終局に至るまでも、此の如く存し、此の如く生して、祖先の信仰希望の如何なりしやを證明し行くべし、蓋し昔時神が救主に關して爲したる約束と預言とを世の終りまで全世界の人民に確證して、其約束預言の如何なる點まで成就せられたるや否やを天下万民の眼前に明示するは、彼等民族の天職なるが如し。

猶太人民
の對天
の理據

然りと雖、此天職を全ふするがためには、彼等民族の永久不滅なるのみにては足らず、尙ほ其上世界の南北東西に飄遊散亂して、同時に之が天職を行ふを得るの境界に立た

ざるべからず、而して此境界は正しく天より彼等に與へられたり、抑々預言にして報道せられたる事跡の未だ成就せられざるや、彼等民族は、幸福自由の天地に呼吸したる時にも、不幸奴隸の逆境に沈淪したる時にも、始終國法あり、首領あり、又一種特別の政治ありて、一國民たるの形態を失ひたるとはなかりき、然るに一たび教主世に出で、其天職を竭し去るに當りてや、未だ四十年の星霜も経過せざるに、彼等民族は早や既に全く國民たるの状態を失へたり、今迄居住したる國土は、海外の民に畧取せられ、其宗教的生涯の中心たりし殿堂は、焼失せられて烏有に歸し、永く詩に咏じ歌に謳ひたる有名の都城は、倏忽の際に傾倒せられ、而して當時兵火の災禍を免れたる人民は、世界の南北東西に活ける塵埃の如く蒔き散されたり、爾來其民は定まれる故郷もなく、天下到る處に飄遊して、到る處に嫌惡せらる、既に二千年に近き今日に至るも、此飄流的境界は依然繼續して毫も變るとなし、時に同志料合して、再び往時の國態を組成せんと企圖せるとあるも、天運の許さざる處、毎度水泡に歸したるを以て、已むを得ず、世界の四方に散亂しつゝ、天の規定する所に知らず識らず盲從す、如何と

なれば彼等の頑冥陋固なるは、基督の時代に於けると毫も異なるなく、依然同教を嫌棄しつゝ、依然預言を尊重しつゝあればなり、彼等は世界到る處に此の如く頑然舊習を墨守し行くべし、何となれば、基督の名と其教が世界萬國に弘布せらるゝ間は、始終此の如く敵地に立つて之が證據を爲さざるべからざればなり、基督の一弟子が其師の教を齎して行く處、必ず先づ一の猶太人ありて、知らず識らず其弟子の云ふ所の真理なるを證明す、蓋し彼れは己れ基督を信せざるも、基督に關して記されたる歴史を預言書と共に携帶し居ればなり。

嗚呼夫れ此の如くにして、吾人は基督の時代と預言の時代とを距るの遠き今日に於ても、自己の目を以て數千年前の古に先言せられたる事跡(即ち基督教の創立)をも見るとを得、自己の耳を以て事跡の成就に先だつ遠き預言をも當時報道されたる儘に聞くことを得るものなり。

(其二)若し其れ事跡の預言に符合して遂げられたるや否やに至りては、茲に之を喋々するの必要なり、何となれば耶蘇基督の歴史は、人皆能く之を知る、彼れの如何な

る人物なりしや、又如何なる事業を働きたりしやに至りては、天下恐くは之を知らざる者なかるべし、其名と其教は世界到る處に弘布せられつゝあるなり、彼に就て事跡以前に預言せられたる事は皆成就せられて、今尙ほ吾人の眼前に成就せられつゝあるなり、是を以て彼れの事業に反對する教敵の如きは、最早事跡と預言の符合を拒否する能はざるを見、頓に論鋒を一轉して、彼の預言なるものは事跡以後に至りて能く基督の歴史に照合するやう編成せられたるものなりと云ふに至りぬ、是れ實に一方より觀察するときには、事跡の預言に符合せる明證なりとす、而して他の一方より考察するときには、斯の如き言は一時世の愚民を欺くことを得べけれども、天下の識者を欺くとは能はざるなり、何となれば少しく歴史的の知識ある者は、預言の實藏者は猶太人民なる事、又同人民は基督降生以前の遠き古代より此預言を手にしたる事、又之を世界無二の珍寶として、自己の生命よりも尊重し來りたる事、又も此民は由來基督教徒とは不俱戴天の敵なりし事、隨て自己の敵をして、自己の嫌棄する教の爲に、自己の珍重する預言には一手を染るをも許さざる事、況んや基督教徒の著作を其者の手より受けて、之

を天下無上の寶として保存するが如き愚を爲さざるべき事等は、明かに判知するを得べければなり、然らば則ち、教敵の假定説の如きは洵に齒牙に懸くるに足らざるの愚説なりとす、此の如き説を爲す者は、自家の狂愚を天下に發表すると同時に、我基督教の基く所の基礎の堅牢不拔、磐石雷ならざることを世界の有衆に公示するに過ぎるなり、然り、同教の基礎は眞に牢乎たる巖石なり、之を攻撃せんと欲する者は、已れ先づ其頂蓋を摧かる、危険なり、謹まざるべからず。

(其三)預言によりて報道せられたる事跡は、果して人知自然の道を以て先見するを得ざりしか其事跡の成就せられたる事又果して之を偶然の結果に歸するを得ざるか、請ふ備さに之を論せん。

凡そ何事に係らず、吾人より先見せらるゝを得るものは、其事必ず天理自然の道に於て出來得べきものに限るなり、否らずんば之を先見せんとするが如き、吾人の夢寐にだも想像するを得ざるべし、若又人ありて斯の如き事項をも先見せんと務むる者あらば、人必ず其狂愚を笑はんのみ、而るに預言によりて報道せられたる事跡は、正しく

預言の報
道したる
事跡

斯の如き事柄のみにして、天理人道の自然によりては、到底出來得べからざる事なりしかば、之が先見報道の如き、固より人知自然の爲す能はざる事にてありぬ。請ふ試に預言の事跡を仔細に檢せよ、耶蘇基督の人となり如何、其生涯、其死去、猶太國の滅亡、同人民の頑陋及び其散亂離落、基督教の精神によりて世界の全面に行はるゝ根本的革新、基督の一大事業の地上に於ける珍らしき創始繼續、即ち十字架上に屠られたる者の教が、毫も人間的手段を假らずして、世界万国に傳播し、東西各種の宗教の上に超越する事等、是れ實に預言によりて報道せられたる事跡にてありにき、是等の事柄は、設令之を個々別々に捉へて觀察するも、人知自然の道によつては到底預測し得べからざる事なり、請ふ余をして其詳なるを言はしめよ。

基督の性
行

先づ耶蘇基督の人と爲り如何を觀察せよ、耶蘇基督と云ふ一人物にして、其大なるを考ふれば、大なる事此上なく、其小なるを考ふれば、小なる事此下なしと云はるゝが如く、一天万有の天主の全知全能を具備すると同時に、一小人間の卑賤弱質を受有し、万徳を一身に兼行して、完全無缺一點の過失なき者にてありながら、大逆無道の罪人

に加ふべき虐待と極刑とを受くる等、事皆反對と反對との和合なるを以て、縱令其事既に成就したる後より考察するも、吾人の思想上に衝突を來して容易に之が觀想を起すを得ざるなり、然り、基督の人物如何は、之を其歴史に顯るゝ儘に考察するとき、事跡の成就せらるゝ前にしても後にしても、尋常一様の定規にては、到底之を律する能はざるを以て、彼のルーツの如き人間すらも、疾くに茲に視るわつて叫びたるとあり、曰く「若人ありて、斯の如き人物を想起し、若くは之を腦中に見出すあらば、其見出したる者は、天下の豪傑よりも猶ほ感嘆せらるべきならん云々」と、基督の人と爲り如何は、斯の如く人知の預想外に出でしものなり、而して人知の預想外に出づる者ならば、焉んぞ之を先見預測するとを得んや、若し夫れ此人物性行の上に、其生誕の時、處に關する詳細なる報告、其生其死に係る一伍一什等の全く自由なる原因より出で、全く人心の隨任に關する事柄を添ふるに至りては、蓋し之を推量するをも得ざるなるべし、况んや之を精確明瞭に先言するをや。

猶太國の
滅亡

猶太國の滅亡、及び其民の離散の如き、又是れ吾人の意想外に出るものなり、救主降

らば寧ろ其國光榮隆盛の域に進むべかりしなり、されば同國人民の如きも亦斯く思考して、希望を自國將來の隆運に屬し居たるなり、而るに事は全く其反對に出でぬ、同國民の頑陋の如きも、又是れ預想の外、夫れ預言を寄托せられたる民は彼等なりき、救主の生るべき土地は彼等の土地なりき、然らば則ち救主の生るや否や、率先之を認めて奉戴すべき者は彼等なるべきに、事茲に出でずして頑冥以て一生之に抗敵したりとは、如何にして人間自然の觀念に浮び出づべきや。

世界の邪教をして其跡を絶たしめ、信仰をして其地を變せしむるに至ると云ふ所謂異端迷信の根本的革新に至りては、古の哲士さいも斷じて能はずと思考したる所なり、往昔希臘羅馬にて有名なる哲學者等は、宗教に就て民と共に其説を同ふせざりしにも係らず、表面には務めて時俗のまゝを學び、祭祀禮典等は全く民と共に之を爲し、此點に就ては敢て一人も時民の迷夢を醒さんと務むる者なかりき、蓋し彼等は之を爲すも徒勞、事全く不能に屬すと斷念したればなり、それ既に古の賢哲が一國に於てさい斷じて能はずと思量したる事ならば、如何にして其事世界の全面に行はるべき、然ら

立
公教の成

ば則ち是等の事を予測して、明かに其事の行はるゝ時代と方道とを先言するが如きは、愈々以て人知の爲す能はざる所たるを見るなり。

蓋し此一大革新の行はるべき方道の如きは、最も人の意表に出でたるものなり、何となれば學問もなく、信用もなき無名の一貧兒にして、時の人々より穢多非人の如くに輕侮せられ、大逆無道の如く虐待せられ、遂に十字架上に磔せられたる、猶太の一工匠が、將來賢者の燈明となり、聖人の模範となりて、全世界の正人君子より帝王の如く、神明の如く尊拜せらるゝに至るべきとなればなり、此の如き事は、豫め出來得べからざる事と斷言するを得べし、何となれば其事既に成就したる後より考ふるも、尙ほ不能の一事と云ふ先入に驅られて、容易に之を信する能はざればなり、然るを況んや事の成就せざる遠き以前より之を予測して、明かに之れを報道するに於てをや、其難き事沙汰の限りと謂ふべし。

若それ人ありて以上の諸項を先言するあらば、其言設令事の成就せらるゝ前一日を先だつと雖、世界の万民は之を聞見して必ず一大不思議と絶叫すべし、而して其絶叫は

決して以なしと謂ふべからず、何となれば斯の如き預言は設令一日前に於てせらるゝも、充分不可思議と謂はるゝに足るべければなり、若し其預言にして、遠く四百年以前に在りて發せらるゝに於ては、吾人は尙更驚愕を喫せざるを得ず、何となれば以上の諸項は、余の逐一前述したるが如く、皆常理を以て論ずべからざる事のみなり、而るに此常理を以て論ずべからざる事を、遠く四百年以前より先見し、預言して、事全く其先見の如く、預言の如くに成就せられたりと云ふに至ては、無限の能力、神明の知量の然らしむる所と謂ふより外なければなり、然り而して今茲に論ずる預言は正しく斯の如く成就せられたるものなり、前文既に記したるが如く、預言者の世期は、救主降生前四百有餘年マラキヤ預言者を以て閉ぢられたり、同預言者の時代より救主降生に至るまで、歩一歩づゝ近づき來れるを以て、其間に於て預言する事は以前に於てするよりも一層容易なるべきに、怪むべきは此間に於て一人の預言者の出でざる事是なり、預言はマラキキの書に至りて終を告げ、以後は一字一句も増殖せられたる事なし、然れども此怪むべき年間に神の攝理の工妙を見るとを得るなり、神は其子の威稜

を示さんが爲に故さら此年間に預言者を沈黙ならしめ、其民をして凡ての預言の遂行者たるべき御一人の待望に準備せしめたるものなり。

預言の終を告げたるは、實に救主降生前四百有餘年に在りたり、然れども凡ての預言皆此時代に於て爲されたるにあらず、預言の種類によりては遠く太古の世に遡る者あり、余の既に述べたるが如く、預言書中の最も古きものは、救主降生前一千六百年に編成せられたる書なり、而して同書に録せられたる預言の過半は、遙か此年代に先だてり、其尤も古き預言に至りては、遠く天地開闢の當時に遡れり、されば天地開闢より救主の降生に至る上下四千年の間に、預言は絶えず連綿として繼續し來りたるなり、勿論時勢の必要に應じて頻繁稀少の別はありしかども、中間に斷絶したるが如き事は一回も之なし、是れ蓋し神が當時の人民をして、信仰と希望とを以て絶えず救主を待望するを得せしめんが爲なりしならん。

是に於て吾人の尤も注目すべき事は、斯の如き長遠なる年間に於て、預言者の中一人も其從事する所の一大畫面を全備せしめんとしたるものなき事はなり、最初に出でた

る者は、椽大の筆を揮つて先づ其大要を書きたり、其後に來りたる者は、時勢の必要に應じて此れに多少の筆を入れたり、然れども後者は、先者の書きたる所を見て、其己れの書く所之れに合はんとを務めたるにはなく、全く上下年代を異にしたる作者が、各自異様の筆を揮つて任意に之れを書きたるものが、後日に至て不思議にも相待ち相合して遂に完全なる一大畫面を組成するに至りたるものなり、而して其終りに當り、畫中の眞人物が實際出現するに及び、四千年間に異様の手を以て書かれたるものと寸分違はざるに至りしを以て、覽者何れも奇怪の念に打たれ、愕然として其不思議の業に驚かずんばならず、是に由りて之れを考ふるときは、數者の畫家相繼襲して、此一大畫面を描寫したりと云ふよりは、寧ろ初より一の神妙不可思議なる畫聖ありて、此一大畫面の大成を負擔し、唯だ其之れを畫くに當りて、自から執筆の勞を取らず、天より人間の手腕を左右して、知らず識らずの際に意中の大人物を畫かしむるに至りたるものと謂はざるべからず、譬喩を去つて眞意を明せば、預言したる者の員數は多かりしも、預言の氣は唯だ一なり、預言者を啓發したる一天主是れなり、天主は天地剖

判の當時より、後日完成せんとする大業を明かに腦中に企畫し、時勢の必要に應じて、徐々と之を人間に示し、歩々相近くに從つて、益々之を明示し、其大成の時期の愈々到來するに至りて、遂に吾人の稱して事跡以前の歴史なるものを組成するに及びたり、是れ此歴史は、其事跡を目撃することを得ざるも、之を知悉せざるを得ざる必要ありたる人々の爲に供せられたるものにて、即ち救主降生以前の人々に、吾人が事跡以後の歴史に據りて知る所の事柄を知らしめんためにありたり、勿論事跡以前の歴史は、事跡以後の歴史の如く明瞭に教ゆるとは得ざりしならん、然れども前者に載せたる所は、後者單に之を一束にたばねたるまでにて、謂はゞ處々方々に映射する光線の赫々たる一大陽に於ける關係に異ならず、換言せば、預言と福音、舊約と新約とは、人に教示するに當つて、前後明晦の別はあれども、教ゆる事物に至りては、彼此全く同一なり。

以上述ぶるが如く、東西國を異にし、上下代を殊にして發せられたる種々異様の預言が、而かも常理を以て論ずべからざる事跡について、不思議にも相冥投して、恰も符節を合するが如くなりしを見つゝ、猶ほ之を偶然の結果となし、若くは純然たる人間

的推量の偶當したるものとなす人あらば、余は此の如き人に向て、一言の議論をも費すを欲せず、蓋し全然無用なるを知ればなり、此の如き人は如何なる妙理を擧るも、肯を脱して承服するとはなかるべし、故に寧ろ之を放棄して、其言ふが儘に任せ置くに若くはなし、彼は自ら好んで光の前に眼を閉づる頑陋なる盲者に異ならざる者なれば、喋々の議論は毫も益する處なきなり、夫れ斯の如き預言の相合したるを見て、尙且之を偶然の結果なりと言ふが如きは、今数百万の活字を取りて、偶然之を紙上に投じたるるとき、忽ち論語と云ふ書出でたりと云ふと何ぞ異ならんや、然り、預言の吻合にして果して天の攝理なく、神の默啓なく解釋せらるゝとを得ば、此の如き預言の吻合は猶ほ一段の不思議と謂はざるべからざるなり。

述べ去り述べ來りて茲に至れば、必ず一の疑問讀者の念頭に浮び出づるなるべし、先言せられたる事跡は、果して預言に應合して成就せられたるものなるや否と云ふ事即是なり、是れ實に須要なる疑問なり、何となれば、若し果して事跡にして此の如くならずんば、預言の存在は全く無用なるべければなり、一國の民族は空しく今日まで之を天

下無類の寶として保存し來りたりと謂はるべければなり、彼の預言なる者は、畢竟是れ人知に想はれざる事、實際に行はれざる事を空言したるものと見做さるべければなり、隨て如何程不思議なるものと云はるゝも、一事實の先言史とは決して稱せられず、要するに小説のみ、實事と活物に毫も關係なき架空の説のみ。

此の疑問を解くは、難事にあらず、預言と事跡とを對照すれば足る、別言せば、事跡以前の歴史と以後の歴史とを并列するときは、事一目の下に瞭然たるべし、然れども茲に凡ての先言せられたる事と凡ての成就せられたる事とを參照する事は、一朝一夕の業ならず、然せんと欲せば、舊約と新約の大部分を茲に摘録せざるを得ざるべし、故に余は其最も主要なる點のみに就て、對照參考の勞を取らんと欲す。

(第一)年代の順序を逐ふて論ずるときは、第一の預言は、世界開闢の當時に於てせられたる者是なり、吾人々類の元祖か、魔鬼に誘惑せられて、初めて罪を天に獲たるとき、万物の造者たる天主は、魔鬼に現はれて曰く「我將に爾と婦、亦爾の裔と婦の裔とをして仇となさん、婦の裔は將に爾の首を撃ん、爾は將に其踵を撃んとす」(創世記

三の十五)是に依て之を觀れば、人間の墮落と禍害の主動者は、蛇の形を假れる魔鬼なるを知ると同時に、後日此魔鬼を敗りて、人々を其禍害より救出すべき者あるを知るなり、而して又此勝利を獲る者は、二人の元祖にあらずして、其後裔たるべき事、而かも奇とすべきは、男子の裔にあらずして、女子の裔たるべき事は、明かに右の言句のうち讀まる、蓋し魔の誘惑したる者は婦人、故に婦先づ之に勝ちて、其踵を踏破すべかりしものなり、若しこれ此勝利をして婦に歸すべきや、將た其子に歸すべきやの事に至りては、毫も關する所にあらず、何となれば子の行ふ所は、其榮母に歸するものなればなり。

然り而して此一事如何にして成就せられたるや否やは、人皆之を知る、救主の不思議なる道によりて胚胎せられたる事、毫も夫どに觸れざる一婦ありし事、其婦の子に依りて世界の人類が罪惡と其結果より救贖せられたる事、胸間に子を抱き足下に蛇を踏める婦人ありて、世界中に撮影せられて尊敬せられつゝある事、嗚呼是れ皆右の預言の如何に成就せられたるかを明かに證據するものなり、右の預言は今より六千年以

預言の應驗

前に屬す、而して其如何に成就せられたるやに至りては、救主を抱ける童貞聖マリヤは、到る處に斯の如く之が明答をなしつゝあるなり。

第二の豫言

(第二)地上の人類漸く繁殖し、人民既に世界の各處に散在して、各々其言語、其風俗、其法律、其宗教を有して、漸次に當初の傳と教とに背き去るに至りたるや、神はカルデヤの一人に語りて曰く「爾故土を出で、戚族を離れ、父の家より別れて、我の爾に示さんとする地に至るべし、我必ず爾をして大國と爲し、爾に祝福して、爾の名を揚げしめ、且爾をして福の基とならしめん」(創世記十二の一と二)、又曰く「我れ必ず爾に祝福して、爾の後裔を増さん、其多き天の星の如く、海隅の沙の如くならん……天下の万国將に爾の裔に由りて福を獲んとす云々」(同二十二の十七、十八)、此の如き大命を受けたる人を誰とかなす、アブラハムと稱す、其子イサークに至り、神は略は同一の約を之に傳へたり、曰く「我必ず爾と偕にして、爾を祝し、此諸邦を以て爾及び爾の後裔に賜はん……、我必ず爾の後裔を増して、天星の多きが如くならしめんとす云々」(同二十六の三、四)、孫ジャコブに至りても又然り、曰く「我は爾の祖アブラハムの神、

イザードの神なり、今爾の臥す處の地、我將に爾及び爾の後裔に賜はんとす、爾の裔は將に地の塵の如く、爾必ず廣延して東西南北に至らん、天下の諸族は將に爾及び爾の裔によりて福を得ん」(同二十八の十三、十四)夫れ此の如く、天下の諸族に祝福する者は、アブラハム、イザーク、ジャコブの後裔より生れ出づべかりしなり。

アブラハム及びジャコブの子孫は、如何程長足の進歩を以て繁殖したるやは、歴史明かに之を記載す、唯だの一人の後裔は、僅々たる歲月の間に、忽ち一大民族を組織するに至りたり、即ち彼の猶太の民族と云ふ者は是なり、此民族の皆アブラハムより出で來りたる事は、一家族毎に各々其祖先アブラハムまで遡る系圖を有したるを見て瞭かなり、而して耶蘇基督の系統の、アブラハム、イザーク、ジャコブより引來れとは、尙は一層明瞭に示さるゝなり、若それ天下の諸族がアブラハムの後裔に由りて祝福せらるゝの一事に至りては、基督教會の敬拜祈禱を一瞥せば、蓋し思ひ半に過さん、基督教會なるものは、實に世界の諸民族を以て組成せらるゝものにして、同教會に於ては信徒皆一基督の聖名によりて、天上の万福を蒙り、如何なる祈禱を天主に奏上する

も、亦皆一基督の聖名によりてする事は、人々の能く知る所なり。

第三の預言

(第三)の預言は、ジャコブの預言なり、ジャコブ既に老ひ、將に死に垂んとするとき、其將來の十二族の者に各々預言す、而して其ジユダに向て預言せる言に曰く「猶太よ、兄弟將に爾を頌美せんとす、爾の手必ず敵の首をとらん、爾の父の子將に爾の前に拜せんとす」(創世記四十九の八)、又曰「安を賜ふもの至らざる前に、珪は必ず猶太を離れず、法を立つる者も其裔を離れず、至らば則ち兆民必ず歸せん」(同章の十)、尙ほ彼は疑ふべからざる語を遺したり、曰く「主よ、爾の救は、我已に之を望めり云々」(同章の十八)、即ち彼は斯の如き希望を懷きつゝ、安らかに永眠に就きぬ、夫れジユダはジャコブの第五子、長子にはあざりき、然るにジャコブは他の兄弟を措いて、特にジユダにのみ斯の如き預言を語りたるは、最も吾人の注目すべき所なりとす。

然り而して此預言は果して如何に成就せられたるや、我基督公教に反對の銳鋒を向けたる無神論者ウールテール、ウォルネー、ブランゼーの三氏は明かに之を示さん、彼等は其書の中に、實に斯の如く白狀したり、曰く「耶蘇基督降生の時期に當りては、

同預言の
應驗

全世界の者皆或る不生出の人物を翹望したり、又當時知れ居たる人民の目は、皆共に視線を猶太國に向つて注射したり云々、而して彼等は猶太國を指して、万民希望の中心と稱せり。

今又其實際を究むるに、果してジユダの一族のみ、他族の上に超然越出したるを以て、遂に其名を一國民にまで附するに至り、稱して猶太の民と云はれたり、又此國民實にジャコブの預言によりて、救主降生の時期に至るまで、始終ジユダの族中より王と首領とを戴いて治まりきたれり、而して羅馬政府より支配を受くるに至りたるは、正しく救主降生の初めに當りたり、基督受難の當時に至りて、猶太の民は政權全く他國に移りたるを公然自白しぬ、即ち彼のピラトなる者が基督を裁判するに當り、猶太の民衆に向つて、「爾等彼を捕へて、之を十字架に釘せよ」(シヨアン傳十九の十五)と語るや、彼等民衆一齊に揚言して曰く「我等は何人をも死刑に處する權を有せず」(同十八の三十一)と、乃ち知る、彼等は斯の如く自白して、ジャコブの預言の成就せられたる事と、救主降生の時期の既に到來せる事を證明したるを。

(第四)の預言は、バラアムの預言是なり、此預言者は、アブラハム、ジャコブの出にあらず、異邦の人にてありたり、アブラハムの後裔が、埃及國を脱出して、アラビヤの沙漠に來り、四方に惟幕を張りて、之が居住を卜するや、遠くより之を眺望するに、宛然一大都城を見るの觀をなせり、此時バラアン山の高さに登り、頂上より此一大觀を眺望して、頗る其美觀に打たれ、此民の盛壯宏大なるを稱揚し、且つ心目を遠く此民將來の榮境に颯して叫んで曰く「我將に之を見んとす、但た今時にあらず、我將に之を觀んとす、但た伊れ邇きにあらず、一星將にジャコブより出でんとす、一珪將にイスラエルより興らんとす、必ずモアブの諸隅を撃て、セツトの諸嗣を誅せん」と、

此預言大古の時代より、東洋の國民の中に傳播したるを以て、「猶太國より世界の救主出づべし」と云ふ一般の颯望を確立するに、最も與つて力ありたるものなり、一般國民の信望とバラアムの預言とは、誠によく吻合す、其最も注目すべきは、救主降生の時期に至りて、猶太の全土皆バラアムの預言を想起して、ジャコブの一星を見んが爲めに、齊しく其視線を事跡の地平線上に聚射したる事是なり、而して此星の來るべき救主を

指したる事は、疑ふべからざる事實なりとす、吾人は猶太の史家ジョゼフの歴史に據りて知る、バルコケバスと云へる一偽救主は、其己れの名の星と云ふ意義あるを利用して、大に民人に禍害を加へたるを、此者愚民の一團を煽動して、羅馬政府に反旗を翻し、國民の頭上に言ふべからざる禍を招きたり、是れ實は大なる誤認にてありにき、反者固より翹望せられたる救主にあらず、然れども其誤認を見ても、此時猶太の人民が翹首して救主の降來を渴望したる事と、又此救主降來の事を星の現象によりて注目したる事とを知るに足るなり。

第五の預言

(第五)每瑟は、古昔の立法者の中にも、最も顯然たるものなり、彼も亦救主の事跡に就き、ヘブレヤ人(後猶太人と云ふ)に預言して云へらく「爾の神天主は爾の中より、即ち爾の兄弟の一より、一預言者の我と相如く者を起さんとす、爾等必ず之に聽け」、又曰「神云ふ、我將に我言を其口に置かんとす、彼れ將に我か凡て命せる所の者を以て衆に諭さんとす、人若し我言、即ち我名に任じて言ふ者に聽かずんば、我必ず之を討罰せん云々」(復傳律例書十九の十五、十八、十九)。

同預言の解説

每瑟の每瑟たる所以は、全く彼が立法者にして又且奇術者たるに在り、彼は實にヘブレヤ人民に法律を興へて、又之を遵奉せしむるが爲に、種々の奇跡を行ひたるものなり、然らば則ち、預言中に「我と相如く預言者」と云へるは、必定立法者にして又且奇跡を行ふ者を指して曰へるなるべし、即ち人民に法律を興ふる事彼の如く、又奇跡を以て己れの天職を證明する事彼の如き者を指したるや明かなり、然り而して每瑟より耶蘇基督に至るまで、幾多の預言者踵を接して輩出したれども、其中に自から每瑟の法を變ふるが爲に出てたりと語れる預言者は一人もなし、皆却て人民に每瑟の法を遵奉せしむるに盡瘁せるを以て己れの目的としたり、彼のマラキヤ預言者が「爾宜しく爾の僕每瑟の法、即ち我が之をホレブの山に命じて、イスラエルの衆民の用に供する所の律と例とを記憶すべし」(マラキヤ書四の四)、と云へる一語を見ても知るべきなり、故に「每瑟と相如く預言者」とは、右等の預言者と異なりて、神と人との間に新しき法を立て、若し民之れに聽かずんば、神自から之を罰すべかりし者たらざるべからず、而して斯の如き者は、吾人獨り耶蘇基督に於て之を見るなり、猶太の民の如きも

亦斯く了解したるなり、何となれば彼等は基督の奇蹟を見、其教訓を聴きたるとき、榮を神に歸し「大預言者我中より興る、神其民を眷顧せり云々」(ルカ傳七の十六)と叫びれたればなり、而して耶蘇基督も亦猶太人の頑陋を譴責して曰く「若爾等會て每瑟を信せば、則ち亦必ず我を信せん、蓋し其書する所の者は我を指せばなり」(シヨアン傳五の四十六)と。

同預言の
應驗

若し夫れ事の實際を考ふるに至りては、耶蘇基督の天職を信ずると信せざるとに論なく、彼が新しき法を万民に與へたりと云ふ事は、到底拒否するを得ざる事實なり、新法與へられ、之を新約と稱すと云ふ事は、基督教徒たる否とに係らず、天下の人皆之を知る、又彼天罰の一條の如きも、基督の言を聴かざりし頑陋なる猶太人民の頭上に落ち來りたる事は、歴史明かに之を證す、基督死去の後、未だ四十年を出でずして、羅馬の大將チトス來り、猶太國を亡してゼルサレムの殿堂を燒盡したり、彼は猶太人民が到る處に慘憺たる天罰を食みたる現狀を目撃して、天地に誓つて曰く「是れ此の禍害は我が爲す所にあらず、神の此民に對する咀呪の然らしむる所なり」と、斯の如く

第六の預
言

にして每瑟の預言は全く成就せられたり、又斯の如く今尙は吾人の眼前に成就せられつゝあるなり、何となれば基督の立てたる新約の世界万国に弘布せられてより、彼等猶太人民の東西南北に飄流離散すると茲に幾んど二千年、而して彼等は如何に同志相謀て故國を回復せんとするも、天罰の繼續する所、到底功を奏するの期なければなり。(第六)物變り星移りて、教主の時期愈々接近し來るに伴れて、預言も愈々益々明確となりぬ、預言の報道せる教主の降來は、遠景の觀望の如くなりき、其初めは隱見出沒、茫乎として識別すべからざるが如くなりしも、其の愈々接近し來るに及んでや、明々白々、目睫の間に之を見るが如くなりぬ。

余の既に述べたるが如く、教主の生出すべき人種は、アブラハムより系統を引ける種族に當れり、而してアブラハムより系統を引ける種族の夥多ある中にも、シユダと云へる族のみ教主の出づべきものなりき、然り而して、

吾人は又他の預言に據りて、シユダの族中にも、教主を後裔とすべき榮を有したる者は、ダビト王なりしを知る、今之に就きて預言を逐一列擧するは、煩勞に堪へず、因

てイザイヤの預言のみを擧げて例證せん、彼はダビト王崩去の後凡そ二百年頃に預言したる者なり、其言に曰く、

「惟ゼッセの幹より將に一の柔條を芽出せんとす、(ゼッセはダビト王の父)、其根より將に一枝を發せんとす、上主の靈將に其上に安居せんとす、」余は同預言者の全文を茲に描載するの勞を取らず、何となれば彼れの教主に就て語りたる事は、炳然日星を睹るよりも明なればなり、但だ其中段の言を擧げん、曰く「是時に當り、ゼッセの根は將に列民の爲にするの旂を樹てんとす、異邦人將に之に歸附せんとす云々」(イザイヤ書十一の一、二、十)。

苟も福音書を繙て、目を其初一頁に注ぐ者は、右預言の如何に珍しく成就せられたるやを知らん、何となれば基督の歴史は先づ其系統を以て初まる、而して其系統は實に「アブラハムの裔、ダビトの裔耶蘇基督云々」の語を以て初まり居ればなり、此事基督の時代に於て人皆之を知れり、猶太人の如き「教主ダビトの後裔より出でん」と云ふ事は、始終之を口にしたるを以て、彼の盲者乞丐の如きに至りても、基督の行ふ奇跡

同預言の
應驗

を見聞して、憐を之に求むるに當り、往々「ダビトの子我を憐み給へ」(マルコ傳十の四十七)の語を以て叫びたり。

教主のダビト王の後裔に當る事は夫れ斯の如く明かなり、彼が一童女なる母より生れ出る事も亦然り、預言者イザイヤの言に曰く「視よ、童女將に懷妊して子を生まんとす、人其名を稱してインマヌエルと曰はん」(イザイヤ書七の十四)、此言の意を推究するときは、教主の母となるべき者は、尋常一様の童女にてはなく、極めて有名顯然たる童女なるべかりしを知る、猶太の或學者は、基督教徒が此章句を應用して耶蘇基督に適合せしむるを見、其意義を曲解して、教主なる一子に適合せしめず、預言者其人の子に適用せんと務めたる者あり、余は今茲に其議論の逐一を擧ぐるの意なし、蓋し無用の煩勞なればなり、預言者の語りたる不思議なる一子の、自己の子ならざるは、同預言者それ自身の言に徴しても明瞭なり、何となれば彼は自書第九章第六句に於て、之を稱するに「奇妙、策士、全能の神、永在の父、和平の君」等の語を以てしたればなり、即ち同預言者は感嘆稱讚の詞辭を重ねて之を稱揚したり、彼れ豈に愚と雖焉んぞ

是を以て自己の子を稱せんや。

救主の母に就き、他に又一の特殊なる信仰希望ありたるは、ミケヤ預言者の言を讀んで明に之を知るを得、其言に曰く「將に産まんとする者已に産む時に迄ばん云々」(ミケヤ書五の三)、是れ彼れが救主に就て明に預言したる所に語りたる言なり、然れども此點に於ける猶太人の信望と、又此預言の成就せられたる事に就て、最も吾人の信を置くべき證據は、耶蘇基督の歴史其物に在るなり、福音者聖マテオは實に之が證明なり、同聖が其福音書を記録したるは、基督の死去を去る僅に八年、當時聖母マリヤは、其子基督を磔刑に處したる猶太人民の中に生存して、多くの人々に知られたり、聖マテオは聖母が不思議なる道を以て耶蘇基督を懷孕生産したるを記したる後ち、直に「凡そ此等の事の成就せられたるは、主の預言者に托して言ふ所に應ずるを致すが爲めなり云々」(マテオ傳一の二十二)と云へり、同福音者は己れ自らも猶太人なれば、其斯の如く記したるは、同國の人民が「童女云々」の預言に就て如何に解釋したるかを明に知了し居たるや必せり、去ればにや此事の成就せられたるを預言と對照して、毫も遲

疑する所なきを得たるなれ。

(第八)の預言は、救主の生出すべかりし土地に就ての預言なり、是又救主の系統及び其母の操行に於ける預言の如く明々白々なり。

預言者ミケヤ之に就き預言して曰く「爾ベトレエム、エフラタよ、爾は猶太諸阡の中に小たるも、然れどもイスラエルの君と爲る者は、必ず爾より出でん云々」(ミケヤ書五の二)、而して同預言者は、ベトレエムより出づべき者の尋常一樣の人間からざるを示さんが爲めに、「彼れの出る其時より永日に至るに迄ばん」(ミケヤ書五の二)の語を以てせり、知るべし是れ明かに來るべき救主を指して語りたることを、既に救主の系統のダビト王より引き來れる事は、明かに預言せらる、今や此に其の生出する所も亦、同王の生れたる土地に該當するを語らるゝときは、愈々益々預言成就の明確なるを認めらるゝなり、ミケヤ預言者の救主生出の土地に於ける先言は、斯の如く明瞭なりしを以て、猶太人中にも、此點に就て疑を懷きたる者は一人も之なかりき、是故にヘロデ王がゼルザレムの學士を招致して、救主生出の土地如何を質したるとききの如きも、

彼等學士は直にミケヤの預言を推想して、異口同音にベトレエム其地なりと叫びたるなり、此事猶太國老の間に於ても此の如く明かに知れ渡りぬ。

若し夫れ是等の事を知了し、想起しつゝありたる猶太人民の中に記録せられたる基督の歴史(福音書)を繙くに至てや、愈々益々之が明確なる證據を見るを得るなり、此歴史こそは基督の教と共に世界萬國に弘布せられて、坤輿球上の南北東西より、雲霧の如き巡禮者を「基督の御生地なる小區」に導きたる指南車となりたるものなり、是れ實に公明正大なる證據を世界の人民に示すものにあらずや。

右福音書の外にも、此預言の成就せられたる一條に就て、著明なる證據となる者多々之あり、第一は聖ジュスチヌスの言、同聖は元と哲學者にして、第一世紀に當りて歸順したる者、今其羅馬の教外者に向て語りたる言を見るに、實に左の如し、「ベトレエムは猶太國の一小邑、セルザレム都城を距ると三十五「スタード」、是れ實に基督の生れたる所、卿等は此邑の第一の奉行クイリヌスが録せしめたる戸籍の帳簿を見て明かに之を知るとを得べし云々」、同聖は救主生出の地に就き、教外者に向て斯の如く遲疑

同預言の
應驗

なく、踟躕なく明言したり、第二はアレキサンドリヤの賢哲オリゼーヌが、時の哲學者セルスに答ふるの言、曰く「弟子の手になりたる耶蘇基督の歴史の外に、基督のベトレエムに生れたる他の證據を要すとせば、子は唯だ注目するのみにて足る、彼れの生れたる穴は今尙は依然として現存す、又其穴の内に彼れの襁褓に裹まれて臥したる馬槽も、共に遺存す、基督の此穴に生れたるは、土地の傳への語る所にして、基督教にては感銘參拜の寶物として存せらるゝなり」、此土地の傳は今日まで保続し來れるを以て、オリゼーヌの時代より一千八百年後の今日に至るまで、參拜者は引きも切らずして、實際の活證をなしつゝあるなり。

(第九)預言の報道する事物の性質如何なるにもせよ、要するに是等預言の歸着する最大目的は唯だ一のみ、凡ての預言は皆此唯一の目的に向つて輻輳す、請ひ問ふ、其最大なる目的とは何ぞ、外教人民の歸順是なり、換言せば、世界の人民が唯一の天主の聖教に歸信する事是なり、蓋し救主の此世に降來せるや、他の目的ありたるにあらず、世界の人々をして、天地万物の造物主なる神を認めしめ、真理の道を以て均しく之を幸

第九の預
言

福の域に導く事はこれのみ、此一事は實に凡ての預言の要點なり、結局なりと謂はざるべからず、隨て此一大要點に就ての預言は、實に枚擧に違わらざる程あり、今之を逐一引證せんと欲せば、一部の大巻出でん、故に余は其中最も顯明なるもの二三を擧ぐ。

「人民將に想起して順歸せんとす」是れダビト王の語(詩篇二十一の二十八)、「是時に當り……惟上主のみ將に獨り高く擧らんとす、且諸偶像其れ將に盡く之を除滅せんとす」是れイザイヤの言(イザイヤ書二の十七、十八)、「蓋し日の出る處より日の入る處に至るまで、我名必ず列國の中に大とならん、且偏所に在りて必ず香と潔禮物と有りて、我名に獻せん、蓋し我名必ず列國の中に大とならん云々」是れマラキヤの預言(マラキヤ書一の十一)、預言者は斯の如く大言壯語を以て、世界の人民が教主の教理によりて照され、教主によりて心海の和平を獲、現在に於ては安然、未來に對しては毫も恐怖する所なき境界に至るべきを珍らしく彰表したり、此一事こそは凡ての豫言中に最も較明顯著なる所なりとす、吾人は須らく右預言に就き左の二事に注目すべきなり、

「諸々の偶像は除滅せられん」(第一)、「到る處に同一の潔祭同一の天主に捧げられん」(第二)。

凡ての預言を事跡以前より觀察するに、右二事に就ての預言は、最も成就せられ難きものならん、何となれば偶像を除去して、其之に對する尊拜を變更すると云ふは、實に頑冥無覺の木石を破壊し、從來の祭禮に更ふるに、他の祭禮を以てするのみの謂にあらず、人民の宗教即ち其風俗其法律、及び其生命までをも革新するの謂なり、蓋し宗教は是等凡ての靈魂の如きものなれば、宗教を是等凡てより離すと云ふ、靈魂を其肉體より離すと其難易を同ふするものなり、且彼の社會の組織なるものも、又是れ宗教の基礎の上に安立するものなれば、一宗教に手を觸るゝは、即ち是れ人間の萬事を震動せしむるに外ならず、隨て偶像を除去し、民の拜禮を變更すと云ふは、取りも直さず全世界の局面を一變すと云ふの謂なり、誰か敢て此一大事業を企圖せんとする者あらんや、然るに此の誰も企圖するを敢てせざる一大事業は、不思議にも世界到る處に成就せられて、今尙ほ現に日々成就せられつゝ繼續し居るにあらずや、視よ泰西に於ては最早

遠き古代より、偶像其跡を絶ちて、其尊拜は福音の前に消然失せ去りたると、宛も暗影の赫々たる日光の下に消滅し去るが如きを、福音の光は實に争はれざる効力を有するものなり、彼れ一たび其光を映射するや、古今の人民忽ち眼を開きて、今迄の醜態を見たり、隨て人間の手になりたる木像石像の如きは、神として尊拜するに足らざる事を一目の下に知了するに至りたり、勿論其知見茲に達するも、偶像拜は忽ち其跡を絶てりとは謂はれざるべし、然れども之を尊拜する人の心は頓に一變して、木石其物を拜するにあらず、偶像の中に存する神の威靈を尊拜すとの言論を吐くに至りたるにあらずや、是れ實に偶像教往生に立至る階段なり、今は唯だ之を尊拜し來りたる習慣の隋力と之を保存する個人の利害的觀念によりて、暫く僅に其命脈を保ち居るまでのみ、然れども偶像教の天下は既に滅亡しぬ、今や落日孤城の晩景、洵に憐むべきなり、彼れ一たび基督教の眞理の光に照されてよりは、過去の遺物のみとなりぬ、往時の形影のみとなりぬ、古への人民の信仰は斯の如くなりしと示すまでのみ、其靈魂と其生命は遠く既に飛び去りて在らざるなり、何となれば民の活ける心は既に之を信ずると

を拒絶したればなり、然り而して民心の活ける信仰が、一教の外形を維持せざる以上は、其外形の全く影を絶つに至るも、遠きにあらざるべし、故に此状態を前記の預言に照して論ずるときは、偶像は既に除滅せられ、今尙は眞理の下に知らず識らず除滅せられつゝありと斷言するを得るものなり、隨て世界の局面は、日に月に變じ來りて、全能全知全善なる天主の名は、東西南北に響き渡り、天地四方、日の出る處より日の入る處に至るまで、彌撒の聖祭は之に捧げられつゝあり、是れ實に預言者の遙に望み居りたる遠景、今は近く眼前に行はるゝ實境となりたるなり。

第十の預言

(第十)今や此凡ての不思議なる預言を双肩に擔ふて、一身以て之が遂行に膺るべき一大人物に目を注ぎ、其未だ世に出現せざる遠き以前に當りて、幾多の預言者が前後左右より描き出せる一幅の畫中に之を觀望する時とはなりぬ、預言者は先づ此一大人物の降來に就き、古今無類の壯言を以て之を語りぬ、今其の壯語を他の方言に譯するも、尙は且つ精氣の躍如たるを覺ゆ、蓋し預言者は世界万民の翹望となるべき偉人を畫くに、满腔の熱血を濺ぎたるものと見え、其熱き血は今尙は其一字一句の中に迸出するを見

るなり、苟も預言の雄壯深嚴なるを解する者の爲には、救主の降臨は實に世界一あつて二なき人物にのみ適合する事跡なるを知了するを得べし、何となれば今事を人生最終の目的の上より觀察して論ずるときは、眞個に吾人の注目に價すべき事は唯だ二ツ、造出せられたる事と、救贖せられたる事即是れなり。

「諸天よ、爾宜しく上よりして滴るべし、雲宜しく義を掛て、地をして割開せしめ、救と義とをして發苗せしめ、彼をして同じく之を産せしむべし」(イザイヤ書四十五の八)、「願くは爾諸天を裂て降れ」(同書六十四の一)、「爾我が逆じめ料らざるの不思議を以て降るや、我儕は堪へ忍ばれざるべし」(同書の三)、「而して上主も亦預言者を以て之に應じたり、曰く「我義伊れ運し、我救已に出たり、我臂將に列國を鞠せんとす」(同書五十一の五)、「再び少時を俟て、我將に天と地と及海と乾土とを震動せんとす」(我將に万民を震動せんとす、則ち下民の翹望する所の者將に臨み至らんとす」(アグゼイ書二の六)。

而して他の條章に於ては、救主の既に臨み來りたるを畫きたり、「我僕を觀よ、我必ず之を扶けん、我が選ぶ所の者、我靈の悦ぶ所なり、我れ我靈を以て之を扶く、彼れ將に義の鞠をして異邦人に傳へしめんとす、彼れ將に號呼せざらんとす、其聲を揚げて其聲をして衢間に聞へしめざらんとす、已に傷むの葦、彼れ之を折らず、燼餘の炷彼れ之を熄せず、彼れ將に眞理を以てして、義の鞠をして行ひ傳へしめんとす、彼れ必ず衰へず、胆を喪はずして、其の義の鞠を地に立るに及ばん、諸島皆將に其律法の爲にして俟んとす」(イザイヤ書四十二の一より五まで)、預言者は斯の如く救主の溫良恭謙なるを畫きたりしが、其事後日基督の言行を以て明かに遂行せられたり、人若し福音書を繙かば「毎頁に於て必ず之を見るを得ん、如何なる教敵なりと雖、此人間以上の溫良恭謙を見ては、基督獨得の品性あるを拒否するを得ざるべし。

救主の奇跡に就ては斯の如く記さる、「盲者は視、聾者は聽き、跛者の足は鹿の如く輕快なるを得、啞者の舌は束縛を解かれたる如くならん」(イザイヤ書三十五の六)、「而して其事の如何に成就せられたるや否やは、基督が「爾は來るべき者(救主)なりや」(ルカ傳七の十九)との問に答へられたるを見て知るとを得るなり、即ち彼は正しく此の預

言者の言辞を擧げて答へたり、是れ蓋し最も適切なりし好個の答辭にてありたり、何となれば彼は此奇跡を衆人稠坐の中、万衆矚望の中に行ひたればなり、之を拒否せんか、視聽の復せられたる盲者聾者の現存せるを如何せん、之を疑はんか、預言の斯くも珍らしく成就せられたるを如何せん、故に此は救主降臨しつゝある確固不拔の證據なりき。

預言中最も吾人の注目すべきは、預言者イザイアが救主の光榮と屈辱、威能と微弱、死去と蘇生とを畫きたる條章に在らん、其條章左の如し。

「我儕道を傳る誰か之を信せんや、耶和華の臂誰に顯示せるや、蓋し彼れ興發する
と其前に芽すが如く、亦た燥土に出る根の如く然らん、其嘉容及び貌の美なし、
我儕之を見るときは則ち必ず觀る可き者、我儕をして之を慕はしむる無らん、人の
藐忽する所、厭棄する所と爲り、憂患の人と爲り、且つ愁苦に習へり、亦た自ら其
面を我儕に掩ふが如し、人の藐視する所と爲て、我儕之を敬せず、是れ然り、我
の憂患を任じて我の愁苦を負へり、我儕は乃ち其撻を受るは、神の撃つ所と爲て、

苦難を受るを致すと意へり、然ども我儕の諸愆の爲に刺され、我儕の諸罪の爲に
壓壞せられ、我儕をして平和を得さしむる者の罰、悉く其身に置き、且つ其鞭扑
に緣て而して我儕醫るを得たり、我儕悉く羊の如く路に迷ひ、各々轉じて己の
道に向ふ、耶和華我が衆の愆を以て其身に任せり、彼れ迫を受けて自ら卑くす、然
ども猶ほ口を啓かず、彼の羊の宰地に攜らるゝが如く、羊の其毛を剪る者の前に
在て默然たるが如し、彼れ亦た是の若くにして口を啓かず、彼れ苦と鞠とに由て取
られ、其世代の中誰か其生ある者の地より絶たれて、乃ち我が民の愆の爲め、即
ち之が爲めに刑を受ると念はんや、其基は則ち惡人と偕にして設けり、亦た富人と
其死の時に偕にす、蓋し彼れ未だ惡を行はず、其口亦偽り無ればなり、然れども耶
和華願て以て之を壓壞し、乃ち之をして愁苦を爲さしむ、其れ既に己の靈を以て贖
罪の祭物と爲せり、將に己の苗裔を見んとす、其れ將に其諸日を延べんとす、且
つ耶和華の悦ぶ所の事將に其手に在て而して利達せんとす、其靈の劬勞より出る
所の者、其れ將に之を見て心足らんとす、我公義の僕、將に己を識るの知識を以

て多人を稱して義と爲んとす、蓋し其れ將に彼の罪を任せんとす、之に縁て我將に衆人の中に由りして彼に分與せんとす、亦た將に強者と與にして偕に掠物を分たんとす、其己の靈を死に掛き、且つ惡人と同類爲りと稱せられ、其れ亦た自ら多人の罪を任じ、其れ亦た將に惡人の爲に祈禱せんとするに縁る（イザイヤ書五十三章全文）。

同預言の
最も注目
すべき所

此條章の最も注目すべき所以は、救主の苦難死去を明瞭精確に預言して、宛んど之を目撃したる福音者の記述したると秋毫も異ならざるを覺へしむるにあり、此條章を讀むときは、預言者イザイヤ身躬らも八百年以前にありて、基督の苦難死去等を眼前に目撃したるが如く感ぜらる、而して其最も不可思議に堪へざるは、同條章の記する所全く人知を以て想像するをも得ず、常理を以て論ずるをも得ざる事項にありたるとなり、蓋し仔細に同條章を検するに、同一の人物に就て、全く反對なる事項の相合せるとを記せるなり、試に看よ、屈辱苦痛の如きは、神なる性徳には、毫も吻合すべからざるものにあらずや、神にして屈辱を蒙り苦難を受くるとは、是れ實に吾人の念頭に浮

び出でざる事なり、柔弱、羞耻、死亡の如き亦然り、神の權能光榮とは、水火相容れざるものなり、然るに同條章は斯る反對矛盾せる事項が一救主の身によりて成就せらるべきことを明言したり、是れ實に普通の常理を以て律すべからざる所以なりとす、是故に彼の猶太人の如きも、此人間的弱質と、神明の高徳威稜との同合を了解する能はざりしを以て、此預言の一救主の身を以て遂行せらるべきを信する能はざりき、彼等が今日に至るまで耶蘇基督を救主として認めざる所以も、亦格別茲に在るなり、凌辱罵言の下に屈せられ、峻法極刑の下に殺されたる者、是れ彼等の救主として仰ぐ能はざる所以なり、然り、是れ實に之を目撃したる人々に取りても、測知すると能はざる秘密なりとす、是を以て事跡成就後の今日に在る吾人基督教徒すらも、之を知了すると能はずして、單だ之を信仰して拜するのみ、天主にして人間、死去したる者にして復生し、磔刑に處せられたる者にして天に昇揚す、是れ唯だ拜して信するの外あらざるなり、玄の玄、奥の奥、測知せんとするも、能はざるなり、然らば則ち、此玄妙不可思議なる秘密を八百年以前より報道したる預言者は、全く神の明を以て之を見たるに

預言と應

あらずんば、焉んぞ能く此に至らんや。
 救主の他の性行、格別其死去の場合等に於ける預言の如きに至りても、又皆明瞭精確にして一點の疑を狭むべき所なし、ザカリヤは、救主が貧謙なる義王の如く、小驢に乗りて、ゼルザレム都城に入るべきを明に預言す、(其書九の九)、而して此事の如何に成就せられたるかば、マテオ傳第二十一章に於て明かなり、同預言は救主の銀錢三十枚に賣らるべき事柄を明言す、而して此事(マテオ傳第二十七章二十六句)に於て明かに成就せられたるを見る、斯の如く逐一例證するは煩勞に堪へず、讀者請ふ自から事跡以前の歴史と以後の歴史を對照して參考熟視せよ、余は單だ章句の目錄のみを左に掲げん。

詩篇第百〇七章二十五句は	シヨアン傳第一章十一句と	對照
イザイヤ書第五十三章三句は	マテオ傳第十三章五十五句と	〃
詩篇第四十章十二句は	マテオ傳第二十六章二十五句と	〃
ザカリヤ書第十一章十二句は	マテオ傳第二十六章十五句と	〃

イザイヤ書第五十章六句は	マルコ傳第十四章六十五句と	〃
詩篇第六十八章二十七句は	マテオ傳第二十七章三十一句と	〃
詩篇第六十八章二十二句は	マテオ傳第二十七章四十八句と	〃
詩篇第二十一章十七句は	マテオ傳第二十七章三十五句と	〃
イザイヤ書第五十章六句は	マテオ傳第二十六章六十七句及二十七章三十句と	〃
ダニエル書第十一章二十句は	マテオ傳第二十七章一句と	〃
詩篇第二十一章十九句は	マテオ傳第二十七章三十五句と	〃
イザイヤ書第十一章十句は	マテオ傳第二十八章と	〃

預言と應

以上揭示せる章句の最終に記されたる事は、救主の墳墓の光榮となる預言にして、此預言の如何なる點まで成就せられたるかば、基督が三日目に忽然墳墓より蘇生し出で、其弟子に一大驚愕を食せしめたる當時より、一千八百餘年後の今日に至るまで、世界中の人民共に喫驚感嘆して、絶へず此に參拜し、隨て此墳墓を自己の領に歸せしめん爲め、今日まで二十有餘の國民相競争しつゝ、來りたるを見ても瞭かなり。

余は以上の外に尙ほ例證するを得る事項の多々なるを見る、然れども今一々之を枚舉するに遑わらず、要するに預言と事跡、切言せば、事跡以前の歴史と以後の歴史とは、上下符節を合するが如く冥投し、彼此音調を一にするが如く妙合するを見ると云ふに在るなり、勿論初めて舊約書を開き、是等の事項を詩篇若くは預言書の中に讀むときは、毫も其妙味を感ずるを得ず、何となれば舊約書中には、右等の事項は處々方々に散在し、事柄によりては遠く相懸絶し、若くは彼此相離れて全く孤立するの觀あるが上に、其言往々簡にして畧、時としては澁晦にして領解し難き章句も間々之あるを以て、偶々之を一見したるのみにては、讀者の眼には容易に觸れざる事多ければなり、然れども斯く處々方々に散見せる所を探りて、之を成就せられたる事跡以後の歴史と對照して熟視するときは、其一字一句の末と雖も忘却に附せられずして遂行せられ、如何なる難句も逐一茲に明瞭の光を得るを見るが故に、讀む者此に至りて初めて喫驚の念に打たれて、不覺感嘆の聲を發するに至るなり、蓋し其初めに見難く解し難き者、後日眼下に成就せられて、一目瞭然たるに至るときは、精神の感動最も激甚なるを

常とす、是故に預言書を見て其初め順なく序なしと認めたるもの、意なく義なしと見做したるもの、後日冥々人に知られざる天の攝理が、上下四千年の間に一字一句づゝ之を解釋して、除々と其大畫策の在る方面を見せしめ、其愈々遂行の時期到達するに當りて、忽然一大偉人を起して之を明解せしめ、之を實行せしめて、細大遺すなく、精粗漏すなきに至らしむるを見るに及んでや、茲に初めて心目割然として開け、天意の在る所喫驚感嘆せざらんとするも得ざるに至るなり。

余は今此事を證せんが爲に一例を擧げん、詩篇第五十八章二十二句に「我食としては、膽を興へ、我れ渴せる時は酔を飲ましむ」と云ふ語あり、若し注目して讀まずんば、此語も舊約書に記さるゝ他の語句と同じく、必ずや讀者の眼に輕々看過さるべし、然れども耶蘇基督が十字架上に在りて將に死に垂んとせるに際し、己れに就て記されたる最終の預言を遂行せんが爲め、既に目睫に迫り來れる死其物を暫く制止して、大聲揚言して「我れ渴きぬ」と云ひ、葦の一端に束ねたる海綿を以て酔を味はしめらるゝを見るに及んで、初めて彼語の茲に應驗あるを認めて、感嘆措く能はざるに至るなり、

應驗の最も注目すべき所

詩篇の一句と雖も、此の如く實際に成就せらるゝに至ては、實に彰明顯著なる一大事實、心にも精神にも徹底する一大證據と謂はざるを得ざるなり、而して事既に茲に到り、預言中應驗なき語一句もなきに及んで、「萬事成就せり」の語と共に、頭を傾けて生息を絶たせ給ひたるを見るときは、木石の如き人間と雖、茲に感動せざる者はなかるべし、「萬事成就せり」の語、是れ實に神の攝理の預言を遂行するに如何程周到なりしかを知らしむると同時に、救主に就て先言せられたる百事の如何なる點まで成就せられたるかをも示すものなり。

第十一の預言

(第十一)歳月湯々として流水の如く經過し、救主の降臨日一日に接近し來るに及び、之を近きに觀望したる預言者の言も、層一層明瞭となり來りぬ、年代の順序を以て云ふときは、ダニエルは是れ最終預言者の一人なり、其預言の明確なるは、無神論者が是れ預言にわらず、歴史なり、事跡以後に當り、預言の衣を被せて記されたるものなりと唱道するを見ても知らる、然れども此語の取るに足らざるや辨を待たず、如斯き非難は早や既に遠き古代に於ても試られたるとあり、今を距る凡そ一千七百年前アレ

キサンドリヤの哲學者ボルヒールなる者、既に此の預言の餘りに明快なるを見て、事跡以後の作なるを唱道したり、是時猶太の民は此語自國の一大預言者の面目に關し、隨て國體を毀損すると鮮少ならざるを見、同志相集まりて、ボルヒールの言を反駁し、ダニエルの書は基督降生前四百年に當り、既に聖書の錄に編入せられたる事、其後基督降生前二百六十年に當り、他の聖書と共に希臘語に翻譯せられたる事等を例證して、其事跡以後の作ならざる事を極めて容易く證明したり、(聖ヒエロニモのダニエル書に於ける序文を見よ。)

吾人は他にも亦證左とすべき者を有す、猶太の史家ジョゼフなる者即是れなり、氏は救主降生後七十年、即ちゼルサレム城の羅馬人より亡ぼされたる時代に棲息せるものなり、氏は自國に落ち來れる禍害を記して曰く「我國に落ち來れる此禍害は、ダニエル既に遠き以前より、之を先言したり、彼は羅馬人の勢力と其帝國に就きても語り、後日此民の我國に及ぼすべき禍害を預言したる者なり、而してダニエルの記して吾人に遺したる書は、今尙は吾人の會堂に讀まる云々、」(ジョゼフの猶太古國と題せる書

第十卷十二章に見ゆ。

此の如き明證ある以上は、余の蛇足を書くを要せず、然るも人若し頑然としてダニエルの預言を歴史なりと云はば、余は然り歴史なり、事跡以前(五百年)の歴史なりと答へんのみ。

然らば則ち、ダニエルの教主に於ける最も有名なる預言は何ぞ、余は其原文を擧ぐる前に當り、讀者の便を計らんため、一言以て其意のある所を畧記せん。

同預言の
解説

ダニエルは猶太國の王族の裔なり、教主降生前六百零六年ゼルサルム城がバビロン王に滅ぼされて、國の貴顯往々虜となりたる時、氏も亦捕はれてバビロンに至れり、然れども其賢名のためにバビロン王の寵遇を受けて、同國宰相の位に上げられたり、一日彼れ天に祈り、自國の捕虜放還せられてゼルサルム城の再び成立せらるゝを願へるとき、此事七十週の後に行はるゝの天啓を受けたり、曰く幾ばくならずしてバビロン王より敕令出で、ゼルサルムの再立を許すべし、曰く此の再立の業は七週の間繼續すべし、其六十二週を経過して基督出現すべし(即ち前述の七週を加入して六十九週と

なりたる後)、而して其最終の週即ち七十週に當りて基督死去すべし、此七十週の内に當りて、新らしき約、神人の間に結ばれて、他の凡ての犠祭は廢止せられ、猶太人民は神より放棄せられ、幾許ならずしてゼルサルム城は羅馬人の爲に滅亡せられ、滅亡せられたる後は荒涼漠々再び成立せらるゝの期なかるべし云々と、是れ實にダニエルの預言の大意なりとす、請ふ今其原文を掲げん。

「爾の民と爾の聖邑とに論及せん、已に七十次七節を定めて期と爲し、始めて惡を完ふし、罪を畢り、愆を贖ひ、又永遠の義を携へて、異象及預言を封じ、且一の至聖者に膏ぬれり、是故に爾論を出て復たゼルサルムを建る時より、受膏者即ち君たる者の時に至て、必ず七次七節及び六十二次七節あらん、時其街と其邑の垣と必ず復た擾々の時に建るを得んと知る可し、六十二次七節の後に及んで、受膏者必ず絶たれん、然れども己れが爲にするにあらざるなり、又必ず一君の民至るあつて、其邑と其聖所とを毀たん、其れ必ず洪水を以てして終り、且必ず戦闘あつて終り、即已に定るの荒蕪に至らん、七節の間彼れ將に衆人と約を定めんとす、又其七節の半に於て彼れ將に獻

祭と禮物とをして止息せしめんとす、又必ず殘賊の者あつて、其極處惡む可き物の上
に在らん、且必ず敗壞あつて、敗壞せらるゝ者即已に定る所の敗壞に掛がんとす」

(ダニエル書九の二十四
より同章の終りまで)

此預言の意を知らんと欲せば、須らく先づ茲に記載せる七節は、日の週にあらずして、
年の週なるを記憶せざるべからず、若し之を日の週となさんか、七十週は僅に十六ヶ
月有餘ならんのみ、預言者の今此に語れる事跡が、斯の如く僅々たる年月に於て遂行
せらるゝ筈なし、蓋し猶太の國俗に於て週に二様の別ありたり、一は日の週、(七日を
以て日の一週とせり)、二は年の週、(七年を以て年の一週とせり)、後者に就ての例は、
聖書にもあり、レビ記第廿五章八句に曰く「爾必ず己の爲に安息の年を核數する凡て
七、即ち七次七年なり、是の七次七年の安息は、爾に於て四十九年たり」と、而して此
安息なる大赦祭は、同國の習例によりて、每五十年目に施行せられたるものなり、此
の如き算數の方は、番に猶太國民の中のみならず、古への希臘人の中にもありたり、
(アリストテレスの政治論第七卷の終りを看よ)、其最も確たる證據は、彼れダニエル

の預言にあるなり、同預言者は第十章第二句に於て、「此諸日に當て我れダニエル愛を
懷きて、三次七日節を歴たり」と云へり、然らば則ち彼れの前述したる週なるものは、
日の週にあらずして、年の週なるや明かなり。

是に由りて之を観るときは、七十週即ち原文に七十次七節と記載せるは、七十に七を
乗するの四百九十年となる、此年月の後に教主降生すべしと云ふ。

而して此四百九十年は何れより算し初むべきやと云へば、ゼルザレム城再建に就き救
諭の發布せる期日よりする事は、同預言の語を見ても明かなり。

然らば此救諭は何時又誰れより發布せられたるや、アルタギゼルセス第一世、其即位
の二十年目に當りて之を發布せり、(エスドラス後書二の一參看。)

同王即位の二十年は如何なる時代に當れるや、茲に年代歷數を計算することを得るも、
剩り煩勞に堪へざるを以て、余は單に其成計の數のみを擧ぐ、同王即位の二十年は救
主降生前四百五十三年に該當す、今此四百五十三年に三十七年を加ふるときは、正し
く前記の七十週即ち四百九十年となりたる數となる、而して此七十週即ち四百九十年

の終は、救主降生後三十七年に相當するを見ん、故に七十週の最終の一週は、救主降生後の三十年より三十七年に至るまでの間に當るなり、而してダニエルの預言に據るときは、此最週一週の中間に救主死去すべしと云へり、乃ち現今紀元の三十四年正しく基督の死去したる年に該當するなり。

此の如き精算あるが爲め、我基督公教に反對する論者も、到底預言の成就を拒否する能はざるに至れり、羅馬人の猶太に來りて侵襲したる事、同國及び其殿堂の焚燼したる事、猶太人民が世界の四方に離散飄遊せる事、ゼルザレムに於て最早祭儀の廢止に歸せる事、及び新約なるものが神人の間に立てられて、世界中に現行せられ居る事、是等は已に遠き以前に於て成就せられあるを見れば、教敵者如何に反抗すと雖、焉んぞ預言の精確なるを否定するを得んや、復た況んや世界の文明國人が、年月を基督降生の時より算し來りて、之を公私の書冊に記入しつゝ、知らず識らずダニエルの預言の成就せられたるを證明し居るに於てをや、教敵者は斯の如き光明正大なる事實を如何に解釋せんと欲するや、我基督公教に反抗する者は、茲に至りて愈々益々困苦する

同預言の
應驗は反
對論者の
否定する
所能はざる

なり、試に我基督公教は、一ダニエルの預言の外、他に基く所の理由を有せずと假定せよ、單に此一預言にても吾教の天授神立の教なると明瞭なり、何となれば斯の如き預言が、斯の如き點まで成就せらるゝ事は、神の力にあらずんば、得て能すべからざればなり、教敵者若し神と云ふ一字を省かば、如何に此預言を解釋せんとするも、畢竟徒勞に過ぎず、而して是れがなめ却て吾教の眞理を天下に紹介すると同時に、自家の言論の微弱なるを世に示して、識者の嗤笑を招くに至るべし、彼の猶太人なる者も、亦是に至りて教敵者と同じく窮困す、彼等はダニエルの預言を以て、事跡以後の歴史にわらずと證論しつゝ、其預言書を掌中に握りたるにも係らず、今其預言の逐一成就せられて、茲に年あることを知らざるは何ぞや、セルサレムは既に亡びたるぞ、殿堂は既に灰燼に歸したるぞ、自家の頭上に落ち來るべき禍害も、既に預言の如く落ち來りたるにはあらずや、蓋し彼等の目の未だ發開せざるは、餘事皆成就せられたるも、同時に來るべき救主は未だ來らずと思考するに在るなり、彼等は其救主の來らざる原因を自己の罪惡中に求む、又其預言の精確ならざるを訴ふるに由なきを以て、遂に救主

降來の年月を黙々に附せんとを是れ務む、偶々事に茲に従ふ者あるときは、直に呪咀せられたる者と公言す、奇怪なる哉事や、一國の民にして其頑冥茲に至る、誠に憫むべきなり、然るに其憫むべき頑冥は、天下の人民に對して大なる益をなせり、何となれば此頑冥なる民は、預言の原文と又其主要なる註釋とを各國に携へ到りて、到る處に我基督公教の眞理なる一大證據をなしつゝあればなり。

余は是に於て彼の猶太の史家ジョゼフの言に就き、一の想起する所あり、彼は羅馬人の侵襲と自國の滅亡とを明かに其歴史に記したり、而して彼れの記したる如く、果して羅馬の大將チトス來りて、ゼリザレムを亡ぼし、殿堂を毀ち、猶太人民の頭上に慘憺たる悲劇を演じながら、己れ外教人なりしにも係らず、「是れ此禍害は余の加ふる所にあらず、此民を咀ふ神の命によりて然するなり云々」と語れりとぞ、此語はジョゼフの歴史に明に記載せられあるなり、(ジョゼフの書第八卷十六章參看。)

而して此神の呪咀所謂天罰は、猶太の人民が救主基督を磔して之を殺戮たるに原因する事は、預言書に於て明白なり、事實の上に於ては尙更明白なり、何となれば同國は

果して滅亡し、基督は到る處に尊拜せられつゝある事茲に一千八百有餘年、是れ實に世界萬衆の具瞻する所なればなり。

第十二の預言

(第十二)ダニエル既に救主降來の年月を明かに預言したり、其後アグゼイは救主の現るべき所に就て先言しぬ、猶太人がバビロンの逮捕解かれて後、ゼルザレムに殿堂を再建したるとき、時の父老は之を往時の殿堂に比して、頗る狭小なるを見て、太く失望したりしかば、アグゼイ預言者は之を慰めん爲め、預言して曰く「新殿の光榮は遠く舊殿に優るべし、何となれば幾ばくならず救主來り此に入るべければなり、又天主此所に平安を興ふべければなり」(アグゼイ書二の三より十に至る迄參看。)

預言の應驗

而して此預言の成就せられたる事は、敢て喋々するを要せず、何となれば救主が嘗て聖母マリアより此殿堂に奉呈せられたるとき、老人シメオンは之を其懷に抱き、歡喜の餘りに叫んで曰く「主よ、今爾の言ふ所に循て、爾の僕を釋し、安然として以て逝去せしむべし、蓋し、我自己に爾の救を見る、爾の萬民に備ふる所の者、光と爲て以て異邦を照し、爾の民イスラエルの榮を爲さん云々」(ルカ二の二十九より三十二)と語

たればなり。

第十三の
預言

(第十三)最終に當りマラキヤ預言者出で、救主に就て語れると掌紋を指すが如し、彼は先づ救主の前に先驅者の出でんとを先言して曰く、「視よ、我れ將に我使者をつかわさんとす、彼れ將に途を我前に備へんとす、爾が求むる所の主は、即ち約の使者、爾が悦樂する所の者は、將に忽ち其殿に至らんとす」、而して彼は此句を終ふるに「視よ、彼れ將に至らんと、上主之を言へり」(マラキヤ書三の一)の語を以てせり。

同預言の
應驗

果して此預言の如く、四百年の後に一子出でたり、若翰と名く、其天職は實にイスラエルに於て途を救主に備ふるに在りたり、(ルカ傳一の十七參看)、彼は預言者なりき、否預言者よりも大なる者なりき、何となれば預言者は單に遠くより先言したる迄なれども、若翰は近くシユルダン河に在りて、指を以て人民に教へ示して、「神の羔を觀よ、世の罪を任ふ者なり云々」(シヨアン傳一の二十九)と語りたるものなればなり。

夫れ此の如く、マラキヤと若翰との間には四百年の沈黙時代ありたれども、天主の大攝理の上に於ては、未だ嘗て中絶せる事一日も之をわらずして、マラキヤと若翰とは

恰も手を接して相繼承するが如し、蓋し前者は後者に就て「彼れ將に父の心をして子に歸せしめ、子の心をして父に歸せしめ云々」(マラキヤ書四の六)の語を以て、擲筆したるが如く、後者出づるに當つて、前者の預言したると同一の語を以て民に諭したり、曰く「彼れ將に……父の心をして其子を慈み、逆ふ者をして義者の智に歸せしめんとす」(ルカ傳一の十七)と、又前者が若翰に就て、「視よ、我將に我使者を遣さんとす云々」と預言したるが如く、後者も亦基督の來るを見て、「視よ神の羔云々」と語り示したるものなり、此の如く世界裁判の當初、吾人々類の元祖二人に初めて契約ありしより以來、洗者若翰が救主の降來を指をもつて示すに至るまで、預言者と預言者との間に大なる空間と長さ沈黙はありたれども、時の必用によりて預言者を起し、世の状態に應じて各自をして語らしめたる珍らしき天の一大畫策に於ては、未だ嘗て連續繼承せざるはなく、上下接續せざる處もなく、前後矛盾したる點も之なくして、事皆冥投暗合して、其曲調を合せ來り、遂に終りに當りて、百事實成せられて、一字一句の遺漏なきに至れり、余は此一大事實を見て、世界の歴史中一有て二無きものと斷言するに

第十三の
預言

りたればなり。

(第十三)最終に當りマラキヤ預言者出で、教主に就て語れると掌紋を指すが如し、彼は先づ教主の前に先驅者の出でんとを先言して曰く、「視よ、我れ將に我使者をつかわさんとす、彼れ將に途を我前に備へんとす、爾が求むる所の主は、即ち約の使者、爾が悦樂する所の者は、將に忽ち其殿に至らんとす」、而して彼は此句を終ふるに「視よ、彼れ將に至らんと、上主之を言へり」(マラキヤ書三の一)の語を以てせり。

果して此預言の如く、四百年の後に一子出でたり、若翰と名く、其天職は實にイスラエルに於て途を教主に備ふるに在りたり、(ルカ傳一の十七參看)、彼は預言者なりき、否預言者よりも大なる者なりき、何となれば預言者は單に遠くより先言したる迄なれども、若翰は近くシユルダン河に在りて、指を以て人民に教へ示して、「神の羔を觀よ、世の罪を任ふ者なり云々」(シヨアン傳一の二十九)と語りたるものなればなり。

夫れ此の如く、マラキヤと若翰との間には四百年の沈黙時代ありたれども、天主の大攝理の上に於ては、未だ嘗て中絶せる事一日も之あらずして、マラキヤと若翰とは

同預言の
應驗

恰も手を接して相繼承するが如し、蓋し前者は後者に就て「彼れ將に父の心をして子に歸せしめ、子の心をして父に歸せしめ云々」(マラキヤ書四の六)の語を以て、擱筆したるが如く、後者出づるに當つて、前者の預言したると同一の語を以て民に諭したり、曰く「彼れ將に……父の心をして其子を慈み、逆ふ者をして義者の智に歸せしめんとす」(ルカ傳一の十七)と、又前者が若翰に就て「視よ、我將に我使者を遣さんとす云々」と預言したるが如く、後者も亦基督の來るを見て「視よ神の羔云々」と語り示したるものなり、此の如く世界剖判の當初、吾人々類の元祖二人に初めて契約ありしより以來、洗者若翰が教主の降來を指をもつて示すに至るまで、預言者と預言者との間に大なる空間と長さ沈黙はありたれども、時の必用によりて預言者を起し、世の状態に應じて各自をして語らしめたる珍らしき天の一大畫策に於ては、未だ嘗て連續繼承せざるはなく、上下接續せざる處もなく、前後矛盾したる點も之なくして、事皆冥投暗合して、其曲調を合せ來り、遂に終りに當りて、百事實成せられて、一字一句の遺漏なきに至れり、余は此一大事實を見て、世界の歴史中一有て二無きものと斷言するに

躊躇せざるなり、若し之を見て感動せざる者あらば、天下何事にか感動するあらんや。

未だ應驗なき預言

余は終りに臨み、一層言を切にして之を論結せんは、預言の凡ては皆成就し了りたるにあらず、中には常に救主と其出現の時代のみに限らずして、世界の終りまで達せる預言的契約、預言的譴責なるものあり、是等は固より救主以前の預言の如く明瞭精確にして、吾人の今棲息せる此世界の終局に就き、吾人が現在に行ふ善惡に應じて受くべき未來の賞罰に就き、威光尊嚴を以て再び此世に降臨すべき聖主基督に就き、其の公平無私なる裁判、其の永遠不朽なる榮境に至る迄、明かに之を先言して、日星を睹るが如く、掌紋を指すが如し、是等の預言は、今より日々成就せられつゝ、世界の終末に至りて、初めて成就し了らんとす。

同預言の必ず應驗あるべき理論

吾人は救主以前の預言の一字一畫まで成就せられたるを見て、右等の預言も亦必ず一字一畫の遺漏なく成就せらるべきことを確信して疑はず、前者の如何なる點まで實成せられたるやは、後者の如何なる點まで實成せらるべきやを斷言せしむるなり、若し一

歩を譲つて、後者の預言の成就覺束なしと假定せんか、須らく先づ二事を證明せざれば斯く言ふ能はず、二事とは何ぞや、曰く之を預言せしめたる啓發者は、之を遂行するの實勢を失ひたる事、曰く上下六千年の間周到綿密に遂行し來りたる者、後日畫策を一變して、之を放棄したりと云ふ事即是なり、然れども此二事何れも出來得べからざる事なり、何となれば之を預言せしめたる者は、其預言書の中に屢々左の明言を記載せしめたり、曰く「我れ之を創始す、焉んぞ之を遂行せざらんや」(撒母耳前書三の十二)、而して吾人は、天主の立派に創始したるを見たり、故に亦必ず同じ天主の立派に之を遂行するを見るあらん。

余は是れより進んで第二の證據、即ち救主の降生後に記載せられて、彼れが此世に於ける性行を語りたる福音書、所謂事跡以後の歴史なるものに就て記述する所あらんとす。

事跡以後之歴史

福音

我基督教は二個の歴史を有す、一は事跡以前の歴史にして即ち是れ預言書なり、一は事跡以後の歴史にして即ち是れ福音書なり。

單に事跡以前の歴史のみにも、我基督教の何物たる事を知らしむるに於て充分なりとす、何となれば是等の歴史は元是れ上下數千百年を隔絶せる預言にして、東西其人を異にし、古今其代を殊にし、其言は書中の處々方々に散見し、其事は一見往々撞着の觀ありたるにも拘らず、後日其成就せらるゝ曉に至りてや、宛も符節を合するが如く、曲調を合するが如く、實に妙不思議なる冥投暗合をなしたるを以て、此事を考察する者は、冥々裡に天の珍らしき攝理ある事を認めざる時は、到底這般の事跡を解釋することを得ざればなり。

余は第二卷に於て預言の果して事跡以前に在りたる事、決して事跡以後に編成せらる

べき理なき事、初めに在りし如く終りまで其儘保續せられて、中間に増減變易等の事、毫も之れなかりし事、隨て開關以來今日に至るまで、全く同一なる眞誠預言なる事、是を以て其の成就せられたるに當りては、之を解釋するの道唯だ一にして、天主の手腕即是れなる事を詳論明證したり、是れ實に第二卷に於ける要旨なりとす。

今此第三卷に於て第一着に證明せんと欲する要點は即ち左の如し、事蹟以前の歴史即ち預言書に記載せられたる所逐一成就したりと教ゆる事蹟以後の歴史即ち福音書は、果して其題名の作者より記録せられたる者なるや(典據)、果して今日あるが儘に記録せられたるものなるや(完具)、記録せられたる所果して事實なるや(眞實)と云ふ三事。

福音書の典據及其完具

世に彰明顯著にして到底争ふべからざる一大事實ありとせば、余は先づ福音書の如く廣く世界に傳播せる書のあらざる事實を擧げんとす、彼は天下到る所に讀まれて如何なる人の手にも存す、先づ初めて此書を以て基督教を世界に弘布したる者は

聖書を讀

公教會是れなり、苟も同教會の司祭たる者、信者たる者は、何處の如何なる國土に棲

む者は第
一公教會

息するも、必ず此書を珍袖し、之を熟讀し、之を玩味し、之を實行し、之を以て靈性の光となし、之を以て生命の鑑となせる事は、同教會一般に行はるゝの習例なりとす。

第二異端
者

自ら稱して基督教徒と公言しつゝ、公教會の教旨に服従することを肯んせざる異端者も、亦皆此書を讀む、否な寧ろ彼等は公教會よりも尙一層の注意を以て之を精讀す、何となれば彼等は一方よりは自教の公教會より分離したる事を理にせんが爲め、他の一方よりは自教の我儘勝手なる説を主張せんが爲め、口實を福音書中より發見せんとを務めつゝあればなり、蓋し公教會と彼等異端者との間には、教爭軋轢絶へず行はれ居る事、又彼等異端者が反抗の武器を求めんとする唯一の寶庫は福音書即是なる事は、隠れもなき事實にして世界萬衆の皆能く知悉する所なり。

第三猶太
人

世界到る所に於て、基督教徒の中に混同雜居せる彼の猶太人の如きも、亦皆福音書を知了し、閱讀す、彼等は同書中に語られある事蹟は、自國の預言の應驗成就せられたるものにあらざる事、及び書中の豪傑耶穌基督なる者は、自國の祖先等の翹首伸領し

て希望したる救世主にあらざる事を證明せんが爲めに、滿腔の熱血を濺ぎ、畢生の心力を盡して反抗しつゝあるは、是れ亦天下公衆の具に瞻る所なりとす。

又彼の無神論者の如きに至りても、耶蘇基督及其教理を飽くまで嫌排せんが爲め、否自家の罪逆を撫して平安に生息せんが爲め、始終眼目を福音書の上に注ぎ、是れ偽書なり、悪書なり、誤妄謬戾の充塞せる書なり云々の悪言を以て、眞誠なる宗教を根底より除去せんとを務め居る事、是又天下誰知らぬ者もなし。

然り而して此の如き事態は決して今日初まりたる事にあらず、耶蘇基督の時代より既に然るなり、人は知るなるべし、我公教會は一千八百有余年前より、福音書を手にして、世界到る處に、同一の教を同一の道を以て教へつゝあるとを、而して人は又必ず知るなるべし、耶蘇基督の教は猶太國に於て、同國人民の眼前に弘布せられ初まりたるものにして、最早其當時より同人民が手を換へ品を替へて之に抵抗し、之に反逆して、飽くまで其傳播を防壓せんが爲に鞠窮盡瘁して今日に至るとを、然り、彼等の不忠は今尙は世界到る處に基督教を觝排して、其弘布を未萌に抑止せんとに従事しつゝ、

あるなり、彼等と基督教との戦は毎度死戦にてありしなり、次に又彼の異教人、嗚呼それ何づれの代にか此者なからん、使徒の時代に於て疾く既に之ありたり、勿論當時は「プロテスタン」教徒とは稱せられざりき、然れども名稱の如何は論ずる所にあらず、其同臭一味の徒輩は業に已に遠き以前より出沒隠見して、始終同一の氣即ち「プロテスタン」的の氣を以て我公教會に反抗し來りたり、是れ何の謂ぞや、何れも皆福音書を楯にして、公教會の教義と其所爲とを攻撃せんとする口實を同書中より見出さんとを努めたりと云ふ事はなり、而して茲に吾人の奇とする所は、彼等同臭一味の輩が、同一の氣を以て我公教會に反抗し來りたるにも係はらず、相互の間には初めより合同一致なるものはあらず、始終其意見を異にして、個々別々に分離したると古も今も偷あるなし、而して其意見を異にして相互の分離を來したる原因何れに在るやと云はゞ、正しく福音書の上に基きたる事即是なり、又次に彼の不信無神の論者は何れの時代にも跡を絶たずして世に横行したり、過去の時代にも横行し、現今の時代にも又横行す、而して彼等は眞教と善徳とを嫌棄するが故、勢ひ福音書を反覆上下して其意を曲げ、

其句を断じ、片言隻語までも分拆解剖して、誤謬不確の微點を摘發せんとせる事は、實に茲に一千八百有余年。

福音書の公教會、猶太人、異教徒、及び不信無神論者等の手中に在りたると果して此の如くなりとせば、反對論者は何を以て其典據を疑ふを得るや、替言せば、何を以て其題名の作者の録したるものにわらずと主唱するを得るや、今試に一歩を假して題名の作者の著作にわらずと假定するも、然らば則ち何時如何なる作者より録せられたるものなりやと問はゞ、彼等反對論者如何なる辭を以て之に答ふるを得るや、マテオにわらず、マルコにわらず、ルカにわらず、ジョアンにわらずと言ふとは易し、然らば如何なる者之を録したるや、反對論者自ら其人を舉げよと反問せらるゝときは、彼等恐くは答ふに辭なからん。

不信者なり若くは猶太人なりとせんか、當初より我基督公教を攻撃し、福音書其物をも攻撃したるものが、如何なる理由ありて、其攻撃する福音書を作りて、同じく其攻撃する我基督公教の爲に基礎を備ふるの愚を學ばんや、然らば不信者にもわらず、猶太人にもわらざるには言を待たざる所なり。

聖書を記
録したる
者は不信
者、猶太
人にわら
ず

異端者に
わらざる

或は異教者其人なりとせんか、唯だ一の異教者が、唯だ一の福音書を作り、自家の異教の爲めにせりとするも、答は誠に易々たるなり、何となれば凡ての異教の先きにありて、初めより凡ての異教を排斥し來れる我公教會は、此新しき福音書を見て、其何處より出で來れるやを詰問しつゝ、必ず之が作者の誑詐を公表せしならん、然れども吾人は未だ嘗て此の如き事ありたるを聞かず、吾人は基督公教の歴史に據りて、古來の異教者が福音書に就て曲解せんと欲したる章句、増減せんと欲したる字句、若くは全く變易し、廢棄せんと欲したる條章の如何を逐一知ることを得、然れども未だ一部の福音書を作り出したる異教者ありたるを聞かざるなり、況んや一部のみならず、四部に亘れる福音書を作り出したる者をや、斯の如き事業は數ある異教者相謀じて茲に従事すとすも、恐くは之を以て使徒若くは其弟子の作なりと公言して人に信せしむるを得ざるべし、若し之を試んか、前述の如く我公教會率先して之が詐誑を摘發せん、然らば則ち異教者にわらざることも又喋々を要せざる所なり。

或は又我公教會自ら之を録したりとせんか、是れ又不能の一事、何となれば猶太人を始め、不信者、異教者に至るまで、皆是れ同教會の不俱戴天の敵、一千八百有余年前の昔より今日に至るまで、同教會と彼等との間には、争闘軋轢未だ嘗て息みたることなし、同教會は其教義の公明正大なるを示し、其論據の確乎不拔なるを表しつゝ、一戦一勝の間に成立し來りたる者、彼等は又如何にせば此旗幟鮮明なる金城鐵壁を毀ふを得るやと、手を換へ品を替へて攻撃するを以て自家の生命となし來りたる者なり、然らば則ち斯の如き教會が、自教を成立する基礎とし、他教を排斥する武器として携帶し來れる福音書を、全部残らず編成し、若くは其重要な諸點を増減取捨したりと假定するも、彼等猶太人、不信者、異教徒は必ず反抗の旗を揚げて、三面より同教會を攻撃せん、斯の如くなることは同教會自ら成立するを得ざるべし、何となれば斯の公然の誑詐に反對する者は、雷に此三敵のみにあらず、同教會の信徒それ自らも、亦必ず之に反對して其偽作の福音書を受けざるに至るべければなり、我公教會如何に愚なりと雖、豈に斯の如き自業自滅の拙策に出でんや、然らば則ち我公教會にもあらずると是れ又明々白々たり。

此の如き賭易き事柄に喋々辨論するは、畢竟是れ徒勞のみ、故に余は是れより歴史に徴して、福音書の典據は何れの時代より信用せられ來りたるやを陳べんとす、蓋し如何なる巧妙周密なる論者と雖、使徒の時代の外に他の時代を提出する事は得ざるべし。

今此福音書の典據を論ずるに當り、我基督公教の業に己に世界到る處に公布せられて、王公貴人に至るまで皆之を信奉せる後代に於て論證するは、蓋し無用の長談なるべし、何となれば此際に在りては、福音書は既に如何なる信徒にも讀まれ、隨て福音書の名は天下到る處に響き渡りたれば、毛頭疑を容るべき餘地なければなり、然り、衆人皆使徒を作者と信せる時代に於て、之を論辨するは眞に是れ徒勞のみ、因て余は一躍して教會創業の初世紀に遡りて、之を點檢せんとす。

救主降生後三百二十四年に當り、史家ユゼビオは自著の歴史第三章に於て、當時一般に信用されたる聖書の目録を記せり、而して氏の目録の中に、四個の福音即ちマテオ、

三世紀の
證

マルコ、ルカ、ジョアンの福音を列記したり、是れ實に當時既に此四個の福音書を以て、右四聖の作なりと信じ居りたる明證として見るを得るなり、斯の如き例證は初世紀に於て、枚擧に違わらず、今逐一之を引用するを得ざるが故に、余は單だ此點に於ける教傳は、教會の當初より連綿として絶へたことなきを示して足れりとせん。

ユゼビオに先つ一世紀前に、偉大なる人物あり、オリゼーヌと云ふ、學者の叢林と稱せられたるアレキサンドリヤ府の人にして、當時顯名赫々たりし哲學者又は猶太人等と議論を上下し居たる哲士なり、氏は(二百四十五年)斯る教敵の間に在りて、公然マテオの福音書を解釋し、其解釋の中に曰く「余は教傳により、四個の福音書ありて、四書共に普天の下に在る天主の公教會に異議なく採用せられたるを知る云々」而して氏の直に四個の福音者の名を列擧したる所を見るに、其數其名毫も今日と異なる所なし、今又最終の福音者ジョアンが自著の福音書を世に公にしたるは、第壹世紀の終りに當れるとを考ふるときは、同福音者とオリゼーヌとは相距る僅に一世紀なることを知るなり。

オリゼーヌ

テルトリ
アン

然れども余は尙一步を進めて福音者に近接せる時代まで遡らんと欲す、教主降生後二百零七年に當り又一の偉人物あり、東西に隠れなきテルトリアン(百六十年より二百四十五年)即其人なり、氏は異教者マルシオンなる者を辨駁し、明かに公言して曰く「信仰はジョアン、マテオの二宗徒を以て我等に規定せられ、又ルカ、マルコの二宗徒を以て再び我等に反覆せられぬ云々」、福音書と其著者(福音者)とに就き是より明かに指定したるものあらざるべし、氏は又曰く「同一の信仰の連印を以て一致合同せる公教會は、聖ルカの福音書を當初より保有し來れり」、氏が茲に聖ルカの福音書を指名したるは、同福音書の言、最もマルシオンの異教(今より一千五百年前に消滅したるもの)に反對し居ればなり、是に由りて之を觀れば、教主降生後二百零七年に當りては、全教會一般に前記の福音を採用し保有し居たる事明瞭なり。

二世紀の
證
イレチ

テルトリアンの以前、而かも使徒に一層近接せる世紀に當り、聖人イレチ(百四十年より二百零二年)なる者ありたり、ジョアン聖史の門弟に當れる聖ポリカルポより撰拔せられたる者なり、同聖は自著の書第三卷二章七句に於て、當時の異教に對し左の

言を記したり、「吾人の福音の明確なる事それ此の如くなるを以て、彼等異教者に至るまで、自己の説を確立せんが爲め、福音書の證據に依頼しつゝ、同書の典據を證明するに至るなり」、而して同聖は又四福音を今日の如く明かに指名して、當時之を濫用せんとしたる異端者に、頂上の一針を加へたり。

余は尙々遠く遡り、益々使徒の時代に逼らんとす、救主降生後百六十七年に於て致命したる聖人に、ジュスチンなる者あり、教外の哲學者の歸順したる者なり、同聖は東方の諸教會を巡遊したる者、救主降生後百三十八年即ち聖史シヨアンの死去を距る僅に三十六年後、基督教の護法論を草して之を羅馬の皇帝アントニオに献納したり、同書中に聖人は明かに當時の基督教徒の間に行はれたる習例の重なる者を記したり、今其中に就て福音書に關せる一項を擧ぐれば、實に左の如し、「世人の稱する大陽の日（日曜日之事）に當り、都邑に居住する者一堂に相集まりて、宗徒の遺書を朗讀するを常とす…朗讀畢るや之が長上に位する者、一場の説教をなして、此高尚なる教訓を實踐せしめんことを勸告す云々」、同聖が「宗徒の遺書」と云へるは、明かに福音書を

指したるものなり、何となれば同聖の他の言中にも「宗徒は其遺書即ち人の稱して福音と云へる書云々」と云ふ語あればなり、是に由りて之を考ふるときは、基督教徒會合のときに、福音書を朗讀するの風習は、最早二世紀の初めより一般に行はれしを知る、隨て此風習は以前より傳り來りたるものにて、遡りて考ふれば第壹世紀即ち使徒の時代に於て、使徒の手を以て成立せられたると明瞭なり、然らば則ち反對論者は何に基いて此福音書の使徒の著作にあらざることを假定するを得んや、斯の如く歩々相進んで使徒の時代まで遡るときは、反對者の假定説も立つべき餘地なきに至るなり。

然れども余は尙は歩武を進めて、遠く本源に遡らんと欲す、シヨアン聖史の門弟に、イグナシオと云へる有名の聖人あり、救主降生後百零七年に當り、羅馬に行て致命したる者、今同聖のヒラデルヒヤ人に送る書を見るに、曰く「余の福音書に接するは、猶ほ耶蘇基督の血肉に接するの思あり」と、然らば聖人は疾くより既に「福音」と知悉したるなり、其言に據りて之を考ふるも、同聖は吾人と同じく同書の典據を認め居た

一世紀の
イグナシ
オ

ることを知るなり、何となれば福音を以て耶穌基督の直言と見做したればなり。

當時「福音」と云へる語の、最早天下に知れ渡りて、此書の當初より廣く引用せられたることを證明したる者は、獨り同聖イグナシオのみに止らず、他に又使徒の弟子たりし者三人あり、聖バルナバ、聖クレメンス、聖ポリカルボ即是なり、此三聖の書は今仍遺存す、而して此書中には四福音の長篇を引用したるものあり、勿論其言は一字一句まで原文に近接したるものにはあらず、蓋し此三聖何れも記憶の儘之を引用したるを以てなり、然れども大體の趣意に至りては、寸毫も異なる所なし。

余は斯の如く第四世紀より歩々相進んで、遂に第壹世紀まで至り、近く使徒の足跡までに達したり、是れより尙一步を進むるとは、甚だ難事、蓋し余をして使徒の福音書を編纂せるを眼前に目撃せしめざれば、能はざればなり、一千八百有余年後の今日に於て、此の如き事を希望するは、頗る難かるべし、然れども事全く能はざるにあらず、少しく思慮を費すときは、福音の使徒の手より出でたるを直接實視することを得ざるにあらず、何を以て之を言ふや、新約聖書の中に一書あり、其書の典據は萬口一致、敢て一人之

バルナバ
クレメンス
ポリカルボ

使徒の證

聖ルカ

を疑ふ者なし、其書を何とか爲す、曰く使徒行傳是なり、此書は基督教會創立の事跡を記述したるものにして、上下一千八百有余年間に亘れる同教會史の初一頁とも稱すべき書なり、此書の記者聖ルカは、同書の冒頭第一に記して曰く「余既に前書を作り、凡て耶穌の始めて行へ、始めて誨へたる所の事を述べたり云々」此語を見よ、吾人は同聖史に據りても、同聖が「使徒行傳」の前に既に一書を作りたることを知るなり、又之と同時に此一書の中には、同聖が耶穌基督の言行を叙述したることを知るを得るなり、語を換へて之を云へば、吾人は聖ルカの言に據りて、同聖が同名の福音を作りたることを知る、然らば則ちルカ福音の一書の典據は、是れにて明々白々たり、然れども是れのみにては未だ他の福音書の典據を知る能はず、如何せば可なる、幸にして同聖ルカは自名の福音書を記すに當りて、吾人に左の言を遺したり、曰く「蓋し多くの人がありて、我等の中に成就せられたる事を以て、手を舉げて之を書に著せり、始めより親しく見て、道の役をなせし者、我等に授けしに循ふ云々」(ルカ傳一の一、二)是れに由りて之を観るときは、ルカの福音書それ自らに據りて、同福音書の以前、既に他の福

聖書の典
據に對す
る教外者
の異教者
の證

アレク
サン
ド
ロ

「グ
ノ
ス
チ
ツク」

音書ありたるとまで明かに推知するを得るなり、是れより以上は使徒が自ら筆を採りて編述せる實況を目撃するにあらずんば、其書の典據を證明する能はず、然れども事既に茲に至る、頑陋の盲者にあらざるよりは、誰か之を拒否するを得んや。是を以て使徒時代の前後に棲息せる基督教の反對論者は、其異教人たると、猶太人たると、又外教人たるとに係らず、畢生の心力を盡して絶へず基督教を攻撃排他しつゝ、福音書の典據に至りては、敢て一人之を疑ふ者なかりき、最も古き異教者はアレクサンチノなる者あり、氏は教主降生後百四十一年に當り、羅馬に往きて自己の異教を辯護したる者なれども、福音書の典據に至りては、毫も之を攻撃せず、却りて自己の異説を符合せしめんが爲に、字句の意を變更して、飽まで福音書に基かんとを務めたり、爾來夥多の異教者は世に湧き出でたり、其名千々、其説萬々、然れども福音書に對する言動は、終始一轍に出でたり。當時の異教者の中に、最も著明なる者は「グノスチック」と稱したる異教者なり、此異教者は福音書に記載せる教訓を殘らず排斥したり、何故之を排斥したるやと云ふに、決

して同書が使徒の作にあらずと云ふがためにあらずして、同書に記載せる教訓の余りに卑法なりと云へるが爲にてありき、蓋し此異教者の説に據るときは、使徒は二種の教を有したりと云ふ、一は卑近にして無知の愚民にも適せる者、一は高尚にして獨り賢哲にのみ供せられたる者是なりと、而して彼等は唱道すらく、卑近なる者は使徒之を福音に記載したり、我等は唯だ其高尚なるものを採りて遵奉する者なり云々と、然れども彼等は如何にして此高尚なる教を授受したるやに至りては、敢て一言をも爲さず、又實に之を證明するを得ざりしなり、是故に彼等は自ら世の賢哲を以て誇稱しつゝ、漸く天下の嘲笑を招きて、遂に虚無に歸し去りたり、唯だ其福音書に就て語りたる言のみは、今尙は遺存して、吾人の證據を爲すに至りぬ、乃ち使徒は其教を人民（即ち凡ての人類）に供するが爲め、福音書に之を記載したりと云ふ事はなり、此語に據りて彼等か福音書の典據を信じ居たると明かに知らる。

セルス、
ホルヒ
ル、ジュ
リアノ、

異教者の外猶は當時我基督教に反對したる者は、外教人のセルス、猶太人のホルヒール、及び廢教皇帝のジュリアノ是なり、此三氏は最も巧妙周密なる反對論者なりき、

彼等は有らゆる哲學、有らゆる歴史、有らゆる人知好策を廻らして、我基督公教を撲滅せんとに従事したる者なり、耶穌基督に對せる尊拜を傾倒破滅する事、是れ實に彼等畢生唯一の事業にてありぬ、今日の無神論者の唱道する所は、往々皆此三氏の言を反覆するに過ぎず、偶々自己の腦髓より發見せるが如く誇稱する者あるも、是れ其遠き古代に於て已れよりも巧に論じたる者ありたることを知らざるの徒なり、而して今此三氏が福音書に對して如何なる言動ありたるかを考ふるに、彼等は毎々證據を同書及び他の新約書より引用して、毫も此書の典據に就て疑を挟みたる跡あらざるなり。セルス(百七十年代)は飽まで基督教を攻撃すと公言したる者、然れども福音書の曲據に就ては毫も容喙せずして、單だ聖マテオの福音書に順を逐ふて嘲笑的の解釋を加へたるのみ、同書は聖マテオの書にあらず杯と云ふが如きは、何處にも記さず、却て此書當時凡ての人々より基督教の基礎の如く見做されたるを前提して、成るべく之を嘲笑の裡に埋没せんとを務めたるものなり、蓋し此書を目して基督教徒の信する時と處の人を以て作られたるにあらずと主張して、其典據を暗まさんとするが如きは、實に

一大難事と思はれたるなり、若しも斯の如く難事にあらざりせば、此巧妙なる教敵は、必ず當時に在りて之が攻撃に着手したりしならん、而して事茲に出でざりしは、此事余り明瞭にして、之れが攻撃に従事せば、狂者の如く目せらるゝと知ればなり、然り、福音書の典據を攻撃するは、今日吾人が日本外史の典據を拒否するよりも十倍、百倍、千倍も難し、何となれば彼に於ける證據は、此に於けるよりも千百倍も多ければなり。」

ホルヒールは第三世紀の央に當りて、我基督公教に反對したる者、氏は同教を攻撃せる一書を作れり、當時の外教人皆之を以て神書の如く稱揚したり、彼は其書中に於て福音書に記載せる使徒等の行爲を嘲りたれども、同書の典據に至りては、敢て一言も之を攻撃せず、要するに彼れの爲したる事は後代無賴兒の所爲に毫も異なるどころなきなり。

ジュリアノは第四世紀の央に生息せる者、皇帝にして且哲學者、初め基督教徒にして後廢教せる者、故に我基督公教に對しては、他の反對論者よりも最も硬強に之を攻撃し

たる者、氏は元來好知に長けたる者、躬自ら满腔の熱血を濺ぎ、羅馬帝國の全力を盡して、我基督公教に反對したり、彼は基督教徒に對して一種異様の窘逐を案出しぬ、乃ち彼は基督教徒を愚俗に變じて、天下嘲笑の玩弄物となさんが爲め、文學詩歌等を學ぶことを禁じたり、彼れが此時世に發布したる奇怪の勅令中にも、基督教徒を嘲笑しつゝ、福音書の典據と時人の多く此書を使用したる事とに就て、洵に吾人が取つて以て適切の證據となすべき言を吐きたり、何となれば彼は此勅令の中に基督教徒に詩歌文學を教ゆるを禁じつゝ、「寧ろ往てガリレヤ人の會堂に臻り、ルカとマテオを解釋するに如かず云々」と云へり、然らば則ち當時既にルカ、マテオの名が今日の如く知れ渡りて、其書信徒の中に解釋せられつゝありたることを知るに足るなり。

人或は余が斯の如く證據に證據を重ねるを見、斯る賭易き事項に就きて、斯く喋々の論證を累積するは、冗言贅論を以て貴重の時間を空費するに過ぎずと言ふ者あらん、然れども余は此譴責的忠告に對して答へんとす、然り尋常一様の歴史に就て其典據を云々するならんには、一二の證據或は足りなん、唯だそれ此福音書の典據に就ては、

以上の列擧し來れる百の證據も、猶ほ其足らざるを恐る、何となれば福音書は即ち是れ我基督公教の屹立する基礎なればなり、而して同教の敵とする所は、人知の光なる道理にあらず、賤しき人間の私欲汚情其物なり、是れ實に同教に反對する唯一の敵、此敵を敵とす、如何ぞ證據に證據を重ねて、同教の地盤を鞏固ならしめざるを得んや、余は實に以上の證據も猶ほ其足らざるを恐るゝなり。

論じ去り論じ來りて茲に到れば、餘る所は唯だ一の詰問のみ、余は此詰問を難者に先だつて提出し、論辨以て餘蘊遺憾なからしめんとす、請ひ問ふ其詰問とは何ぞ、他なし、「古來偽福音書なる者之あり、其數十有二に亘ると云ふ、然らば則ち今日の四福音書、誰か其眞偽を知らん云々」の語即是なり。

談偽福音書に涉るときは、須らく先づ同書中に語らるゝ事跡其事の偽ならぬを記憶し置かざるべからず、今此十有二の偽福音書を對照するに、文章及び區々の場合に就てこそ不同あれ、其大体の趣意に至りては、未だ曾て照合せざる所一も之なし、嗚呼是れ同偽書の編せられたるときには、同書中に語らるゝ事實の最早全世界に知れ渡りた

聖書の典據に反對する詰問

偽福音書

りと云ふ證據にあらざるや、殊に同書が東西國を異にせる所に編成せられて、而かも其數十有二に上りたりと云ふに至りては、愈々益々同書中に記載せられたる事跡の、疾く既に東西諸國に知れ渡りたる事を知るに足るなり。

故に偽福音書と云ふときは、使徒の作にてはならずして、無名の人より編せられたりと云ふ意なるは言ふ迄もなし、然れども既に事跡を斯く迄誤りなく記載せるに於ては、其人必ず使徒の口若くは其弟子の口より聞き得たる所を録したるや疑なし、而して是等の書は無論貴重有用の修身書として信徒の間に讀まるれども、使徒の權を以て裁可せられたる正當の福音書なりとは誰も思はざるなり、然り而して同書が典據ある四福音書と區別せらるゝ所以、正しく茲に在るを知らざるべからず、後者は使徒より編せられ、若くは裁せられたるものとして、敢て一人此に疑を容るゝ者なく、前者に於ては唯だの一書なりとも、典據ある福音書として、教會に採用せられたる事之なし。

然らば則ち今日の福音書は、果して使徒の手より成れる儘に繼續して、中間に變更増減等の憂毫も之なかりしや必せり、余は既に前條に於て福音書は古來説を異にせる反對

聖書には
古來變更
増減なき
證論

論者の手裡に在りたる事、又是等の反對論者は始終刮目注意して他教の誤謬を訴へんことを務めたる事を記したり、余は又公教會、異教者、猶太人、外教人等何れも皆同書を手にしたるが爲め、之を變更増減せんと欲するが如きは洵に難事、偶々之を變更せんと試むる者ありとするも、他の絶叫反訴によりて到底其志を果す能ざりし事をも記したり、而して此事は實際に於て果して其然るを證明せられぬ、何となれば異教者の中に福音書の原文を濫用して、自家の異説に符合せしめんとしたる者ありたるとき、公教會は始終之に反對して、其企圖を實行せしむるを許さざりければなり、同教會は使徒の信仰を擁護せると同時に、使徒の遺書を大切に寶藏して、異端者をして一手をも之に觸れしむるを肯んせざりき、是故に異教者の異説は其間に幾百千萬出沒隱見したるも、眞誠なる福音書のみは公教會の手によりて、毫も變更増減等の異變に逢はず、依然として舊時の儘に保續せられたり、故に異教者の手に觸れたる偽福音書は、何れも皆其異説と共に埋没せられて、今や空しく其名のみを遺すまでのみ、尙ほ之を切言せば、異教者の手によりて變更せられたる偽福音書なるものは、一日も此世に生息

するを得ざりと云ふて可なり、何となれば其一たび世に公にせらるゝや否や、忽ち公教會の學者に駁論せられ、僅かに少數の同教者の裡に其命脈を保ちたればなり、而かも是れ其異教が繼續するを得たる數年の間のみ、余は今茲に其一例を擧げん、彼のマルシオンなる者は、蓋し古來の異教者の中にも、最も大膽不敵の者なりしならん、彼はルカの福音書を贋造して、自家の異説に符合せしめんとを試みたり、然るに此事忽ち賢哲テルトリアン及び他の教會諸聖に摘發せられたるを以て、彼は目立ちたる變更をなす能はずして、或る章句をのみ減するに止まりたり、故にテルトリアンは尙ほ其書の我福音書に接近せるを記して曰く「マルシオンよ、子は我を福ひしたり、子自らは徒勞を取りたり、何となれば子の福音書に於ても、耶蘇基督は即是れ我耶蘇基督なればなり云々。」

右は唯だ一例のみ、然れども何れの代の異教者が福音書の原文に手を染めんとしたりとするも、亦皆此の如くにてありたり、乃ち其誤謬の出るや否や、忽ち或は公教會の學者より、或は他の意見を異にせる異教者より攻撃せられて、直に消滅するの否運に遭遇したるものなり、若し夫れ我公教會それ自らが之を變更したりと云ふが如きは、愈々以て其難きを見る、何となれば古來の異教者及び無神論者等の最も注目して、隙もあらば訴へんと圍繞し居たる者は實に同教會なればなり、故に同教會が福音書に手を觸れたりと云ふが如きは、夢寐にだも想起せられざりき、却りて同教會は始終之を舊時の儘に保藏せん事にのみ盡力して、大切に之を寶藏し來りたるを以て、何れの代の異教者も皆同教會の手より惠與せられたるなり、惠與せられて之を攻撃するとは、詢に報恩以仇の沙汰なりと謂ふべし。

既に以上述ぶるが如く、如何なる異教者も福音書の原文を變更増減することを得ざりしとするも、又如何なる者も之を試むるの志を起すことを得ざりしとするも、他に又一の難問あり、是れ又茲に辨明せざるべからず、何ぞや、他なし、當初未だ活版の發明なかりし時、書籍皆寫字生の手によりて寫されたるものなれば、屢々寫本せられたる際には、必ず文字の誤謬往々之ありて、福音書の原文に少なからぬ變更を來したるに相違なしと云ふ事是なり、然り古の書は何れも皆寫生の手に成りたるものなるが故、屢

寫本にも
誤謬ない
りし證據

々字句の誤謬變更を來したるや疑なし、事は種々の寫本に就て明かに見るを得るなり、福音書の如きに至りては、最も斯る誤謬變更の憂ありたるが如く思はる、何となれば古來同書の如く屢々讀まれ、屢々寫され、屢々譯せられ、屢々註せられたるものは、未だ他に其類例を見ざればなり、而して此事東西國を殊にし、上下代を異にしたる者より、種々異様の言語を以て翻譯せられたるに於ては、愈々其然るを見るなり、且又他の一方より考察するも、天主は斯る譯者寫生等の筆を左右して、誤謬變更の生ぜざらんが爲めに、格別の奇蹟を以て計らへりとも思はざればなり、此の如き瑣末の事に天主の奇蹟は必要ならず、天主は教會によりて教へらるゝ耶蘇基督の教理が、變更なく天下後世に傳へらるゝを以て足れりとするのみ。

然りと雖も茲に注目すべき一事あり、他なし、若し福音書の趣意に變更ありたらんには、基督公教の敵は必ず之を攻撃する一大好機を得たりしならんと云ふ事はなり、我公教會が耶蘇基督の教を弘布するに當り、確固不拔の基礎として基く所のものは、正しく此福音書に在るを以て、同教會の反對論者は此點に於ては實に注意に注意を加へ

て、一字一句の變更と雖も之を許さざるべし、試に看よ、彼等は凡そ福音の弘布せられたる所は、如何なる國までも往きて、凡ての寫本を對照参考し、拉丁語、シリヤ語、コフト語、アルメニヤ語、アラビヤ語等、あらゆる言語に翻譯せられたる福音書を探り出し、上は同書の初めて寫本せられたる時代(第三世紀)より、下は活字を以て初めて出版せられたる第十六世紀に至るまで、探偵的旅行をなして、凡百の寫本を一場に蒐集し、講究の上に講究をなし、參照の上に參照をなしたるにわらずや、故に其事今や一の學問となりて、評論若くは批評學と云ふ名目を以て世に生れ出るに及びたり、嗚呼又勉たりと謂ふべし、彼等が斯くして求め得たる種々異様の福音書の數、實に三千有余の多さに上れりと云ふ、而して彼等は抜目なき敵眼を以て、此過多なる寫本を點檢したるに、不思議なる哉三千有余の異邦の言語に記されたる書の中、教理の趣旨と書中の事跡とに就き一點も異なる所なかりしと云ふ、而して吾人の今有する福音書(即ち活字發明の際試験なく刊行せられたるもの)を、是等の寫本に對照し見るに、珍らしく相符合して、趣旨に於ては寸毫も異なる所なし、されば敵意より起りたる批評

學は、福音書の事を攻撃せんと企圖しつゝ、却りて之を明瞭ならしめて、日星炳然、一點疑雲なきに至らしめたり、隨て彼等の妄想したる難問は却りて福音書の完具を保するの物質的明證となりたるなり。

福音書の眞實

典據ある書なりと云ふ事は、眞實なる書なりと云ふを意味せず、替言せば、斯々なる題名の書は確かに其題名の作者より著述せられたるものなりと云ふ事は、其書の中に記載する所果して實際に行はれたる眞實無妄の事跡なりと云ふ事を理論的に結言するを得せしめざるものなり、試に看よ、吾人は古來書籍館に於て千萬の書あるを見る、其書の多くは、皆是れ僞作者の贋著にはあらずして、眞誠なる作者の手になりたるものなりとするも、爲に其書中に記載せらるゝ事は誤妄謬戻なしとは云ふを得ざるにあらずや、中に就て全く架空の虚説に充塞せる書、枚舉に遑あらざるなり、稗史小説の如き、往々皆是れならざるはなし、然らば則ち福音書は典據ある書なりと云ふ事より、同書は眞實無妄の事跡を記載せる書なりと云ふ事を推論するを得ざるが如し、然りと

雖余の前段に於て證明したるが如く、同書は果して使徒及び其弟子の手に成りたること明瞭確實にして、毫も疑を容るべからずとするときは、同書中に記載せらるゝ事跡を以て、果して實際に出来したる事實なりと白狀せざるを得ざる理由あるなり、蓋し福音書は世の書籍とは大に其趣を異にす、所謂世の書籍なるものは、一誦一讀の後往々皆書齋の一隅に放棄せられて、寂然聲もなく臭もなきに至るを常とす、設令斯くまで寂然の郷に葬られずとするも、僅かに斯々の人は斯々の志慮を有し、斯々の著作を爲したりと云はるゝまでにて、單に其遺物として保存せらるゝに過ぎず、故に其中には讀者の記憶すべき思想は、洵に鮮少なり、讀者が取つて以て言動の定規とすべき事項に至りては、尙ほ一層鮮少なりとす、唯だ夫れ福音書に至りては大に之と異なり、彼れの編せらるゝや、世の書籍の如く書齋の一隅に葬られたるものにあらず、蓋し彼の死書にあらず、生命の衰へざる一大活書なり、一たび編述せられてより以來、二千年に近き今日に至るまで、世界萬國の人々より絶へず熟讀せられ、玩味せられ、弘布せられ、註釋せられ、信用せられつゝあるなり、同書中に語らるゝ事跡は、古來幾百千

萬の人々をして其信仰を改めしめ、其言動を改めしめたり、同書が天下到る處に其宗教、其政治を改革せしめたることは、世界萬衆の齊しく具瞻する所なり、彼の基督公教に毫も冷熱を感ぜざる國民に至りても、知らず識らず同書の氣を呼吸しつゝ、公私の言動に鮮なからざる影響を受けつゝあるは、是又争ふ可からざる事實なりとす。

是故に福音書は嘗に一大新宗教の基礎たるのみならず、(此事既に吾人の一大注目に價すべき事なり)、亦實に一大新世界の基礎たりと謂はざるべからず、果して然りとせば、此一事を見ても同書中に記載せらるゝ事跡の眞實無妄なる事は、一目の下に瞭然たるなり、然り、右の一事のみにて他に證據を挙げざるも、同書の眞實は得て疑ふ可からざるものなり、然りと雖も吾人今茲に巍然として雲中に屹立せる一大築造を見て、其基く所の基礎、其支へらるゝ所の柱壁の堅牢無比なることを認むるときは、安然此に平居するを得るの感一層深さを覺ゆ、吾人基督教徒の福音書に於けるも亦實に此の如し、吾人の信仰、吾人の希望の基く所、正しく同書の眞實無妄に在るを見て、其眞實無妄の眞相が充分に證明發揮せらるゝを認むるときは、吾人は宛も確然拔くべからざる

地盤に安居するが如きの感なくんばあらず、余は斯る信任の心を吾人同教の信徒と其未だ之を知らざる世の正人君子に起さしめんが爲に、左に福音書の眞實無妄なる事を詳論せんと欲す。

福音は基督及其教の正史

福音とは何ぞや、曰く基督公教創立の歴史なり、否寧ろ同教の創立者耶穌基督其者の歴史と云はゞ、尙ほ一層至當と謂ふべし、何故之を四福音と云ふや、此歴史は一作者の手を以て、一回のみ記述せられたるにはあらずして、四人の作者の手を以て、前後四回編成せられたるが故に斯く謂ふなり、之を切言せば、唯だ四福音にのみ止まらず、其外に聖ペトロ、聖ポーロ、聖ジャコブ、聖ジュダ等の書翰も之あり、是れ皆前四福音書と同じく確たる典據ある書なり、而して是等の書は設令四福音書の中に語らるゝ事跡を順を逐ふて記載せざるも、同事跡を前提し、證明し、確論するを以て、福音書は四卷ありと云ふよりは、寧ろ八卷ありと云ふを得るなり、又余の既に前段に於て記したるが如く、典據ある此四福音の外に偽福音書なるもの其數十有二ありて、シリヤ、エジプト、ギリシヤ、イタリヤ等の諸國に於て編述せられたり、是等の書は固より使徒よ

り作られたるものにあらざれば、又使徒より裁せられたるものにもあらざるが故に、今日に至るまで偽福音書の名を以て稱せらるゝと雖も、其大體の趣旨に至りては、眞福音書と毫も異なる所なくして、彼此全く同一の事跡即ち耶蘇基督の生誕、其珍らしき奇蹟、及び其死去、復活等の較明顯著なる始末を記載せるを見れば、同書の編成せられたる時代に於て、耶蘇基督の歴史と其生死言動の事跡は、天下諸國に公然知れ渡りたるを明に知るとを得るなり、然り而して斯の如き偽福音書が、斯くも懸絶せる東西諸國に編成せられて、斯くも奇怪不可思議なる事跡に就て、符節を合するが如く冥投暗合せるを見るときは、是等の書の何れも皆其出づる所の起點を同ふして、耶蘇基督の眞誠なる歴史を定規としたる事は、彰々乎として疑ふべからざるに至るなり、乃ち知る、此記載せる所の事跡は、眞個に出来したる實際の事跡、所謂眞實無妄の眞理なることを。

夫れ此の如く、偽福音書は眞福音書のありたるを前提して、吾人に眞福音書の眞實無妄なる確證を與ふるものなり。

聖書の眞實に對する三個の證論

(其一)使徒の欺かざりし證

然れども人或は云はん、福音書の起點に於て誤謬詐語ありたるを保せず、即ち彼の使徒なる者が耶蘇基督に就て語れるとき、早や既に己れ自ら欺かれ居たり、若くは人を欺かんとしたるやも測られず云々と、是れ實に意外の難問なり、使徒の欺かれざりし事、况んや人を欺かんとせし事なきは、彼等が之を記載したる當時の状況を見て彰々乎たり、何となれば使徒の耶蘇基督に就て語りたる所は、彼等之を他人より聞き得たるものにわらず、世の一般の歴史家の如く、後代異郷の人の語れる所を耳聞蒐集して編述したるものとは、大に其趣を異にするものなればなり、彼等の記載したる事跡は、皆彼等自ら目を以て視、耳を以て聞き、手を以て觸れたる所なり、而かも彼等は其書中に語れる所の主公耶蘇基督と交ると三年、日夜其側を離れずして之に待し居たるなり、彼等は基督と共に自國の都邑を巡歴したるなり、ガリレヤの湖上に泛べるときも、始終基督と俱に居れり、基督が風濤に命じて之を静めたるるときも、彼と俱に居たり、彼が生れながらの盲者を癒せるときも、彼等は之を眼前に目撃し居たり、五個の麵包を分つて四千人の群衆を飽かしめたるるときも、彼等は彼れの側に待し居たり、否

彼等自ら之を群衆に分ち與へたり、彼がラザールを墓所より呼起して蘇生せしめたる時も、彼と俱に在り、彼がタポール山上に於て、日光赫耀たる光榮る顯示したる時も、彼と共に在り、彼がゼルザレム城に面して、同城の滅亡と世界の終末とを預言したる時も、亦彼と共に在りて、實に彼等は其召されて使徒に選ばれたる當時より、基督の彼等に訣別して天に昇りたる日に至るまで、未だ曾て一日も其側を離れずして待坐し居たるものなり、然らば則ち彼等如何に愚なりと雖、曷ぞ其耳目を凝して視聽せる師の言動に就て、欺かれたりと謂ふを得んや、余は再び斷言す、彼等は自己の眼前に行はれたる公明正大なる事實に就て、欺かるゝが如き憂は毛頭之れなかりきと、况んや其公明正大なる事跡なるものは、彼等が目に視、耳に聞き、手に觸れて疑を容るゝ能はざりしものなるに於てをや、是故に彼等の首領ペトロは語りぬ、「我等の來りて爾等に告ぐる所のものは、決して巧飾虚誕に従ふにあらず、乃ち曾て其大衆を目撃したるものなり云々」(ペトロ後書一の十六、十七)、曾に目撃したる而已ならず、彼等は實に其師より教誨され、譴責されて、親子番なるざるの関連ありたるものなり、

而して他の一方より觀察するに、彼等の師なる基督は、總ての事皆之を彼等に語り知らしめたりと自白しぬ、其語に曰く「我は凡て我父より學び得たる所の事、皆之を爾等に知らしめぬ」(ジョン傳十五の十六)、又曰く「譬喩によらずして天國の奧義を知るを許されたる者は、唯だ爾等のみ」(マテオ傳十三の十一)、又彼等も此の如く優遇せられ、教誨せられて、耶蘇基督の人と爲り如何と、其言動如何を能く知悉したるが故に其弟子となりて、日夜其側に待したるものなる時は、益々其記載する所の眞實なるを知らるゝなり、要するに彼等は多年待坐して薰陶誘掖せられたる師の言動に耳目眩惑して、其視ざる所を視たりと云ひ、其聞かざる所を聞きたりと斷言するまで欺かれたりと云ふが如き事は萬々之なきなり。

彼等の欺かれざりし一事は、以上論證する所によりて明かなり、彼等が人を欺かんと企てたりとの如きは、尙更謂れなき事なり、抑も人の世を欺かんと欲するや、如何なる惡逆の者と雖、事の已れに一大利益となるを認めざる以上は、決して斯る卑劣の業を企つるを欲する者にあらず、巨萬の産を作るとを得るか、赫々の名を占むるを得

(其二)使徒の人の人を欺くを欲せざりし證

るか、若くは他に一大利益を握るを得るを認めずして、此の如き卑劣の業を企つるが如きは、如何なる悪人と雖恐くは之を爲さざるべし、蓋し人は理由なく人を欺くを欲する者にあらざればなり、良しや世を欺くを樂みとして之を企つるとありとするも、是れが爲には權變術數の才と大膽不敵の量なかるべからず、何となれば斯の如き大業を企つるに當りては、少くとも其目的を達するとを得と云ふ希望自信なかるべからざればなり、初めより能はずと確信する所を企てんとするが如き愚人は、恐くは天下に一人も之れあらざるべし、能はざる事ならんには、人は之を夢寐にも想起せざるを常とす、然り而して彼等使徒は果して如何なる人物なりしや、果して斯の如き大膽不敵の事業を企圖するに堪へたる者なりしや、歴史は而かも彼等自らの手に成りたる歴史は、明に其人と爲り如何を吾人に知らしむるなり。

然らば彼等は如何なる人間なりしぞ、曰く名聲もなく、學問もなく、財産もなく、信用もなく、又世事の経験もなき平々凡々たる愚人のみ、漁業を以て自己の職分となし、交る所は同業の漁翁、語る所は綸網の一事、然り、彼等の中の一人を除くの外は、皆

此の如き身分なりき、然らば則ち此の如き身分の人間は、如何なる利益、如何なる目算ありてか、耶蘇基督の歴史を空中より案出して、世界中の人民を欺罔し、天下到處に彼を唯一の神として崇拜せしめんとを企てしぞ、今日其企業が幸にして成就せられたればこそ、彼等の光榮は九天の上に揚り、彼等の名聲は四海の表に響きたるなれ、彼等が初めて「耶蘇基督は神なり」と斷言して、之を世界に證明せんとしたる當時は果して如何なりしぞ、然り、彼等は之を證明せんが爲め、果して如何なる利益を目指したりしぞ、金錢か、基督の使役に甘んじたる者、焉んぞ之を語らん、基督自らも之を有するを彼等に禁じたり、而して彼等は己れの所持せる凡てを放棄して、彼に隨從したる者、彼等自らも囊中無一物なるを以て幸福なりと満足し居たる者なり、然らば名譽か、巧に舟を漕ぎ、巧に網を投ずるの外、餘事あるを知らざりし漁夫に取りては、事餘り光り輝き過ぎるにはあらずや、設令此の如き目的を以て企てたりと假定するも、眼中一丁字なき彼等に取りては、世界に名聲を馳せしめんと云ふが如き觀念は、彼等の脳髓に如何にして起りたるやを怪する、なり、世の哲學者の中に入りて之と議論を

上下し、斬然其頭角を顯はさんと云ふが如き志望は、哲學の哲の字をも知らざりし彼等に取りては、余りに奇怪千萬、笑止至極なる沙汰にあらずや、さし事茲に出でたりとするも、世路の艱難に遭遇して、凌辱を蒙り、鞭撻に預り、天下第一の愚民の如く輕蔑せられ、世界無比の狂人の如く嘲笑せらるゝに至りたるるとき、必ずや己れの企業に厭倦して、之を中途に放棄し去りたるや明なり、唯々然り、名譽に達する目途を以て斯る企業に出でたりとせば、彼等は實に信じられざる程狂愚なりしと謂ふべし、然らば遂に如何なるとの爲めとするか、他なし、彼等が斯の如く世路の艱難を排しつゝも、猶且基督の神なる事實、及び其不可思議なる奇跡を天下に公言弘布して、毫も撓まらず屈せざりしは、全く彼等が其公言弘布する所の事跡の一大真理なるを確信疑はざりしが爲なり、彼等の堅忍不拔なりし堪忍力は、千難萬艱を排したり、彼等の世界に濶歩したりし動作は、彼等の一人が吐露したる左の言によらずんば、到底解釋するを得ざるなり、其言に曰く「吾人は實際目撃せる故に之を語らざるを得ず」、斯の如く抵抗すべからざる真理の確信ありたればこそ、萬事を睹して世界萬邦に之を證明したるなれ、

而して彼等か此一大真理の證明中に嘗め喫したる苦楚、疲勞、凌辱、虐遇等を致命の鮮血を以て加冠し了りたるを見れば、彼等の自信の如何程堅固なりしか、彼等の心意の如何程純潔なりしかを知るに足るなり、是れ實に黄金の爲め、名譽の爲め、將た又歡樂の爲めに企圖するとは、一大相違のある事業にあらずや、嗚呼彼等豈人を欺かんと欲したる者ならんや。

(其三)使徒の人を欺くを能はざりし能

使徒の人を欺かんと欲せざりしは、以上證明するが如し、今又假りに人を欺かんと欲したりとするも、果して其志を果すを得たりしや否やを考一考せよ、先づ斯る事業を果さんとするには、彼等先づ相互に相談の上謀じ合せたるものと云はざる可からず、而して彼等の員數は、實に十二人なりき、而かも此十二人は何れも正意誠心の人、質朴實直の者にして、詐譎欺罔の如き其何物たるをも知らざりしものにてありたり、然るに斯の如き人間が、一の隠險なる事業の爲め相互に一致協力して、其事業の成就せらるゝに至るまで、毫も分裂離散の心を起さず、私利私益の觀念に至りては、一點も之を此公共の事業に混へざりき、嗚呼斯の如き事果して世に其類例あるや否や、吾人

は日々世上に於て同志相糾合して一の社を立て、若くは一の業を企つる者あるを見るに、其初めは暫く相黨引して一致合同すと雖、一朝毀譽利害の相分るゝに至りてや、忽ち分裂離散し、甚しきは昨日の親友は今日の仇敵、遂には反目嫉視して吳越管ならざるに至るを目撃すると一にして足らず、若くは同志の親友相謀りて、善良なる目的の下に一の事業を創始し、而かも其創始するや尤も正しく、尤も直くして、其善良なる目的の達するに至るまで、如何なる毀譽、如何なる利害に際會するも、毫も分離の心を起さず、不平の念を懐かず、千難萬艱を排して堅忍確守するが如きに至りては、世の稀れに見る所なり、而かも正人君子の間にあらずんば、到底見る能はざる所なり、故に世の人之を見て不思議の感を起さるはなし、何となれば人間世界は利己心なる者之が法となりて、人の凡てを支配し居るものなるに、然く利害の觀念を離れて、堅忍不拔の同志が其目的の達するまで約を履行するとは、實に意想外の事なるを以てなり、正人君子の合同にして既に然り、然らば十二人の漁夫が、人を欺き世を誑すの目的を以て相糾合し、其志の成就せらるゝに至るまで堅合強同して、中途に如何なる辛酸苦

痛を嘗むるも、如何なる虐遇極刑に逢ふとも、敢て一人同僚の欺人誑世に在るとを白状せず、敢て一人同志の友の詐人誑者なることを顯表せず、其企圖の全く遂行せらるゝに至るまで、死生苦樂を共にせんことを誓ひたる者ありたりとせば如何ぞや、此の如きの假定事業は吾人其決して實際に成就せられざることを斷言して疑はざるなり、然り、後世如何なる不思議ありとするも、世に此の如き假定事業の成就せらるゝ、不思議を見るなけん、勿論吾人は權謀詐誘の大奸人にして、同臭一味相黨引して、酷遇虐待を物どもせず、嘲笑罵詈を馬耳東風に聞流して、斷頭場裡一片の露と消ゆるまで、其罪逆を隠蔽せる者ありたるを、過去の歴史に於て屢々聞見しぬ、然れども耶蘇基督の弟子十二人を目するに、此の如き大奸人を以てするは、剩りに不義なる凌辱を吐き懸くる沙汰にはあらずや、彼等十二人の死生言行を仔細に點検するときは、決して此の如き比較を許さるるなり、否寧ろ彼等が善始善終の事業を見一見するときは、彼等の偉功偉勳の中に一大真理の潜伏したるを發見して、感奮の念に打たれざる者は、一人も之あらざるべし。

余は敢て反問す、然らば則ち此の如き十二の漁夫にして、嘗に自國のみならず、全地の迷信を破却し、天下の弊風を掃除して、世界の局面を一變せんとするの企圖は、如何にして之を抱懐するを得たりしぞ、斯の如き企圖は、縦令正人君子、碩學鴻儒の胸中に抱懐せらるゝも、余は猶ほ其成功の覺束なきを覺ゆ、然るを況んや船と網より外餘事あるを知らざりし無學蒙昧の十二漁夫に於てをや、彼等は自からも己等の愚暗怯懦なるを知悉して、之を歴史の上にも自筆したり、斯の如き怯愚の人間は、何者より全地球上の局面を一變せんとする如き大最大智を得たりしぞ、余は再言す、十二の漁夫が欺詐を目途として全地の局面を一變せんと云ふが如きは、如何なる狂愚の腦髓にても想起せられざる企業なるべしと。

然れども假りに一步を譲りて、彼等は思ふよりも奸智に長けたる故、耶蘇基督の歴史を空中より案出して、之を今日の福音書の如くに編成する丈の才幹は十分ありたりとするも、余は言はんとす、彼等は如何なる民に斯の如き歴史を信せしむるを得たりしやと、蓋し恐くば天下一人も之を信する者なかりしならん、請ふ余をして其詳なるを

語らしめよ。

先づ如何なる時代、如何なる土地に於て聖マテオの福音書は編成せられたるものぞ、吾人は歴史に據りて明に知了す、彼れの之を記述したる土地は猶太にして、時代は教主の死後七八年に當るとを、然らば基督の教訓奇蹟等は、此時初めて人々に知られたるものなるか、否決して然らず、聖マテオは單だ使徒等の八年以前より反覆公言したる所、猶太人民の皆明に知悉し居たる所、而かも同人民中より多くの人が歸依して現に信仰し、實行し居たる所を記述したる迄のみ、されば是等の事跡は最早八年以前より、公然世に知れ居たるものと云ふ可し、切言せば、是等の事跡は以て成立てる福音は、最早八年以前より、弘布せられたるものと謂ふべきなり、何れの如何なる處に於てと云は、正しく同福音書に記載せられたる事跡の行はれたる土地に於てなり、基督の復活より五十日を経、猶太の民衆、然り、五十日以前嘗て基督の極刑と死去との現況を目撃したる猶太の民衆は、南北東西より走り來りて一場に相集りたる時、使徒等は公然遲疑なく、忌憚なく、基督の古來約束せられたる眞誠の救主なるを斷言し、

其證據として同基督が其時相集れる民衆の眼前に嘗て行ひたる奇跡を列擧したり、此時に當りては敢て一人使徒の虚言を吐くを訴ふる者なかりき、其の之なかりしは怪むに足らず、耶蘇基督なる者は仍は當時の民衆の記憶に新らたなればなり、彼れが行ひたる奇蹟の紀念は、彼等民衆の腦裡に尙ほ温かなりき、彼れの癒したる病者、彼れの直くしたる跛者、彼れの復明したる盲者、恐くは彼れの蘇生せしめたる死者までも、彼等民衆の群中に現存して、使徒の公言せる所の一々虚ならざるを活證し居たりしならん、去ればこそ此時直に三千人次きに五千人の悔後者、歸信者、受洗者を突嗟の間に來たすを得たるなれ、彼の基督の仇敵なる國老官吏等は、無論使徒の此時の布教を嚴禁したるなれど、使徒を目して虚言者と稱することは、言はんと欲するも敢て一人之を言ふとを得ざりしなり、蓋し基督に眼前接近したる民衆は現に在り、基督の恩惠を蒔きて巡遊したる都邑は尙ほ現に其記憶を存し、猶太の國何如なる寒村僻地に到るも、基督の足跡の印せざる所なかりしを以て、彼等仇敵も到底使徒の公言に反抗するを得ざりしが爲なり、是故に使徒等は縛に就て彼等の眼前に引致せられけるとき、皆公言質

直「我等は實際に目撃耳聞したる所を語りざるを得ず」(使徒行傳四の二十)と語りたるに、彼等仇敵等敢て一人之に反抗する者なかりき、蓋し彼等は此質直眞率の言に答ふる辭を有せざりければなり。

夫れ此の如く基督の死後數年を経過せざるに、其歴史は絶へず反覆せられ、而かも彼れの生存したる國、彼れの死去したる地に於てしたるも、敢て一人其虚を訴ふる者なく、却りて之を聞て一時に數千の歸信者を來すに至りたるを以て、使徒は此歸信者を糾合して、完全なる聖會を同地に組成し、今日に至るまで之を聖人の典範として示すに至りたるなり、基督の死後七八年を経て、聖マテオが其福音書を編成したるは、此當初の信徒の請願に出でたるものにて、是等信徒の用に供せんが爲にてありたり、蓋し其時既に隨信者頗る多くして、隱然隆盛なる一教會を形成したればなり、同聖の福音書の一たび世に出るや、一人も之に反抗を試むる者なかりしは、彼の宗使の布教に於けると毫も異ならざりき、是れ又怪むに足らず、同聖の福音書たる當時の凡ての人民の知悉し居たる所を蒐集して、之を筆記したるまでに止まればなり、勿論彼の猶太人

の中には耶蘇基督の行爲、格別其奇蹟を以て魔術なり、魔力の致す所なりと解釋せんとしたる者はありたれども、彼等の中には奇蹟其物を無せんとしたる者は一人もあらざりき、蓋し是れ不能の一事なるを知りたればなり、是に於て余は立論す、若し果して基督なる者世に存在したるとなくんば、良し存在したりとするも、使徒の福音書に記載せるが如き不思議の事業を一回も行はざりしとせば、何か故に使徒の布教は、基督の死後五十日に凡ての人より斯く謹聽せられたるや、何か故にマテオの福音書は、基督の死後八年目に多くの信徒より斯く歓迎せられたるや、或は注目するにも價せず、辨駁するにも價せざる架空の虚説として、笑艸に之を誦讀したりとせんか、若くは狂氣病院に聞見するが如き狂者の言葉の如くに聞流したりと云はんか、若し果して此の如くなりせば、或者は小説として一時の消閑に讀まれ、或者は狂言憐むべしと見做され、他は皆根も葉もなき話として忘却の墓に埋没せられしならん、試に此事今日日本の東京にありと假定せん、誰か此大都の人民に告ぐるに、七年前一大救主ありて病者を癒し、死者を蘇し、己れ自らも磔刑に處せられて死したれども、死後三日の曉に不

思議にも復活したり云々の語を以てする狂者に信を置く者あらんや、果して此の如き狂者ありとせば、人々は答ふるに足らずとして之を放棄し置かんのみ、左なくば之を一室に閉鎖して猥りに狂言を吐かしめざらんとせんのみ、嗚呼若し果して基督の歴史なるものも此の如き性質のものなりとせば、猶太の人民は今日の吾人と同じ感を以て、之を放任し、之を憫笑し置きたるならん、然らずんば「是れ虚説者なり」の語を以て其傳説せらるゝを止めたりしからん、又果して此の如き性質の歴史ならば、此一言充分之が傳説を防ぐに足りしなるべし、然りと雖彼等猶太人民は「是れ虚説なり」云々の語は一回も其口に發したるとなかりき、勿論使徒を囹圄に鎖したるとはありたり、然れども「耶蘇基督は、爾等の公言するが如く、猶太に存在したる者にあらず、爾等の書に筆するが如き事業を行ひたるものにあらず」と云ふが如き事は、一人も之を口にしたる者なし、彼等は二千年後の今日に至るまで、基督教を嫌棄するとは毫も古昔と異ならず、福音書の如きに至りては、如何にもして他の解釋を加へて之が眞理を埋没せんと畢生盡瘁すと雖、到底其目的を達するを得ずして今日に至れり。

猶太の人民に就て證明せる所は、他の國民に就ても同じ勢力を有するなり、何となれば僅々たる歲月の間に、福音は天下到る處に報告せらるゝに至りたればなり、而して彼の希臘人の如き、羅馬人の如き巧妙致密の人間、實利實業を重んじたる國民は、福音書の如き珍らしき歴史を見て、調査なく之を信用するが如きは決してなさざるべし、若し福音書をして小説の如きものならしめんには、彼等は或は一時の慰を買ふが爲め直に之を購讀したりと云ふとを得るも、福音書は決して斯の如き性質のものにあらず、記せよ、同書の採否は、彼等の言動に大なる影響を及ぼすべきものなりしを、若し福音書を眞實なる歴史なりとせんか、彼等は是れが爲に其行爲を改め、其私欲を制し、其弊風惡俗を矯正せざるを得ざりき、斯くの如く人間の言動に大關係あるものは、何れの代に在りても倉卒の際に採用せらるべきものにあらず、而るを况んや當時の人民に於てをや、若し使徒の語る所にして一點の眞ならざる所ありとせんか、彼等は焉んぞ萬事を捨て、歸信するが如き愚をなさんや、當時に在りては之が眞偽の裁斷は頗る易々たりき、何となれば福音書に録せらるゝ土地時代を隔離すると甚だ近く、殊に羅馬

の天下一統して、東西の交通等洵に容易なりければなり、故に若し福音書にして眞實ならず、其語る所皆架空の虚説なりとせば、當時の人民誰か之を眞なり實なりとして信用する者あらんや、若し之をしも當時の人民に信するを得せしめたりとせば、茲に人あり、頭を足にし、足を頭にして倒行す云々の怪事を信せしむるの、寧ろ容易なるを見るなり、况んや福音書は前述の如く、何れの代に於ても種々の口實を以て攻撃排斥せられたるものなるに於てをや、蓋し斯く攻撃排斥せらるゝの理由は一目瞭然たり、福音書に記載する教理は眞なり、善なり、而して此の眞善なる教理は、人心の擾々たる私欲と氷炭相容れざる者、於是乎人々口實を設け、曲説を加へて、専ら福音書を攻撃す、然れども其實は是を以て自己の私欲を隠蔽せんと務むるに外ならざるなり、嗚呼何れの代の人間か私欲なからん、是れ實に何れの代に於ても福音書の排斥せらるゝ所になり、されば若し斯の如き性質の書にして、基督及使徒の生存したる土地時代の人々より信用せられたりとするときは、其書中に語る所の眞理は、炳然日を睹るよりも明かにして、到底之を抹却し、埋没し、隠蔽する能はざる事實なるを知るに足るなり、

嗚呼福音書の眞實は、斯の如く當時の人民をして、止むを得ざるの白狀に及ばしめたり。

是に到て一の疑問生ず、基督の歴史及び其中に語らるゝ事跡にして、果して斯の如く當時の人々に知れたりとせば、何故基督教徒の外に、此事を書き傳へたるもの、斯く鮮少なるやと云ふ事はなり、此疑問一見價值あるが如くに思はる、又實に人をして其何故なるやを疑はしむるに足る、然れども少しく思を廻らして之を考ふるときは、疑團忽ち氷解するに至るなり、先づ當時の學者にして其遺書を後世に傳へたる者は、其數洵に鮮少なりしを知らざるべからず、然れども若し筆を採りて事を記したる者ありたるときは、必ず言基督の歴史に及ばざる者はなかりき、余は今當時の猶太人と外教人の學者が、基督に就き、其教法に就き、及び其弟子に就て記載したる例證を、茲に一々引用するを得れども、是れよりは他に一層強固なる應答となるべきものあるを以て、姑く前者を措ひて後者を採らすとす。

當初基督
公教に歸

教會創業の當時に在りては、歸順して基督教信者となたりる者は、悉く皆猶太人と外

信したる
者は往々
皆一代の
人傑

教人にてありたり、蓋し此等の者を除ひて他に人なかりければなり、而して是等の人々が當時基督の人となり如何をも究めず、其言行、其教理の何物たるやをも講せずして、謂はゞ迷信によりて知らずして歸信したりと謂ふとは能はざる事なり、其時の歸誠者は何れも皆無學文盲、無智無材の凡人なりとせば兎も角も、碩學鴻儒、強記博覽、往々一代の偉人と仰がれたる者にして、當時の外教者中一人も之に比肩すべき學者なき程なりと云はるゝときは、迷信以て基督教に歸依したりと謂ふが如きは、事の實際を知らざる一大謬見と云はざるべからず、人若し疑はゞ、請ふ試に當時の歸誠者、聖ジユスチノ、テルトリヤン、ラクタンヌ、聖シンプリアン等を見よ、當時の外教學者中能く之と伯仲して、議論を上下するに堪へたる者果して幾人ありしぞ、而して是等の歸誠者は、其初め何れも皆外教者にて、其歸依したるは正しく基督の神なるを認めたるが爲めなり、然らば是等聖賢の福音書の眞實に對する證據は、當時の外教學者の言よりも勢力なしと言ふを得るか、余は却りて其勢力の數層大なるを見るなり、何となれば是等の聖賢は當時の外教學者の如く、機に依り折に觸れて、基督教の事蹟を其書

翰若くは歴史に記載したるとは、大に其趣を異にして、福音書の眞實に對しては飽く迄も講究し、講究したる上之を信奉し、信奉したる上一死以て之を證明したる者なればなり、然り、彼等が生命を擲つて致命の鮮血を流したるは、正しく福音書の眞實に對せる希望と信仰とに基きたるが爲にして、此二徳を失はんより萬死甘んずべしと確信したるに職由するなり、去れば是等偉大の人物及び當時致命したる幾百千萬の聖人の證據は、何事をも賭せずして、時機に觸れたるまゝに基督の言行を記載したる外教學者の證據と、決して日を同ふして語るべからざるあり、彼等は元と皆外教者、故に其證據は外教者の證據として見るべし、後日講究して歸誠し、血と死とを以て、聖徳の一大典範を世に示しつゝ之を證明したる者、故に其證據は強固不拔なる一大證據として探ることを得るなり、而して斯く生命を賭して證明したる者の員數其幾百千萬なるを知らざる時は、愈々益々其證據の確然牢固なるを見るなり、請ふ試に之を外教學者の身にして考一考せよ、當時外教學者の中最も其聲名を馳せたる者は、タシトとプリニウスなり、今此二個の學者が單に時機に觸れて福音書の事跡を論じたるに止まらずして、己れ自らも基督教信徒となりて、同教の致命諸聖の如く、一死以て之を證明したりと假定せよ、斯る場合には此二個の學者の證據爲に其勢力を失ひたりと云ふことを得るや否や、寧ろ却つて其致命の血印の爲めに効力を一倍したりと云ふべきにわらずや、然り而して此假定は則ち是れ實際に行はれたるなり、彼の教會當初の基督教徒は皆(然り一人をも除かず)猶太人と外教人との歸誠者にして、福音書の眞實を血印を捺して證明したるものなればなり、蓋し彼等當時の基督教徒に取りても、吾人今日の基督教徒に取りても、耶蘇基督の歴史所謂福音書は、信仰と希望との基く一大寶典なればなり。

以上論じ來る所を考ふるときは、設令使徒が人を欺き世を誑さんと欲したりとするも、設令今日見るが如き四福音書を空中より案出して、之を書に編成するの知能ありたりとするも、又設令全世界に横行濶歩して此架空の虚説を公布するの膽量ありたりとするも、彼等は決して之を眞なり實なりと信せしめて、其目的を達するとは、自國猶太に於ても、海外の他國に於ても、恐くば又唯だの一人に就ても、能はざりしことは、

彰々乎として疑を容るべからざるなり。

余は以上の證論業に已に充分なりと思考す、然れども尙は歩を進めて證論の上に證論を堆積し、以て反對論者を證論堆積の裡に沈壓せしめて、答ふるに辭なき窮極の境に至らしめんとす、蓋し吾人には他に確固不拔なる、又前者よりも更に有益有用なる證據は、層々積んで山を成せばなり。

吾人今福音書其物を手に採りて仔細に之を檢覈し、果して斯の如き書世を欺かんとする欺騙漢の作なるや否を見ん、苟も福音書を一讀したる者、若くは少しく思を沈めて一閱するの勞を取る者あらば、必ず此事の能はざるを斷言して遲疑するなからんとす、欺騙者を如何なる人間なりと假定するも、同書の趣旨の如き事項を想起し、同書之文章の如き語調句法を以て之を描寫することは、到底能はざるなり、乃ち福音書の内容を考察するも、其外容を觀察するも、決して欺騙者の手に成る能はざる著作なるとは明瞭なり。

外容の證

先づ其外容を考察せん 蓋し吾人の眼前に一層目立ちて顯はるゝものは是な

ればなり、同書は如何にして描寫せられあるやを看よ、洵に奇怪なり、緒言なるものは一も之なく、序文なるものは一も之なく、冒頭なるもの又一も之なし、著者は單刀直入、直に本文に入れり、其記する所何物何事なるや、毫も讀者に前知せしめず、宛も凡ての人々に知れ渡りたる公然の事跡を語るが如く然り、前人の語りたる所を順次記載すると云つて、編者の目的を言顯したるものは、獨り聖ルカのみ、他の三福音者は直前直入、直に本文の記事に採筆したり、誰か之を書きたるや、同書を讀みたるのみにては、知る能はず、記事のみ巻物の開けるが如く眼前に現れ出で、筆を採りたる者の手は、何處にも其跡を示さず、其記する所の事跡如何なる性質のものとも雖も、著者は一言も之に添へず、單に語るべき事のみを語りて、誇大にし、奇怪にし、人心を喜ばしめ、好奇心を樂ましめ、若くは人の信用を釣らん等の爲には、片言隻句をも追加せず、偶々自己の言行に就て記さるべからざる場合に當りたる時は、讀者をして如何に輕視侮蔑の念を起さしむるにも係らず、有體に自己の實狀を描き出し、愚暗、怯懦、相互の嫉妬、其師の言を毫も解する能はざること、師の厄介となり、重荷とな

りて、其堪忍と全善のみにて辛抱せらるゝを得たること等、表裏なく之を記載したり、
 洵に質直朴忠と云ふべきなり、其師基督の言動を記するに當りても、亦此眞率の心情紙
 上に顯はる、彼等は猶太人が既來の基督よりも權能あり、勢力あり、光榮ある救主を
 翹望し、救主來らば己等をして世界の全權を握らしむるならんと想像し居たるとを知
 了し居たるや否やは、福音書を讀んで毫も見はれざるなり、唯だ確たることは、彼等
 が是等の事に毫も留意せざりしこと是なり、彼等は基督の貧窮なること、微弱なるこ
 と、及び其屈辱、處刑、死去の事まで有體に語りたり、彼等は斯の如き事柄を語りて、
 同國人民の思想感情に衝突すと云ふことを毫も知らざりしが如し、若し彼等にして斯
 の如き基督を以て救主と仰がしむるの意なりせば、彼等は好んで其目的を達するを得
 ざる道を取りたりと謂はざるべからず、茲に到てや愚も亦太甚し、其愚及ぶべからず
 とは彼等の謂なるべし、彼等にして果して人に信せしめんと欲する意ならんには、曷
 らず斯の如き愚策に出でんや、寧ろ其欺かんと欲する人民の觀念先入等を能く知了し、
 成るべく之に適合せんことを務めたるなるべし、少くとも彼等の救主と仰がしめんと

する者の奇怪なる言動に就て、多少の説明解釋を加へたるなるべし、然るに説明解釋
 等の事は、彼等一言半句も之を爲さず、猶太人にしても、外教人にしても、彼等の語
 りたる所のみ據るときは、其所謂救主なるものは、一工匠の兒、而かも二人の盜賊
 の中に於て、磔刑に處せられたる者の外見えざるなり、此點に就ては彼等が人を欺か
 んと欲する意なき事は、彰乎として毫も疑を容るゝ能はず、彼等は斯くまで事の眞理
 なるを篤信したるものなり、彼等が其師基督の行ひたる奇跡を語るに至りても、知巧
 以て人を欺かんと欲するが如き跡は毫も見へず、何となれば其珍らしき奇跡、前代未
 聞の不思議なる出來事を語るときにも、平易にして尋常一様の事跡、昨今人々の眼前
 に行はれて、人皆百知百聞せる事を語るが如きなり、同奇跡の行はれたる時、處、人に
 就ても、正直に記したり、故に彼等の福音書は、如何程瑣少微末の事柄に至る迄も、
 容易に彼此參考、前後對照し見ることを得るなり、實に當時の人民に於ては、往々尋
 ぬるのみにて事足りたり、二千年後の今日に在る吾人に至りても、福音書を事の行は
 れたる土地に於て讀むときは、其歴史、其地理、其人情風俗までも、全く相符合する

を見るなり、福音者は實に日常通俗の事柄までも記したりと云ふ事は、到る所に證明せらるゝが如く思はる、若夫れ信じられざる程の一大事跡を語るに至りても、彼等は毫も縁大の筆を弄せず、誇張の言を吐かず、尋常一様知れきたる瑣事を談ずるが如し、之れを解釋するが爲め、之れを信せしむるが爲め、且つは猶太人に之れを採用し易からしめんが爲めには、一言追加の跡なし、然りと雖も若し使徒にして果して人を欺かんとの意ありしならんには、焉んぞ斯の如く語るをなさんや、焉んぞ斯の如く語りて、其反對論者に欺騙漢と看破せらるゝ道と機會とを供するをなさんや。

他に又感驚す可き殊質福音書に備はる、何ぞや、一大不思議なる奇跡を語るに、毫も驚異の辭を用ゐず、毫も感歎の詞を置かず、毫も詳細の記事、誇大の言論、艶麗の筆跡等あらざる事はれなり、基督の事業の如何程驚天動地なるも、如何程振古未聞なるも、福音者は自然平調の語句を以て叙述したるが故に、基督自ら之れを行ひたる當時の平易坦城に異ならず、今基督がラザルを蘇生せしめたる一例を擧げて示さんに。

「耶蘇大聲呼んで曰く、ラザルよ、起きて外に出でよと、死者直に出でたり、手足束ね

られ、面貌覆はれたる儘に、耶蘇曰く、解きて彼れを行はしめよ云々。」

福音者の語りたる所凡て皆此の如し、死者を蘇活せるが如き一大奇跡も、彼等は日常瑣末の事を行へし如く記したり、蓋し耶蘇基督に在りては、死者に命じて立ちに之れを蘇生せしむるが如きは易々たり、故に福音者も亦之れを叙述するに當りて、毫も力を用ひたる跡を示さざるなり、然りと雖も基督の偉大なる事、其權能の廣大なる事は、却て此平易の語調に於て見らるゝなり、言論の巧妙ある、語辭の艶麗なる、辨舌の壯快なる、決して此に及ばざるなり、然れども記せよ、復た是に於て彼等の人を欺かんとせるに非ざる證據の明々白々なることを。

彼等が基督の苦難と死去とを記述するに當りても、其文筆は毫も變更せず、基督の屈辱、苦痛等の記事は、凡て基督躬ら甘受したる當時の如く平穩なり、從容なり、犠牲になりたる基督に就ても、一言同情を呈する言なく、殘酷なりし刑吏に對しても、一言憤怒の語氣なく、不義不當なりし宣告に就ても、猶太人民の忘恩の所爲に就ても、寸毫省慮せる跡を見はさず、又も救主基督の心事を解釋して、夥多の人の蹟を避けしめ

んが爲めには、一言も費さずして、全く事の行はれたるを有の儘に叙述したるのみ、而かも其叙述の精確眞誠なるは、到底尋常一様の事柄を述べたりとは思はれざるものありて、人をして活ける畫面を觀望するが如き感をなさしむ、然り、基督は寔に福音書の中に生息行歩して、此に活き、此に行ひ、此に語り居るが如き觀あり、隨て福音書を読むときは、基督を見、基督を聞き、基督と共に相隨伴し居るが如く感せらるゝものなり、而して此福音書を記したる者は、一人に止まらず、四人の異なる記者、各自相異なる點より觀察して、隨意に之れを著述したるを見るときは、猶一層珍らしき感起るなり、何となれば四人の記者が斯く其觀察の點を異にし、其記述の時代を殊にせるにも係らず、均しく耶蘇基督の人と爲りを畫けるとき、彼此全く相符合して寸分違はざるを見ればなり、實に耶蘇基督の相貌は、四人の福音者の精神中に活けるが如し、試に聖マテオの福音書を見よ、聖ルカの見よ、聖ジョアンの見よ、作者異なり、故に其文章も無論異なり、然れども其書中の耶蘇基督は毫も異なる所なし、彼此に在りて同一なり、故に四人の福音者ありと云ふと雖も、其實只一人の福音者のみありたるが如く感想せらるゝなり。

然れども人或は云はん、斯く福音者の相照合せるは、彼此相互に謀じ合せて、同一の歴史を編し、同一の基督を畫かんと務めたる結果なり、替言せば、彼等は斯くして人を欺かんと企てたるものなりと、若し果して斯る意に出でたりとせんか、必ずや斯く複雑せる怪事を詳記するに當りて、全く同一の記事を掲げて、一點相違の點なからしめんことを務めたるや明かなり、然るに事此に出でず、各自任意に記述して、毫も他人の記事に顧慮せざりき、彼等は各々其感じたる所、各々其記憶したる所のみを記載し、而かも自らは其記載せる所の眞理なるを堅く信じて、毫も自己の記事の他人の記事に合ふや否やに顧慮せざりしなり、各自見たる所、聞きたる所を自家一片の良心によりて録したるのみ、是故に同一の事跡も、往々異様の方道を以て語られ、若くは彼れに記する所此れに録せざる等の事間々之れあるを見るなり。

然れども人又云はん、此相違焉んぞ彼等の人を欺かんとするの巧知より出でざるを保せんやと、若果して斯の如くんば、少くも彼等は彼此撞突せるが如き事柄を記載せ

ざりしならん、而して彼等は毫も茲に省慮せざりしを見る、何んとなれば福音書の中には彼此相参考するを得ざる句調、語氣、條章等一にして足らず、(幸にして此事は須要の教理に關せず、)是又福音を解せんと欲する今日の吾人に、往々解釋し難き章句の認めらるゝ所以なり、然れども彼等福音者が正意誠心に之れを叙述したりと假定するときは、此事毫も怪むに足らず、何となれば余の前記せるが如く、彼等は自己の心に適せる所を、各自任意に叙述したりと雖、事跡を目睹したる同僚の間に於ては、各自の語る所、如何にして又如何なる點に於て、相符合し居るや否やを明かに認めらる、余は此の如き點の相違は、叙述の際自然に生じ來る事なるを示さんが爲め、左に一例を案出せん。

今茲に四人の記者ありと假定し、此四人の記者をして復雜せる全一の出來事、例へば難船の始末を語らしめよ、四人何れも當時の顛末を實際に目撃し、又何れも實際に目撃したる通りに語りて、人を欺くが如き惡意毫も之なしとするも、其語るの際に當り、事少しく詳細綿密に涉るときは、思はず知らず一見撞着せるが如き言、若くは殊別の

解釋なくんば、餘人に解せられざるが如き言を發するは、往々避く可からざる結果ならんとす、彼等實際に目撃したる記者に於ては、此點の何れに合するや否やを明かに知るとを得ん、然れども此顛末を實視せざる讀者に於ては、之れを知るに由なきなり。

福音者の間に一見撞突せるが如く思はる事項の語られあるも、蓋し亦此の如き理由に依るものなり。

彼の不信の徒は之を機會にして、福音書の眞實を攻撃し、以て自ら得たりとするが如きは、洵に笑止の至なり、少しく思慮を靜めて考察するときは、斯る些細の相違は、今日の吾人に於てこそ解する能はざる(疑點)なれ、相違其物として觀察するときは、却て福音者の正意誠心なりし事を顯表する明證となるものなり、然らば此一點より考ふるも、福音者の人を欺かんが爲に、基督の歴史を空中より案出したるに非らざるを知るに足るなり。

夫れ如何なる奸知に長けたる欺騙漢と雖、人を欺かんが爲めに、今日見るが如き福

音書を編せんとする者はなかるべし、況んや知もなく、術もなく、又才學もなき愚昧ある十二漁夫に於てをや、此の如き事は夢寐にも想起するを得ざりしなる可し、又設令之を想起したりとするも、焉んぞ之を實際に施行して、其目的を達するを得んや、然らば則ち福音書の外容を仔細に分析して考ふるも、同書の眞實を疑惑に附するとは、底到能はざるを見るなり、若夫れ全書の内容則ち全書の趣旨其物を分析し見るに至りては、事益々明瞭となり、如何なる反對論者と雖、正理を知認する以上は、「事皆眞實なり」との言を白状せざるべからざるに至る可し、請ふ余をして是れより福音書の内容如何を觀察せしめよ。

内容の證

福音書の内容とは何ぞ—古來載籍多しと雖、同書の旨意の如く定義するに困難なるものは恐くは之れあらざる可し、之を歴史と云はんか、其記する所事跡のみに止まらずして、一の教理を含蓄するを奈何せん、之を道德書と云はんか、其載する所金言格語のみに止まらずして、一人物の性行如何を叙述せるを奈何せん、然り、福音書は實に孔子の論語の如きものにも非ず、每瑟の律書の如きものにも非ず、釋氏の大乗小

乗の如きものにも非ず、將又哲學書神學書なりとも定義するを得ず、頗る之れが命名に困難なり、蓋し同書は哲學書の如く、眞理の探究、道義の實踐に達せしむる方道を記載したるものにも非ず、又神學書の如く、信ず可き教理と、守る可き誠命とを井然たる秩序によつて證論したるものにも非らざる事は、一讀して直ちに知るを得ればなり。

福音書は
耶穌基督
の寫眞鏡

福音書は實に一種特別、振古唯一の珍書、古今東西の書籍に就て、之れが類例を求めんと欲するも、見る能はず、但だ吾人の斷然確言するを得るは、福音書は耶穌基督の性行其物に外ならずと云ふ事はなり、同書に讀まる、基督、同書に語れる基督、同書に行へる基督は、昔者同國の人民の中にありて、其弟子と共に言動したる基督と毫も異なる所なし、其一語一默、一舉一動明かに同書に見はれて、眞個に活ける基督の相貌を眼前に觀望するが如し、基督今日出現して其本色を顯すと雖、恐くは亦此に過ぎざる可し、其奇蹟、其教訓、其苦難の如きは、全能全智全善の盛徳を發揮して、宛然一基督を種々の方面に示すが如し、若夫れ當代に行はれたる他の事跡を叙述するあら

ば、唯だ是れ一基督の性行に一層の正確、一層の光彩を添へたるまでのみ、諸を譬ふるに、畫中の人物に、四圍の山水花鳥が趣味を添へて、益々其人物を鮮明ならしむるに異ならざるなり、要するに福音者は何事を語るも、其歸する所は皆一のみ、曰く基督是なり、彼等は眼中他事なし、唯だ一の基督あるのみ、是に由りて之れを觀れば、福音書の内容即ち同書の真髓たる本旨は、耶穌基督其人なりと斷定するを得るなり、然らば則ち福音者が同書の本旨を空中より案出するを得ずと論ずることは、耶穌基督其人を案出するを得ずと云ふと異語同義の言論なるを見る、別言せば、福音者の畫きたる如き耶穌基督が、若し果して實際に存在せざりせば、彼等は到底斯の如き人物を想像して、之を畫中の主人公とするを得ざりしならんと云ふと是なり。

試みに猶太の作者若くは他國の作者をして、一大人物(例せば大知者若くは大徳者)の理想を畫かしめよ、彼等將に如何せんとする、必ずや先づ才學を以て一世に鳴り、德行を以て古今に輝ける自國の人物を想起し、其人物の赫然炳耀せる特質本色を總合して、以て之を意中の理想的人物に配附せんとするや明かなり、加旃ならず之に施すに時代

人物を描
寫する理
法

の色を以てし、舊時の容として務めて時の嗜好に適合せしむる事、是又作者必ず用意の在る所ならん、諸を日本の作者にして考ふるも、亦此の如し、今若し明治維新の一大人物を理想の上に畫かんと欲する者ありとせば、必ず先ず往時の人傑を捕捉し來り、其勇氣、其忠誠、其才學等を採り、之に施すに十九世紀の相貌風彩を以てするや必然なり、又此の如く理想せられたる人物が、日本現時の嗜好に適するは言を俟たず、何となれば眞個に古來の英漢人傑を凌駕する當代の一大人物として現出すればなり、斯の如き理想は、古今東西の作者一般に見受けらるゝ所にして、何れの代の詩人、何れの國の史家と雖、皆此の外に出でざるなり。

彼等福音者の耶穌基督を畫きたるも亦此の如くなしたるや、曰く然らず、彼等は完全無缺の一人材、間然する所なき一聖人を其書中に畫かんと欲しつゝ、秋毫も自國當代の人物より假借したる所なし、却りて振古以來自國に全く類例の無き一人物を描寫したり、然れども是れ決して其國に名聲を轟かしたる聖賢の缺乏したるが爲めにわらざりしなり、今單に當時の人傑をのみ擧ぐるも、彼のイレルの如き、ガマリエルの如

福音者の
描寫した
る基督は
自國に類
例なし

き、又彼の長老サムエルの如き、孰れも皆當時錚々の人物、青史之が賢名を傳へ、國人今仍ほ嘖々之が才學を稱揚して、海外の人士に誇示す、而して福音者の畫きたる耶蘇基督は、果して如何なる點に於て、是等の人物と接近類似せるや、吾人は未だ彼此の間に類似せる點の一あるを見ず、寧ろ事皆全く相反せるを認むるなり、試みに見よ、是等の人物は猶太の人民中に在りて、高遠なる道理を愛し、始終其議論を戦はしたる者なり、然るに耶蘇基督は如何、彼れは一回も議論せず、唯問はれて答へ、教へて倦まざりしのみ、彼等は他の猶太人の如く、自國の民と異邦の民との間に區別を立て、猶太人のみ人、異邦人は人にあらざるが如く蔑視せり、猶太人中に在りても、自己と人民との間に嶄然踰ゆべからざる城壁を設けて、傲然唯我獨尊なるを自負せり、耶蘇基督は然らず、勿論彼は猶太人民に教ゆるを以て始となしたれども、(蓋し故郷を先きにするは愛徳の順なればなり)其教は猶太人民にのみ限らずして、他國の人民をも抱きたり、其救贖の大恩の如きは、全世界の人民に施さる、是故に彼は其弟子を遣はして世界萬國に布教するを命じたり、而して之を爲すの言動に於ては、毫も倨傲の容なく、

毫も剛愎の跡なく、其温良なる、其恭謙なる人の得て及ぶ所に非ず、然れども其温良恭謙の裡にも、其教理の高遠なるは天の如く、其功業の偉大なるは山の如くなりき、尙ほ耶蘇基督と彼等人物との區別を求めば、彼等は毎瑟の法の文字にのみ拘泥して、其一字一句、一點一畫を公然尊重しつゝ、一方よりは有らゆる譎辨を逞ふして、法の眞意を曲解しつゝ、務めて之が遵奉を曖昧にせんとせり、耶蘇基督に至りては全く之に異なり、彼は法の意を探つて文を探らず、精神を取つて形體を取らざりき、彼は法の意を曲解せずして、之を實行したり、完成したり、其解釋の如きは、眞に是れ全知の反響、而して其性情の純朴なるは、洵に是れ眞理を抱ける者の明證なり、然れども余は今斯の如く彼此相違の諸點を列擧するを止め、茲に前記の問を再記せんとす、曰く、文なく、學なき四人の粗朴漢は、何處に又如何にして其才學性行の嶄然自國當代の聖賢に卓絶する基督なる者を理想し得たるやと、嗟若し基督なる者果して實際に存在せざりせば、恐くは彼等は之を夢寐にだも想像するを得ざりしならん、基督の尋常人物と全く類を異にせるとは、實に以上述ぶるが如くなればなり、今又此異類の

人物を畫きたる者は唯だの一人ならず、四人の畫工なり、而かも此四人各々時を異にして、任意に畫きたる者と假定せよ、斯の如く畫きたる者が、其工を竣へて完成したる曉に、四人の描寫したる人物全く相同ふして、一見直ちに同一の人物なりと知見することを得せしむるときは、是れ豈此四人の畫工が同一の人物を眼前に目撃したる上、筆を下したりと云ふ明證ならずや、而して福音者の耶蘇基督を畫きたるは、全く此の如し、其數を問へば四人の福音者、其時を問へば前後數十年を距つ、其觀察したる點も異なれば、其記述したる場合も亦殊なり、適々全一の事柄を記載したる事ありとするも、其文章其方道全く相異なり、而るに四人の福音書世に出づるに當りて、書中の耶蘇基督が、彼此全く全一にして、一見直ちに之を知了するを得るに至れるは、是れ豈四人の福音者が實在せる耶蘇基督を眼前に目撃して後、手を下したる明證にあらずや、否らずんば何んぞ此不思議の人物を想像するを得ん、況んや之を同一に描出すをや。

福音者の

若夫れ耶蘇基督の風良にして、自國の人物に毫も其標本を採りたるに非ずとせば、其海

描寫したる基督はた
海外にも類例なし

外の人物に採りたるにあらざるを言ふと待たざるなり、猶太に生出したる者にして、而かも猶太人の相良にあらずとせば、其希臘人羅馬人ならざるや明けし、彼れのアテナ若くはローマの哲學者に類せざるとは、猶ほゼルザレムのファリゼイ人に類せざると一般なり、彼れは世界の人物と全く其類を異にせる異人物なり、又其異なるの甚だしきは、如何なる人物を引き來るも、到底之れに比較する能はざる程なり、昔者有名なる無神論者ルーソーなる者、泰西の孔子ソクラテスを擧げて、耶蘇基督に比せんと試みたり、然れども彼は二者相違の點の多きを見て、遂に彼此の間に左の味ふべき區別を立てたり、曰く

「若しソクラテスの生死にして賢者の生死なりと謂はば、耶蘇基督の生死は神の生死なりと謂はざるを得ず。」

耶蘇基督を以て人間に比較せんと欲する者は、其結果必ず如斯き結言に出でざるはなし、是を以て識者は常に之が比較を立てず、唯だ之を仰望し、唯だ之を尊拜す。

然り而して耶蘇基督は世界の有衆の上に、如斯く超然卓絶して、到底比較並列するを

耶蘇基督

許さずとするときは、世界の人民は遂に之を模範に仰ぐ能はざるが如く思考せらるれども、其實決して然らず、寧ろ耶蘇基督の如く多くの人々に模範と仰がる者は、天地あつて以來一人もあらざる可し、彼は實に全世界に於て多くの隨信者を有し、多くの渴仰者を有す、模範の影響たる彼れの如く偉大、弟子を吸集する彼れの如く過多なる者は、歴史ありて以還他に一人も之れなし、無神論者ウォルテールの言に據るときは、古昔の碩學鴻儒の言行は、其土地の人情風俗にも影響せざりしと云ふ、然るに我耶蘇基督の言動に至りては、一千八百有餘年以來、全世界到る處に大影響を及ぼし、其世道人心に裨益するの偉大なると、實に言語に絶す、苟も福音の弘布せらるゝ所は、如何なる言語風俗の相違あるも、如何なる人情氣象の差異あるも、一朝耶蘇基督の弟子となりたるときは、世界直ちに同意同心し、萬國直ちに一致合同す、人種の黑白を問ふ勿れ、種族の異同言ふとを休めよ、耶蘇基督の模範の前には、全地の有衆皆一意同心のみ、此一事は四海兄弟、萬國一祖にして、世界の人種の同一なるを證して餘りあるが如し、今茲に耶蘇基督の言行に獎勵鼓吹せられたるが爲め、全世界に如何なる偉

大の功業起り、如何なる顯然の徳行行はれたるやを逐一列舉せば、驚天動地の業、空前絶後の徳赫發炳出して、必ずや人の一驚を惹き起さん、然れども余は今之を列舉するの違なし、唯だ茲に一つの注目す可き傳記あるを以て、一言之を云はんとす、此傳記や往々埋滅して世に聞へざれども、其實世の知聞に十分價する書なり、何となれば福音書を除くの外は、此書の如く裨益ある者、此書の如く感驚す可き者他にあらざればなり、請ひ問ふ其傳記とは何ぞや、他なし、聖人傳と稱するもの即是なり、同書は耶蘇基督の聖範を遵守したる聖人の言行を記載したるものなり、是等の聖人は何れも皆徳行の人傑、國土の光榮、人類の名譽と稱揚せらる可き者にして、其元は皆福音より出でたるを以て、之を福音の生産物と稱するも決して過當の言に非ず、是等聖人の耶蘇基督に於けるは、猶は影の形に従ふが如く、響の音に伴ふが如き關係あり、而して其善く相類似接近したるとは、宛も寫本の標本に於けるが如き感あり、彼等の行ひたる美德美譽は、皆是れ其師耶蘇基督に歸す可きものにして、耶蘇基督は嘗に彼等を左右し命令するのみならず、實に亦彼等を鼓舞活動するものなり、彼等は耶蘇基督の

四面に旋繞して、一大美觀の圓周を畫き、宛然太陽其中央に位して、數萬の衆星之に歸向するが如き觀あり、而して此太陽なる耶蘇基督は、千萬の衆星なる彼等を旋動し、照映して、自身固有の善美を以て、光明燦爛たる聖軍を形成す、是れ此聖軍は首領基督と須臾も相離る可からざるものにして、其光榮、其性行、其功勳等皆一基督の影響より煥發し來りたるものなり、是れ豈に世界の一大美觀にあらずや、此の如き一大美觀、基督の教會を除いて他に何所に見受けらるゝや、此の如き完全無缺なる聖軍の一隊果して何處に之あるや、其聖軍の員數の雲の如く霞の如く過多なるを見るに至りては、愈々益々感驚す可きなり、而して此一事は充分余の宿論を證明するに足る、何となれば此一大美觀は何者の結果なるかと其本源を遡搜するときは、他莫し、福音書中に今尙ほ活動せる一耶蘇基督其人なればなり、試に今此の福音書の主公なる耶蘇基督と云ふ人物を、福音者が空中より案出したるものなりと假定せば如何、才學なき四個の愚漢が天下に比類なき耶蘇基督と云ふ人物を想像し出したるすら、既に感驚に堪へざる一事なるに、尙ほ其上斯る想像的人物を以て、世界の人心を革新し、萬民の風俗を一變して、前述の如き完全無缺の聖軍を雲霞の如く輩出せしめたりと云ふ事は、更に一層の驚愕を喫す可き事ならん、借問す、斯の如き偉大なる効果を奏したる稗史小説果して何處にあるや、勿論稗史小説の中にも世道人心に益し、勸善懲惡に功ある者は多々之れある可し、然れども之が熟讀玩味は千萬の聖人を輩出せしめ、之か一閱瞥見は二千年以來凡ての徳花を咲かして、今尙ほ其提出する龜鑑は萬國に則られ、其含蓄せる思想は萬民に實行せられつゝあるものは、吾人福音書を除いて未だ嘗て他に此書あるを聞見したる事なし、孔子の論語と雖、釋氏の經卷と雖、決して斯る偉大の功を奏するものに非ず、況んや想像より案出したる架空の小説として論ずるに於てをや、是故に假令福音書を使徒の空中に架したる樓閣と見做し、書中の主公耶蘇基督を福音者が腦裡より案出したる一人物と看取せんと欲するも、其世界萬國に於て結びたる業々たる徳果と、其天下民人の上に開かしめたる燦爛たる善花は、決して斯く見做し、斯く看取する事を許さざるなり。

基督教外の人の初めて福音書を閲讀するや、其感驚する所耶蘇基督の盛徳美質にはあ

描寫したる基督の外、教者の見以て感驚に堪へずさする所

らずして、寧ろ其言語舉動の平凡尋常なることと、又其生死の際に發露したる人性的弱點とに在るが如し、別言せば、教外の讀者は、基督の高徳の企及す可からざるに感驚せずして、却て神なり天主なりと耳聞したる者が、斯く惘然たる弱質微軀を有したるかど云ふ一事に喫驚す、何となれば言論の高卑は一人の身に合調する能はずと思考すればなり。

然りと雖も少しく心思を静めて熟慮するときは、此高徳と弱質、威能と謙遜の一基督の身の上に合調するは、決して基督の神聖と福音書の眞實に就て、疑惑の念慮を起さしむる基とはならず、却て此二事を確信せしむる明證たるを識別するに難からざるへし、何となれば今試みに猶太人なる四人の作者が、自國の一大人物を捕捉し來りて、之を土地の聖者に卓越する智徳兼備の賢者として景仰せしめ、又之を同國の祖先が翹首待望したる救主として尊拜せしめんが爲に、彼等自己の腦中より一の賢者救主を案出したりと假定よせ、果して今日福音書に讀まるゝ耶穌基督の如き人物を捕捉採用したりと信せらるべきや否や、即ち其生るゝや馬廐に於てし、其長ずるや大工の賤業と

基督の才學の感驚すべき所

執り、嘗て學校に行きたる事もなく、嘗て文學を學びたる事も無くして、工匠を業とするに實に三十年、三十歳に達するや初めて公然世に立て、其高尚なる教理を宣傳し、自ら稱して「天主の子」と揚言したる不可思議の人間を捕捉採用したりと思はるべきや、若し福音者にして果して世界萬民に景仰尊拜せしむ可き人物を案出するの隱謀ありたりとせば、彼等如何に愚庵なりと雖、其案出する人物を山海萬里人得て知る能はざる遠國の出となすべき位の知量は確かに之ありたるならん、何を苦んでか自國猶太の生出にして、國民の百知百見せる工匠の一子を捕捉し、而かも之を其死後幾許ならざるに提出し、當時三尺の童子と雖、福音書を讀んで忽ち其目撃耳聞したる耶穌基督を想起するを得る時代に於てするが如き狂愚を學ばんや、苟も國を欺き人を罔さんとするが如き奸策ありとせば、事必ず此に出でざる可し、若偶々事此に出では、必ず嘲笑蔑視せられなん、福音者も亦書中の主公基督と共に狂愚の冷評を天下に受くるや必然なり、是故に少しく思慮を潜めて福音書を讀む正意あり常識あるの士は、耶穌基督の弱質微軀に驟かずして、却りて當時基督を目撃耳聞したる人民と共に其感驚を同ふ

するに至るなり、曰く「是れ工匠の一子に非ずや、」(マテオ傳十三の五十五)、「彼れ亦工匠を業としたる者、」(マルコ傳六の三三)、「此事何れより來れる、」(同章の一)、吾人未だ嘗て斯の如く語りたる者を聞知したるとなし、」(ジョアン傳七の四十六)、嘗て文字を學びたることなき者にして、如何にして之を知る事を得たる、奇妙奇妙、不思議不思議、當時の猶太の人民は實に斯く驚嘆したり、爾來其教(基督の教)に反對したる教敵論者も、仔細に基督の人と成り如何を檢覈し、彼れが如何にして此高尚なる教を知るを得たるや否やを解釋する能はずして、同じく之を奇怪に歸し、不審に附せり、然れども爲めに彼等は之を書きたる福音者が此等の事を空中より案出したりとは、嘗て其口に出したることはなし、蓋し斯の如く斷定するは、難問を解くにあらずして、單に之を他に移すのみなればなり、何となれば以上の難問を「架空の虚説」を以て解かんとすれば、「四人の狂愚なる猶太人が如何にして斯の如き耶蘇基督を案出するを得たる」と云ふ難問は、亦隨て自然起り來るべきを以てなり。

基督の徳

基督の徳行に至りても亦其學問の如く、吾人に不思議なる感を與へて、容易に解釋する

行の感驚すべき所

を得ざらしむ、之を一見するときは、基督の徳行は毫も非凡の性質を帯びざるが如くにして、全く他の人々の如く行動したるが如く思はる、然れども少しく思を潜めて考察するときには、彼れの徳業は皆不可思議にして、他に之が比類なきを認む、何となれば彼れの行ふや公明正大、彼れの忍ぶや一點間然する所無くして、萬徳を一身に兼有し、萬事を完全の極度に行盡したればなり、試に見よ、今茲に人あり、自ら稱して道徳者と云ふも、其所謂道徳者なる者は單に一の徳をのみ行ひたる者にして、設令之を其極度まで行盡したりとするも、往々は是れが爲めに他の徳行を犠牲に供するが如き嫌なきにあらず、例せば、彼の人温良なりと云ふ、然れども其温良の柔弱に變せざるもの甚だ稀れなり、(少くとも或る場合に於て)、彼れは剛毅なり、堅忍なりと云ふ、然れども其剛毅堅忍の度に過ぎて、剛愎不感に至らざるもの甚だ鮮し、彼れ謙遜なるや、其謙遜忽ち卑怯となる、彼れ大膽なるや、其大膽乍ち傲慢に變性す、世人の所謂道徳者なるものは往々皆如斯ならざるはあし、之を一方に得れば、之れ他方に失し、而して其一方に得たるものも、及ばざれば過ぎ、過ぐれば及ばずと云ふが如く、到底

過不及なき中庸に位せしむるを得ざるを常とす、取蘇基督に至りては全く之に異なり、彼れは先づ一の徳をのみ行ひたる者に非ず、實に萬徳を兼行したるものなり、然り、人間の靈魂肉身を以て行ふを得る徳は、凡て皆之を兼行したり、而して其兼行したる徳は各々皆完全に達し、各々皆中庸に位して、過ぎるともなければ失するともなく、害するものもなければ傷けらるゝものもなく、何れも皆光彩を放ち、何れも皆善美を盡せり、彼れの温良は柔弱に流れず、彼れの謙遜は卑怯に失せず、其堅忍は決して不感に至らず、其剛毅は毫も倨傲の性質を帯びず、皆純乎として完全なり、彼れが如何なる場合に行ひたるも、事皆行ふ可き規矩準繩に合したるを以て、始終過不及の嫌なく、眞個に天下百世の標準となるなり、切言せば、是れ實に善と美の理想ありと云ふべし、而して彼れが此善美の理想を實行したるや、毫も勤勞したる形なく、毫も目立ちたる跡なきを以て、一見直ちに之を認むるに苦む、故に之を感驚し、之を尊重するが爲めには、之を他の道德者と比較して論せざる可からず、是れ實に基督の基督たる所以にして、其特質全く此に存す、即ち其最も不可思議の徳にして、毫も不可思議

の形跡を帯びざる事是なり、是又耶蘇基督の最も模倣し易ふして、又尤も比肩し難き所以なり。

其徳行の價值ある所は、之を他の道德者に比したる者、若くは之を躬行せんと務めたる者にあらんば、容易に認むる能はざるものあり、勿論世の聖賢の言行、若くは哲學者の遺書に就て、善美の理想を求めんと欲する者は、福音書に於て之が同一の理想を認むるとは至難なる可し、何となれば世の所謂聖賢なる者は、嶄然頭角を顯はして、往々尋常人民と其言動を異にしたる者なり、彼等は流俗を隔離すると愈々遠ければ、愈々以て己れを高尙なる者とす、其言や往々壯大、然れども其心事天地に愧ぢざる者は甚だ希なり、其徳行あるものも、有實よりは有名のみ、裏面的よりは表面的のみ、諸を譬ふれば、彼等は演劇の舞臺に行動するものあり、單だ四圍周邊の拍采渴采をのみ是れ要む、彼等の特質とする所は、時俗に異ありて、自己と他の人民との間に踰越す可からざる城壁を置くに在りとなす、彼等は尋常の人民の如く喜怒哀樂の情を外に發露するときは、己れの眞價を失墜すと思ふ、縦令義によりて之を發露するも、猶ほ